

ただの旅人と愉快的な仲間  
間達が異世界から来る  
そうですよ

神崎優

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは自称ただの旅人が愉快的な仲間達と共に異世界へ遊びに行く（笑）物語である。

※これに出てくるオリキャラ達は俺と俺の友人達が考えたオリキャラです。とにかく多いです。とにかく多いです（二回目）。

# 目次

## 問題児編

### プロローグ

第一話 問題児達が異世界から来まし

たよ?

第二話 旅の目的

第三話 白髪の人外様は変なようです

よ?

第四話 最強の問題児コンビ

第五話 白き和装ロリ

第六話 ユウの作戦

第七話 恩恵

第八話 正体

第九話 未元物質

第十話 最凶の問題児

第十一話 吸血少女

第十二話 説明しがたい暴力

第十三話 魔王狩り

第十四話 束の間の休息

第十五話 火龍誕生祭

第十六話 逃走中

第十七話 魔王襲来の知らせ

第十八話 聖十字の槍

第十九話 黒死病の魔王

第二十話 最強種の由縁

第二十一話 異変の原因

58

52

46

39

30

24

17

9

1

65

76

85

92

107

113

120

127

144

155

169

182

192

	第二十二話	決着	203
	第二十三話	旅立ち	215
	【番外編】	人外達の活動調査	229
	キャラ設定：序		
	キャラ設定【人外オリキャラ	主人公	243
	編)		
	デートアライブ編		
	第二十四話	新たななる世界	256
	第二十五話	精霊	273
	第二十六話	ラタトスク	284
	第二十七話	精霊達と人外達	296
307	第二十八話	そうだ、学校に行こう	
	第二十九話	翼の盾と舞う剣	317
	第三十話	神々の遊び（もうネタしかないな）	331
	第三十一話	ある日の雨の日	343
	第三十二話	心の拠り所	368
	第三十三話	嵐の前の静さ	382
	第三十四話	黒き旅人	392
	第三十五話	人類最強VS異世界最強	
	第三十六話	三者三強	403
	第三十七話	秘められた過去	415
455	第三十八話	海旅行での戦い（笑）	436

第三十九話 少女の秘密

第四十話 強さと覚悟

484 467



## 問題児編

## プロローグ

「……………」

「ユウ様？どうされましたか？」

「ん？アークか…」

みなさんはじめまして！俺の名はユウ。ユウⅡクレメンズ。ただの旅人だ。ん？何で「ただの旅人」なのかだって？そんなの簡単だ、なんとなくだ。

…今「えええ」とか思っただろ？え？思ってたない？じゃあいいや。

「ユウ様？」

さつきから俺の事を様付けで読んでいるのは俺の頼れる右腕のアークっていう妖怪だ。

何で妖怪が右腕なのか？そんなの知らん。

「アーク、このところどうなってる？」

「はい…えっと、今は特に何もありません。手紙が来てるくらいで」

「手紙？」

「はい、これです」

アークからその手紙を受け取る瞬間・・・

「チエストオオー!!!」

「イツタアアアイ!!!」

手紙ごとアークの手にチョップを食らわせてみた。まあ理由はちゃんとあるよ？ほんとはだよ？

「何するのですかユウ様?!」

あ、涙目だ。やり過ぎたか。

「いやさ、この手紙開けた瞬間転移する構造だったから、消したんだ」

「そ、そうならそうと早く言ってください!!」

アーク可愛いなく・・・一応説明するがアークは男だからな？俺も男だからな？決して女の子を苛めたとか、ホモではないからな？ただ身長が「それ以上言ったらどうなるか分かりますよね？」・・・おかしいな？アークは読心術出来なかった筈だけだな。

「で、行くのですか？」

「まあ、面白そうだし？」

「・・・止めても無駄ですしね」

「ならOK!」



「ちゃんと帰ってきてくださいよ？」

「・・・俺が留守の間任せたぞ？」

「伊達に何百年勤めていませんから」

「・・・あ、今変に思っただろ？俺人間だけでも人間じゃないからな。ただ長生きしてるだけだ。」

「いつものその服装で行くのですね？」

「ああ」

いつものつていうのは俺が赤い帽子と全身真っ白な服装の事だからそこんとこ説明しとくわ。ちなみに髪の毛も白白真っ白だ。・・・いや長生きしてて白髪だからつておじいちゃんじゃないよ？まだ十六歳だよ俺。

「・・・あ、長い間生きてるからこれだと嘘になるか！まあ後で話してけばいいか。」

「じゃあ行つてくる」

「行つてらっしゃいませ」

そして俺はその場から消えた。

「という訳で着いて来てくれ」

「「だが断る」「」」

「ハモんなよ?!」

え？何でまだここにいるのか？消えたのは俺の能力なんだ♪スゲエだろ！

「家でぐくたらしたいよ」

「わかるそれ（笑）」

「俺も面倒だし」

「ロウウイ！お前は行け！殺すよ」

「何でだよ！」

「俺はノリだったんだけど」

ウンウンオレタチハヘイジヨウウンテンノヨウダ。

「だいたい手紙はお前だけに来たんだろ？なら俺達は行けるのか？」

「平気平気♪だつて俺の能力は知ってるだろ？」

「……ああ……」

「なんだよそのタメ口は!？」

まあコイツらは俺の友人だ。

一人は、栗色のキャップとモコモココートを着たオレンジ色のショートヘアーの青年。  
年。

一人は、真っ黒のコートを着た黒色のショートヘアーの眼鏡をかけた青年。

一人は、茶色と黒色が混ざったボサボサ髪 of 戦場にいる兵士のような青年？

「お、!!」

……まあ無視して、一人は、薄い茶色のショートパンツと黄土色のポロシャツを来てマフラーとニット帽を被って背中に鎌がある青年。

ツツコミたいところがあるだろうが捨て置き、最後の一人は、薄い紺色のジーンズを履き、赤いシャツを着てその上からうす緑色のジャージを着ている青年。

俺か？俺は上に白いシャツと白い魔術師のコートを着て、下はド○ゴン○ールのフ

○ージ○ンしたときの服装だ。勿論白く。髪型がおかしくて、長いから縛ってんだけど重力を少し無視して腰まである髪が完全に硬直しちゃってんだ。あ、固い訳じゃないからな？

「まあ行つてやつても良いけど準備だけはさせてくれよ？」

「分かつてるわそんなこと」

ちなみに俺達は一人を除き全員人外です。

何故なら？俺達チートだからだ。簡単だろ？

「『準備終わったぞ』」

つと、どうやら少し話してただけで準備終わったみたいだな。

「よし、じゃあ掴まれ」

「『『ほい』』」

「・・・なんかお前らハモリ過ぎじゃね？」

「『『気のせい気のせい』』」

「そ、そうか(汗)」

そして俺達は手紙を開けて異世界に飛び立った。

〈異世界〉

「・・・黒ウサギ」

「なんで御座いましよジン坊っちゃん？」

「本当にこれで僕達のコミュニティは救われるのかな」

「Yes! きつと私達のコミュニティを救ってくれるに違いありません！」

「なら、良いけど」

「祈りましょう、今はそれだけしか出来ません」

「・・・うん」

「じゃあ黒ウサギは皆様を案内しに行きます！」

「気を付けてね黒ウサギ」

「はいっ！」

「・・・お願いします・・・僕たちを・・・救ってください」

# 第一話 問題児達が異世界から来ましたよ？

「お〜…ここが箱庭はこにわの世界か〜！」

感動に浸っているが真下に大きな湖がある。

このまま行けば湖ダイブすることになってしまう。

「ここは落ちるべきだな！お前らもそう…。」

ここでユウ以外のメンバーの動向を見てみよう。

一人は、空飛ぶ機械に乗っていて？

一人は、自分の体を変化して背中にジェットエンジンを付けて？

一人は、完全に空を飛んで？

一人は、地面から砂鉄を集めて足場を作って着地して？

「…俺らは落ちるか」

「そうだな」

残り二人はそのまま湖ダイブすることになった。

「大丈夫かお前ら」

「大丈夫だ、問題ない」

そうふざけてる時に隣の方から、

「全くどうなってるのこの世界は！」

「全くそうだけ。これじゃあ下手したらゲームオーバーだったぜ」

何やら俺達（一人だけ）以外にも手紙が届いてこの世界に来た奴らだな。

なんだよ既に他の人材呼んでたんじゃん。

「で？そこの猫を大事に抱えてる貴女は？」



「・・・春日部かすかべ耀よう」

「そう・・・私は久遠くどう飛鳥あすかよ・・・それで？その学ランを着ている不良さんは？」

「これはこれは俺は「逆廻さかまき十六夜いざよいだろ？」・・・！」

突如隣側に居たユウがそう言ってきた。

「・・・へえ？お前面白いな」

「どうして分かったのかしら？」

「心を読ませてもらったわ悪いとは思ったけど」

「・・・心を」

「どうしてそんなことを？ていうか後ろ向きながら？」

「そうじゃないと駄目なんだよ！お前はめんどいことを聞かされたいか？」

「いやよそんなの」

「それが理由だ」

「・・・で？そんな心が読める貴方は？」

「俺はユウⅡクレメンズ。ただの旅人だ」

「「旅人？」」

「そう旅人♪」

「で？他の奴らは？」

十六夜はユウ以外の五人に聞いた。

「俺はロウウイ。能力を持った人だよ」

「俺は零<sup>レイ</sup>だ。基本的にバカなんでよろ♪」

「俺はヤマトだ。サバゲーが大好きだ」

「俺はレオンハート。レオンって呼んでくれ。ロウウイを殺したいなら俺に言えよ」

「何でだよ!？」

「俺はミーレスって言うんだ。宜しくな」

「皆呼ばれたんだろこの手紙に」

「責任者何処だろ？」

その頃迎えに来た黒ウサギは近くの茂みに隠れ状況を伺っていた。何故なら、

(多すぎではないですかこの人数は!?)

人数が多かったからなのだ。

(え? 私は確かあんなに出していませんでしたよね? 何であんなにいるんですか!?! しかも一人は心が読めるってどんな人外様なのでいやがるのですか!?! もしかしたらとんでもない人達を呼んでしまったんじゃないのでしょうか!?!)

ずつうと心の中で心の叫びを出していた。

(で、でもそんな人が私達のコミュニティに入ってくれるならかなりの戦力になるはずです! ここは勇気を振り絞って!!)

黒ウサギが説明するために茂みから出ようとすると向こう側から、

「しようがない。じゃあそこに隠れてる奴に出てきてもらおうか?」

(ヒイツ!?)

そんな声が聞こえた為再び隠れてしまった。

「あら？ 貴方も気付いてたの？」

「当たり前だ、そつちのお前もだろ？」

「風上に立たれたら嫌でも分かる」

「へえ？ お前も面白いな」

「「「「「へ？ 誰か居たの？」」」」」

「「「「「」」」」」

人外？ 達がボケてる間に、

「い、嫌ですね〜皆様そんな・・・」

そう黒ウサギが言い終わる前にある出来事が起きた。

「へ？」

十 六

夜 が

ジャンプして此方の距離に届き、

ユ

ウ

が

その場で消えて十六夜と同じ位置に表れ二人同時に蹴ってきたのだ。地面が少し抉れるほどの威力で。

「いやああー!!？」

「うっさぎっ！」

「ウサギだね」

「お前心を読むのが能力じゃねえのか？」

「あれは体質での能力だ。本命はこつちだ」

「お前本当におもしれえな！」

「何黒ウサギの前で会話してるんですか!？」

「おらあもういつちよ!!」

「ヒヤアー!!？」

もう一度十六夜が蹴りつけ、黒ウサギはちゃんと避けたがその背後にユウが表れ、

「おいしょっー!!」

「イヤアアー!!」

地面に向かって思いっきり投げた。そりやもう勢いよく。

だがそこはウサギなのか空中で回転し綺麗に着地した。

・・・何でスカートの下見えなかったんだ？

「ふうっ・・・」

ため息をついても時すでに遅し、黒ウサギを囲むようにユウを除く八人が集まっていた。

全員で叩くように狙って投げたなら完全に策士である。

「え、えっと（汗）」

「なあ？このウサ耳は本物か？」

「疑うなら全員で思いつきり引っ張れ」

それは黒ウサギにとつて死刑宣告に近かったようで、

「「「「「それもそうか」「」「」「」」」」」

そう言つて八人は同時に引っ張り、

「ミギヤアアー!!?」

綺麗とは程遠い素敵な断末魔のような悲鳴が辺りに響いたのであった。

## 第二話 旅の目的

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「お疲れさん黒ウサギ」

「お疲れさんじゃないです！ 集団暴力も良いところですよ!？」

素敵な蒼い色の髪をなびかせながら黒ウサギは怒りしかない言葉を浴びせてきた。

「とりあえず説明頼むぜ」

十六夜は完全に堪能しきった顔で黒ウサギに催促する。

・・・そんなに良かったなら俺もやつとくべきだったかな？

「き・・・こ・・・え・・・て・・・ま・・・す・・・よ・・・」

「うお?! マジかよ!」

マジでか(汗) このウサギ只者じゃない!

(だまらっしやいこの腹黒様!!)

(コイツ直接脳内に!?)

と、まあネタはほっというて。

「コホン・・・それでは改めまして! ようこそ箱庭の世界へ!」

正直に言っちゃうと説明聞くより実体検した方が俺自身覚えやすいし、分かりやすいんだよね。

黒ウサギごめん。

するとユウの耳に着いてた耳飾りに着いていた水晶がユウの耳の穴に勢いよく入っていった。

(ん？通信か？)

実はこの耳飾り通信機能付きの耳飾りなのだ。

いったいどんな原理で動いてんだか。

(はーい。もしもーし)

(ユウ様ですか？)

勿論これは心の中で話しています。

え？どうやって話してるかって？

.....企業秘密？

(つて、ヴィテじゃないか！)

(そうですけど？どうかされましたか？)

(ああいやなんでもないや)

ちなみにこのヴィテというのはかなりの実力がある女の子である。



どんぐらい強いか？俺が手も足も出ないぐらい強い！．．．いやマジだよ？俺勝てないんだよ？

(で？どうした？何か見えたのか？)

(全くもつてその通りでございます)

ヴィテの能力は役に立つな〜ほんと。

(実はそれとは別にもう一つあります)

(ん？なんだ？)

(あの方が逃げました)

その瞬間俺の思考が一瞬だが完全に停止した。

(・・・マジ？)

(おおマジです)

(冗談だよね？)

(真実です)

(ほんつつとつとつにアイツ逃げちゃったの？)

(そりやあもう清々しいぐらいの勢いで)

だーっ！またかよあんにやろう！アイツなんで逃げるんだよ！イジメか!?!新たなイジメなのか!?!今度こそ取っ捕まえて鎖で縛って手足に杭を刺して頭を粉碎☆玉砕☆

大喝采してやる!!!

(さ、流石にやりすぎではないでしょうか?)

(ヤアアロオオウブツコロシテヤアアル!)

(本題に移らせてくださいね?)

(ヒイツ!?)

うんヴェイテは恐いわ。

(それであの方は今はそちらの世界にいますよ)

(そうかそう・・・か?・・・は?)

(えつとですね、そしてこちらが本題です)

(お、おう!! (汗))

思わず叫び叫びそうになっただけどこはグツと堪える。そうしないと殺される主にヴェイテに。

(実はこことは違う世界に破壊が訪れるようです)

(・・・単体か? 複数か?)

(複数でございます)

(それぞれの場所は?)

(特定は出来ていますがそちらの世界からでは秋頃にならないと移動は出来ません)

秋頃・・・この世界の季節は春のようだな。

植物達から聞いたからな。

でも信用性が少しなさそうだな。

(ですからこれからユウ様にはこのような行動をとってもらいます)

「・・・分かった」

「何がですか!!」

「ウワツ?! 黒ウサギ!」

「ちゃんと聞いてましたか?!」

「どうやらヴィテと会話してたら黒ウサギの話が終わってたようだな。」

「もうみなさんクリアしてしまっただすよ!」

「え? 何を?」

周りを見てみるとユウ以外のメンバー八人は手にトランプの絵札を一枚ずつ持っていた。

クリアしたということは、

「つまり残り四枚の絵札を一発で引かないといけないということか」

「なんで最後まで聞いてなかったんですか御馬鹿様!!」

ペシーンっと、ハリセンで叩かれた。

黒ウサギどっから取り出したし。

「じゃあ引くか」

「と言って台の上のカード一枚手に取る。」

「え!?! いきなり!?!」

十六夜・飛鳥・耀は失敗したなど確信した。

ロウウイ・零・ヤマト・レオン・ミーレスはあのやろうと口を揃えて言った。

「……」

「えつと……ユウさん？」

「ほい絵札」

そう言つて黒ウサギにカードを渡すとそれはなんと残り四枚しかない絵札のカードであつた。

「ええ!?! どうしてですか!?!」

「勘だ」

世の中において絶対的に信用出来ず、なおかつ絶対的に信用されるもの!それが勘だ

!!

「むう、なんか納得出来ませんけど一応皆さんクリアということになります」

「……実はある細工があつただけと言わないでおこう」

「そうだ黒ウサギ一つ質問に答えろや」

十六夜が待ちくたびれたかのように黒ウサギに質問する。

「え？」

その内容はユウの心をたぎらせるものだった。

「この世界は……面白いか？」

### 第三話 白髪の人外様は変なようですよ？

「この世界はとにかくとても面白くとても楽しい世界だつてよ十六夜」

「何故黒ウサギのセリフを取るのですか!？」

「めんどくさそうに喋ろうとしたからだ」

「そ、そんな」

「そうかそうか面白いならいいや」

「そ、それでは皆様ご案内致します!!」

「・・・あ！帰ってきたって、多っ!？」

「ジン坊っちゃんー！多いでございましょう!?!でもとつても頼りになるんですよー!」

「そ、そうなんだ（汗）それでその七名が新しい人達ですか？」

「Yes!こちらの九名様がつて、ええー!?!なんであの金髪で学ラン着てヘッドホン付けて全身で「俺問題児!」って言いそうなオーラを出している人と全身真っ白でせめて赤い帽子も白にしろよってツツコミたくなる摩訶不思議な人はどこ行ったのですか!?!」

「十六夜君ならさつき「ちよつと世界の果て見てくるわ」って言って飛んでいったけど?」

「ユウも「少し十六夜と出掛けてくるわ」と言って一緒に行つたけど?」

「どうして止めなかつたんですか!?!」

「止めてくれるなよ、つて言つてたから」

「行かなきゃいけないんだ、つて言つてたから」

「どうして黒ウサギに言つてくれなかつたんですか!?!」

「黒ウサギには黙つててくれ、つて言われたから」

「大事な事なんだ、って言われたから」

「二人とも楽しそうだったから」

「最後のは信じたくありませんけど嘘です絶体嘘です!!皆さんめんどくさかったただけですよね!!?」

「「「「うん」」」」」

七名が一齐に頷いたから黒ウサギはガツクリと半泣きしながら縮みこんだ。

「えつと・・・黒ウサギ?」

「・・・ジン坊つちゃん逝ってきます」

「漢字が違うよ!?!」

「待ってなさい問題児様方!!!」

黒ウサギが蒼い色の髪を赤ピンク色に変えて颯爽と飛び去っていった。

「・・・では案内します」

「「「「分かった」」」」」



「さてとお前に聞きたいことがあるユウ」

突然十六夜に呼び止められていきなり聞きたいことがあるって言われた。

「なんだ？俺に答えられるものならだいたい答えるぞ」

「じゃあさつそく・・・お前・・・人間じゃないな？」

「！」

「どうなんだ？」

「・・・どうしてそんな話になったのか聞いてもいいか？」

「正確にはまだ確定してないけどな・・・だがお前には三つの違和感があった」  
「三つの違和感？」

「まず一つ目はお前の心を読む能力だ。明らかに人間技ではない」

「それは仕方がないか（汗）」

「で、二つ目だ。あの一瞬で消えるやつだ」

「ん？それなら能力って考えるのが自然じゃないか？お前もそうだし」

「確かに俺のは能力だしお前も能力だろうさ。だがな、黒ウサギが跳んでいくのが分かったらどう？」

「心を読む能力のおかげじゃないのか？」

「いや。お前はあのお嬢様の質問に後ろで答えた。だとすれば相手が後ろにいなければ効果が発揮しない。なのに黒ウサギを追うときお前は常に前を見ていた。これは戦い馴れているからだ」

「ふむふむ・・・で？最後はなんなんだ？」

「悪いがこれはただの仮説だ」

「それでも構わん」

「なら答える。お前は・・・妖あやかしの類いじゃないのか？」

「!!」

「何故ならばお前は常に・・・殺気が漏れているからだ」

「・・・何故だ？」

「考えたことがないのか？なら教えてやるよこういう類いのやつはな・・・皆が怪しいから警戒してるんだよ」

「・・・フフ・・・フフフフ・・・アハハ！」

「・・・」

「スゲエよ！まさかこんな変なキーワードだけでここまで行くなんて！」

「へっ・・・」

「ああ！半分正解だよ」

「・・・はっ？」

「半分だ半分。妖が少し合ってたただけだ」

「それってどういう・・・」

十六夜が言い終わる前に二人の近くの滝から水しぶきが上がりこう言ってきた。

「人間よお前達を試してやろう」

## 第四話 最強の問題児コンビ

一方その頃の黒ウサギは、

「いったいどこに行ったのですかあの御馬鹿様方はー!!」

探しまくっていた。とりあえず超スピードで。

「マズイですよ！もしこの地域を支配している神仏とかに会ったりしたら絶対にギフトゲーム勝負を挑まれてしまうですよ！なんとしても探しだして連れ戻さないと!!」

その時、遠くでとても大きな水しぶきがうち上がった。

「ま、まさかあの二人が!？」

「おい十六夜やりすぎだつて」

「別にどうつてことないだろ？」

「お前の基準で決めるな」

「やっと見つけましたのよー!!!」

「おう黒ウサギ」

「もうこんな所まで来て何をしていたのですか!？」

「滝見てた」

「俺は世界の果てを見てたぜ」

「・・・まあ良かったです。さあ、誰かに勝負を挑まれる前にさっさと帰りましょう！」

「受けたぜ？」

「十六夜が」

「へっ？」

すると後ろの滝から巨大な白蛇が出てきて、

「まだ！まだ終わってないぞ小僧!!!」

すんごい激怒していた。十六夜に対して

「こ、これは!?ていうかなんでこんなに怒ってらっしゃるのですか!?!」

「コイツが生意気にも試してやろうって言ってきたから俺を試せるか逆に試してやったのキーン」

「俺はこの蛇にやめとけって言ったのに聞かないから」

「そんな事言っている場合ですか!?!」

「もう手加減しないぞ！潰れろ小僧!!!」

その台詞と同時に大量の竜巻が表れた。

「ははッ！おもしれえ!!」

「おい待て俺達にも当たるぞ」

「イヤー!!!」

「はっ！しゃらくせえ!!!」

十六夜は向かってきた竜巻を拳一つで破壊した。

「うそお!?!」

「なんと!?!」

「馬鹿十六夜こつちにも余波が来る」

「そつちでどうにかしてくれ！」

「そつかよ！」

ユウはやってきた竜巻を一瞬で消し去った。

「ええ!？」

「何者だ貴様!？」

「ただの旅人、だな」

「そうだなア！」

十六夜は白蛇顔前に現れ、そのまま回し蹴りを繰り出した。

それにより白蛇は気絶しながらそのまま倒れていった。

「ナイス十六夜」

「お前もなユウ」

「なんなのですかこのお二人は・・・」

「黒ウサギ報酬取ってこいよ」

「え!？」

「一応な」

「は、はい」

黒ウサギは白蛇（気絶した）から報酬を受け取った。

「やりましたよ！こんなに大きな水樹ですよ！これで隣町に水を買に行く必要が無くなりました」

「で、黒ウサギ」

「はい！なんででしょう！」

「お前・・・何を隠してるんだ？」

「えっ・・・」

「あ、今ので大分知ったぞ」

「こ、心を読まないでください!!」

「一応内容伝えるわ」

そう言うユウの束ねた後ろ髪がいきなり動き始め十六夜の後ろ首に突き刺さった。

「お？初めての感触だな髪に刺されるのは」

「なんで後ろ髪が動くのですか!？」

「技術才能天才の力だ」

「とりあえずはつきりと分かったぞ」

「!」

「つまりお前は壊滅寸前の自分達のコミュニティを守るために俺達を呼んだんだな？」

「・・・説明はしていませんがそんなところですよ」



「ふうん」

「自分の口から言っではいせんがお願いします！私達を助けるために・・・コミュニケーションに入ってください!!」

「・・・」

（ここで断られたら私は・・・っ）

「良いなそれ」

「・・・え？」

「良いなって言っただよ。なんだ？入ってほしかつたんだろ？」

「は、はい!!えっと、ユウさんは？」

「・・・」

「ユウさん？」

「成る程な。アイツここまで見えていたのか」

「ユウさん！」

「ん？ああ入るよ」

「あっさり!?!」

「でも俺以外にロウウイ・ヤマト・ミーレス・零・レオンの奴等も俺と一緒に行動する事を覚えて聞いてくれ」

「は、はい」

「俺達はある目的の為にコミュニケーションに入る。それが終われば俺達はこの世界から去る。それまで協力してやるといふ約束でいいか？」

「目的？」

「今は言えない」

「・・・ありがとうございます入って下さって」

「こんな面白い世界に呼んでくれたから当然だよ」

「それでは皆さんの所に戻りますか！」

「なら俺が送るよ」

「えっ？ユウさんが？」

「俺の能力は瞬間移動能力だからさ」

「やつぱりかこのやろういい能力持つてるじゃねえかなら飛ばせよここまでの時間無駄にしただろ」

「俺の知ってる場所か視界に写った所にしか出来ねえんだよ」

「じゃ、じゃあお願いします」

「おう掴まれ」

「着いたぞ」

「本当に一瞬だったな」

「タイムラグはコンマ単位だ」

「それでは皆さんに・・・」

黒ウサギが問いかける瞬間三人は固まった、何故なら

なんかバカでかい虎男のような奴が耀・零・レオンに手足の間接を曲げられ、ヤマトが虎男の額に腕と一体化した散弾銃を構え、飛鳥・ロウウイ・ミーレスが虎男を見下していた。

「・・・苛め？」

「そうだろうなそう見える」

「なんでこんなことにー!?!?」

## 第五話 白き和装口り

「で？何があつた？」

「「「「ムシヤクシヤしてやった後悔はしている」「」「」」」」

「だまらつしやいこの御馬鹿様方!!」

「ハハハッ!」

とりあえずこの七人にリンチされていた虎男―ガルドという男が逃げた後事情調査を行つていた。

漢字合つてるか?!

「まさかあのフォレス・ガロに勝負を挑むとは思ひもありませんでしたよ!」

おおつとまさかそこまで話が進んでいたとは

「まあいいですよ、だつて十六夜さんとユウさんがいれば平気ですよ」

「俺は参加しねえぞ」

「へっ?」

「あら?分かつてるじゃない」

「えっ？」

「これはコイツらが買った喧嘩だからな黒ウサギ」

「で、ですがユウさんは!？」

「え？俺は余程の事がないと手伝わないぞ」

「ああもう好きにしてください」

「なあユウ」

「ん？なんだ？零」

「まさかなんかあるのか？」

「なんかは起こるな」

「楽しみー!!」

「お気楽だな」

「帰ってください」

「そこをなんとか!」

今俺達は「サウザンドアイズ」というコミュニティが経営している店の前で店員らしき人と交渉中（黒ウサギのみ）である。

ここに来るまでの景色は楽しめたんだけどな

まさか全員の飛ばされてきた世界の季節が違うとは思わなかったぜ

今度からそこんところも気を付けないとな

「「ノーネーム」はお帰りください」

「そんな」

ノーネームというのは旗がないコミュニティの事を指す言葉だったけな?

あんまり人の話を聞かないのは良くはないな

「そこをなんとかお願いs」「ヒヤツツツホオオオー!久しぶりだ黒ウサギー!!」って

ギヤアアアアー!!!」

いきなり店から小さい何か黒ウサギと一緒に転がっていった。

「おいなんだあのサービス俺にもくれねえか」

「だめです」

「なら有料でも」

「ダメなものだめです」

「・・・なら」

「却下」

「・・・」

「この店員やるな!？」



「さて、儂がこの店“サウザンドアイズ”の店主の白夜又じや」

「こちらは順番に十六夜様、飛鳥様、耀様、ユウさん、ロウウイ様、零様、ヤマト様、レオン様、ミールス様でございます」

「おいなんて俺だけさん付けなんだよ」

「なんとなくです」

「なら仕方ない」

「で？お前は強いのか？」

「いきなりそのような質問をするとは、お主が倒したあの白蛇に力を与えたのが儂じやと言えばいいのか？」

「へえ？」

その合図と同時に十六夜、飛鳥、耀が立ち上がり、

「じゃあ貴女を倒せば」

「俺達ノーネームは」

「有名になるね」

「まあ東側の最強の階級支配者フロアマスターじゃからな」

「待つて下さい三人様!」

「まあよい。で? お主達が挑むのは『試練』か? もしくは対等な『決闘』か?」

白夜叉が動く前に、

「その三人は試練だ試練」

「!」

「ユウ・・」

「ほお? お主は何故そう言った」

「その三人に勝つ可能性があるのは十六夜だけだからだ」

「あら? 私達二人は負けると?」

「そうだが?」

「少し舐めてないかしら?」

「何故お前らに嘘を言わなきやいけないんだ?」

「ほお? ではお主なら儂に勝てると」

「それは、「」「勝てるだろうからこいつは決闘で」「」っておいしい!?!」

「裏切られたわね」

「ハッハッハ! 全くおもしろえや」

「まあよい。なんにしてもちやんと試練を受けてもらうぞ」

「分かった」

「そしてユウとやら」

「ん？」

「儂に決闘を挑んだのだ覚悟してもらおうぞ」

「……俺何も了承してないんだけど」

## 第六話 ユウの作戦

「まずはこれじゃ」

そう言うのと白夜又は着物の裾から白と銀のカード取り出し、全員が立っている場所が光に包まれ一面氷だらけの世界に変貌した。

「自己紹介をしておこう儂は『白き夜の魔王』白夜叉」

「魔王!?!」

魔王―それは強大な力を持つ最悪の象徴。

そしてノーネームを滅ぼした犯人である。

「.....」

「お前から黙るな」

「まず試練のそなた達にはこの者の相手をしてもらおう」

その言葉と同時に白夜叉の後ろから大きな物体が現れた。

その姿は獣の中の獣。

獣の王者の風格を持つ幻獣―グリフォンであった。

「!?!」

そのグリフォンがユウを見かけた瞬間、いきなり顔の色が恐れの色に変化した。

「ん？どうしたのじゃ？」

『……』

「まあよい。挑戦者は誰が行く？」

「私」

「春日部さん？」

「任せて」

そう言いグリフォンに近づき、

「あ、そうだ。三毛猫出てきて？」

そう言うのと耀の後ろから三毛猫が震えながら出てきた。

「ほら、三毛猫近くにいると危ないよ？」

『そうは言ってもお嬢！アイツが怖いんや!!』

「アイツって……ユウの事？」

「ん？俺？」

『そうなんや！なんかアイツがいると震えて来るんや！』

今更だけど耀は動物と会話が出来るのだ。

但し他の人達はそんな能力を持っていないため二人（一人一匹）の会話が分からない

のだ。

『お前もなのか』

『あんさんも?』

『ああそうなのだ』

「なんか面白い話してそうじゃねえか」

『?!?!』

「でも早くゲームを始めてくれ」

「それもそうじゃ。お主はこのグリフォンに乗って氷の山脈を超え、ここに一周して戻ってくる事が出来ればお主の勝ちじゃ」

「分かった頑張る」

『お嬢〜!頑張れや!!』

「うん!」

そしてグリフォンと耀はそのまま飛んでいった。

「うんどうしようかな」

(ユウ様〜)

(ん? ヴィテかどうした?)

(ここからの誘導のお知らせです)

『お嬢く!!』

「大丈夫だよ三毛猫」

耀はなんとかクリア出来たようだ。

しかし驚いた。まさかグリフォンの力を使えるようになる力だとは思わなかった。

「さて、見事試練はクリアじゃ」

「さあ帰るか」

「帰すとおもうか？」

「デスヨネー」

「さて、ここからは決闘するのじゃ」

「じゃあ」

「始めよう」

今ここに白き魔王と白き人外の戦いが、

「それじゃあ」

「行くぞ」

始まつ……

「ギh「参った」……は？」

らなかつた。シューリョーの時間である。

「さて、帰るか」

「待てどう言うことだ」

「だから降参だよ」

「そんなことが許されると思っているのか」

「だから俺は敗北したからお前にある権利をやる」

「権利？」

「俺がお前の手下になる」でどうだ？」

「なんだと!？」



「ユウさん!？」

「どうだ？十六夜並の戦力が手に入るぜ？」

「・・・お前はそれでいいのか？」

「いいぜ」

「良かろう、ならば今からお前は儂の手下じや」

## 第七話 恩恵

「何考えてるのですかユウさん!？」

「いやー……それは……その……」

「サウザンドアイズに入るのですか!？」

「そこは白夜叉に頼んでノーネームに行く命令出してもらえばいいから」

「何故こんなことをしたのですか!？」

「……作戦?」

「この御馬鹿様!!」

ハリセン（鋼鉄）で叩かれる。

メツチャクツチャイテエ!!

「さて、黒ウサギどうする? 試練のクリアの報酬は?」

「皆様の恩恵鑑定でお願いします」

「なっ!? 明らかに専門外なのじゃが……しかもこの人数……まあ良からう」

「ギフトってどんな事が書かれるんだっけ?」

「ズバリ! 皆様の力などが書かれます!」

「・・・まじ?。」

「マジです」

「・・・俺クリアしてないからギフトは無理だな」

「安心しろお前も対象だ」

「あ?。」

「さあ受けとるがよい!!」

白夜又が手拍子をすると九人全員の上一枚のカードが現れた。

十六夜はコバルトブルー色のカード。

飛鳥はワインレッド色のカード。

耀はパールエメラルド色のカード。

ユウは白と金の二色の混ざったカード。

ロウウイは紫と緑の二色の混ざったカード。

零はスカイブルー色のカード。

ヤマトは茶色のカード。

レオンは藍色のカード。

ミーレスはリーフグリーン色のカード。

「皆様良かったですね!」

「何これ？」

「ギフトカードですよ」

「お給料？」

「お中元？」

「お年玉？」

「賄賂？」

「全部違いますし、最後おかしいでしょう！」

それぞれが書かれていた内容は、

飛鳥は「威光」

耀は「ゲノム・ツリ生命の目録」  
「ノーフォーマー」

「じゃあ俺はレアケースだな」

「なんじゃと？」

白夜又が十六夜のカードを覗いて見ると、

十六夜のカードに書かれていた内容は「コード・アンクワ正体不明」と書かれていた。

「コード・アンクワ正体不明じゃと!？」

ギフトを鑑定するのは「ラプラスの悪魔」の力によって分かるのだがそれでも分からないギフトだというのだ。

「むう……お主達はどうか？」

ユウ以外の五人がカードを見せると、

ロウウイのギフトは「防水加工」<sup>ウオータープルーフ</sup> // 加熱処理 // 血行促進

「なんじゃこの能力」

「いいじゃん」

零のギフトは「投影」<sup>トレイス</sup> // 王の財宝<sup>ゲート・オブ・パピロン</sup>

「お前これはどういう事じゃ？」

「ハツハツハ」

ヤマトのギフトは「変体」<sup>トランス</sup>

「……変態？」

「違う!!」

レオンのギフトは「重力圧縮」<sup>グラビトン</sup> // 死者隷属

「お主怖いな」

「ロウウイを消すためだ」

「だからなんでだ!!」

ミーレスのギフトは「超電磁砲」<sup>レールガン</sup> // 機械仕掛けの神<sup>デウス・エクス・マキナ</sup>

「お主が一番強いんじゃないか？」

「いや全然」

「さて、後はユウだけじゃな」

「・・・見ないで？」

「命令見せろ」

「このやろう！」

「抵抗するな」

「分かった分かったほらよ」

ユウのギフトを白夜叉が受けとると、

ギフトには ワーム・ホール “時空間移動” “始終” と書かれていた。

「ワーム・ホール時空間移動じゃと!？」

「あ、バカ! 言うな!」

「お主はこんなギフトを持っていながらわざと負けたというのか!!」

「いやー・・・まあ」

「この馬鹿者が!!」

黒ウサギのハリセン（鋼鉄）でまた叩かれた。

「イッタァー!!!」

「なんですかそれ強いのですか？」

「うむ・・・面倒なギフトじゃ」

「え？」

「頭イテエ」

## 第八話 正体

「そもそも時空間移動ワームホールとは、お主達に分かりやすく言えば、〴〵ブラックホール〴〵、〴〵ホワイトホール〴〵を繋ぐ洞窟のような物だ」

「ブラックホールって・・・あのブラックホール？」

「光すらねじ曲げて、通った物を全て押し潰すあのブラックホールか」

「うむその通りだ」

「でもホワイトホールって本当にあるの？」

「確証がないからなんとも言えないがブラックホールとホワイトホールは、ようは〴〵入口〴〵と〴〵出口〴〵のような関係だ」

「・・・まさか!」

「つまり俺はその二つの関係を利用して超高速移動を可能にし、瞬間移動を可能にし、光のような質量を持たない物を移動出来る事を可能にしたんだ」

「それって相当レアなギフトではないですか!？」

「全くじゃ・・・これ程のギフトがあれば儂に簡単に勝てたものを」

「おい白夜叉どういう事だ」



「つまりは儂は白夜と夜叉の魔王：だがこやつは太陽系全てを消す事が出来るという事なのじゃ」

「流石に消したりは出来ないけどな」

その言葉が真実だとすれば、ユウ一人で箱庭を何処かに飛ばす事が出来るという事実になるのだ。

「お前そんなに強かったんだな」

「当たり前だろ？俺は旅人なんだからな」

「なんて奴なのじゃ」

もしもユウが降参せずにそのまま戦闘にでもなれば——白夜叉が勝てた可能性が絶望的に低かったのだ。

何故ならばもし本当にどこまででも移動出来るのであれば白夜叉にとってみれば一方的に攻撃を受ける事になるのだ。

おそらく、十六夜が言つてた蛇神の竜巻を消したのもその能力の力だろう。

そうなればユウには絶対に移動出来ないようにしなければいけない。

「だけども、こんなことを言うのは野暮な事なだけだな」

「ん？」

「俺は本気を出してない」

その瞬間、ユウと一緒にこの世界に來た者達以外は呆氣に取られていた。いつたいたいという事が分からないが、白夜叉には一つの考えが浮かんだ。

もしやこの者は、星靈級の者ではないのかどうか。

もしも本当にそうなら、ユウは箱庭最強の存在になるのかもしれない。

「……………」

「十六夜様？」

「少しひっかかる・・・ユウ」

「ん？」

「前にお前は自分は妖怪だと言ったな」

「まあそれらしいことは言ったな」

「今のお前のギフトと妖怪が噛み合わないんだ」

「じゃあ言うよ俺の正体」

「は？」

「俺は——数々の獣達——生き物達の力をその身に宿した者・・・あらゆる叡智をもつてしても生まれなかったモノ・・・あらゆる力をもつてしても超える事が出来ない最強の生物兵器・・・その名は<sup>キ</sup>合成<sup>メ</sup>生物<sup>ラ</sup>・・・俺はキメラの最強種、ユウIIクレメンズだ!!」

「き、キメラじゃと!？」

キメラとは——人間達が造り出したとされる様々な生物が合わさった姿をしている凶悪な魔獣の事である。

「じゃあ三毛猫とこのグリフォンが怯えていたのは!？」

「俺がキメラだったからだな」

「だが待て!生まれなかったじゃと!？」

「しいて言えば俺の用に生まれなかっただな」

「どういう事だ?」

「俺は自分の手でキメラに変化したんだ」

「変化だと?」

「俺の体に様々な生物の血を加えたんだ。それにより俺の体は変化したんだ」

「お主達は知っていたのか!？」

ロウウィ達は言葉は発さず、只頷くだけだった。

そうなればこの五人を人間には荷が重い種族だということになるのだ。

「さて、もういいだろ。早く帰るぞ」

「ま、待て!」

「ノーネームで会議しなきゃいけないんでね」

そう言つてユウは一人で歩き始めた。

(・・・やれやれ。これも見えてたんだなヴィテは)

「ふ、ふざけるんじゃないぞ!!」

「ふざけてなどいない」

今ここは「フオレス・ガロ」の本拠地である。

ここにいるのはリーダーのガルドともう一人、

金髪の赤いコートと中に黒いスーツを着て、白いスカートを履いている女の子であつ

た。

もはや金髪ロリとも言える姿である。

「お前を打ち負かしたあの七人の他に後二人——その内一人は神格持ちの幻獣を倒したのだ」

「も、もう一人の方は？」

「それがあの白夜王の白夜叉の部下になったようだ」

「そ、それって」

「なんにせよ白夜叉の部下になったのだ・・・腕はたつようだぞ」

「ふざけんなよ！そんな奴等に勝てるかよ！」

「・・・なら私が手伝ってやろうか」

「なんだと？」

「お前に力をやる、代わりにお前は今の地位を捨てることになる」

「ぐっ・・・」

するといきなり窓の方から、

「面白そうね、私にも手伝わせてよ」

「誰だ!?!」

「お前は」

「フフフ、私はいろんな世界に行き来できる謎の未知人物だよ♪」

## 第九話 未元物質

ノーネームのメンバーが帰った後白夜叉はというと、

「いったい何者なのじゃユウは」

ユウの事について考えていた。

まあ無理もないことではある。

そもそも合成生物の種族を自分だけで変化し、その姿になったという事はユウにはあの姿の他にも別の姿があるという事となる。

もしも他の姿が元の姿と全く同じ戦闘力があれば、ユウは箱庭の階層の中で四層ぐらの実力があるのかもしれないのだ。

それならばユウと共に行動しているあの五人も人間ではない可能性もある。

その場合箱庭のパワーバランスが完全に壊れてしまうという事なのである。

「それにユウのギフトカードも何かおかしかったのう」

ユウのギフトカードに書かれていた内容は「時空間移動」と「始終」という能力ではあった。

時空間移動はこの前説明した通りにどこでも移動出来る能力であること。

始終はまだ使つてはいないだろうが恐らくこれも厄介な能力に違いない。

だがそれよりも気になっていたのはユウのギフトカードにはまだ余分な空白があったという事なのだ。

まるで何か書かれていたかのように空白があったのだ。

「……もしかしたら僕はとんでもない奴を部下にしてみましたようじゃな」

その時、

「失礼します」

「!?」

部屋の暗がりの所から一人の少女が出てきた。

膝まで伸びる長い銀髪を後ろに伸ばし、

淡い葵色のミニドレスを着て、

きめ細かい彩飾が施された金色の耳飾りをし、

両目の色がそれぞれ右目は赤色、左目は金色のオッドアイをしていた。

「お主……何処から入ってきた」

「いえ? 只普通に部屋に入ってきましたが?」

いや、そんなわけがない。

明らかにこの者は部屋に居なかつたし、入ってきた動きもなかつた。



いきなり現れたと言るのが正しいだろう。

「いったい何者じや」

「失礼しました名前も名乗らずに

．．．．．私の名はアルカヌムと申します」

明らかに女の子が付けるような名前ではなかった。

「で、お主は何故ここに来た」

「ふふふ、白夜叉様にお願いがあつてやって来ました」

こんな可愛い娘に頼まれるのは悪い気はしないが今は状況が違う。

明らかに怪しい者の頼み事など聞けるはずがなかった。

「悪いが他を当たってくれ」

「そうですか．．．なら」

そう言うアルカヌムを何処からか装飾が施された金色短剣を両手で二本構え、

「死んでください♪」

左手の短剣を白夜叉の顔目掛けて投げつけた。

だがこの程度のスピードなら簡単に見切れる。

白夜叉は飛んできた短剣をひよい、と掴んだ。

「そんな物で儂に当てられると．．．」

その続きは出なかった。

何故ならば掴んだ筈の短剣が自分の顔のすぐ横に刺さっていたのだ。

だが短剣をちゃんと掴んでいる。

それに奴のもう片方の手にはちゃんともう一本の短剣が握られている事からいきなり短剣が飛んできたという事になるのだ。

(だが待て！もしかしたら超高速で三本目を投げた可能性も)

「良かったですね白夜叉様」

「な、何?!」

「あと少しで白夜叉様のお顔に傷が付くところでした♪」

笑顔でそうは言っているが訳せば、いつでも殺せるぞ、という意味にもなりかねないのだ。

それにこの得たいのしれない雰囲気に見覚えがある……………ユウである。

この少女はユウと全く同じ雰囲気を出しているのだ。

「ふふふ♪」

「……分かった。お主の願いを聞こう」

「では聞いてくれるのですね♪」

「さあなんなのじゃ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ユウ様のサポートをよろしくお願いします」

「はっ?」

「それだけです」

「ま、待て! ユウの知り合いなのか!」

「はい」

「なっ!」

「私には見えるのですよ、これから先の『未来』とここから前の『過去』も」

そう言いながらアルカヌムは自身の左目を指差しながら言った。

「なんと!」

「詳しい事は言えませんがよろしくお願いします。あ、あとこの話はご内密に」

「分かった・・・・・・・・じゃがお主も何者なのじゃ」

「私はアルカヌム——『アルカヌム・ヴィテ』」。

あの方とその御親友様に命を救って貰いました只の殺人者です。」

「なんだこの屋敷は」

今俺達は「フォレス・ガロ」のコミュニティに来たが、酷い荒れ具合だったのだ。洋館が樹木等に侵食され、もはや人が住めるような場所ではなかったのだ。

「気を付けろよお嬢様方」

「あら？ 貴方が心配するのね十六夜君」

「頑張ってくる」

「ジン||ラツセルも頑張れよ」

「は、はい!!」

緊張してるな。

仕方ないか今回が初陣だし。

「貴方も来ないでよユウ君」

「大丈夫だ代わりにそいつらが頑張るから」

「|||」  
「|||」  
「|||」  
「|||」  
「|||」

そして、飛鳥、耀、ロウウイ、零、ヤマト、レオン、ミーレスは屋敷に向かっていった。



「ヤマト、ロウウイ！後方支援頼む」

「了解！」

「俺は射撃武器持ってない」

「貸してやるから」

「レオン、ミーレス俺達で止めるぞ」

「了解」

そう言うとき零は、

トレス・オン  
「投影準備！」

両手に白と黒の別々の剣を二本取りだし、

「来い死神の鎌!!」

レオンは手を挙げた瞬間、虚空から大鎌が降ってきて、

「じゃあやりますか」

ミーレスは砂鉄を集め、砂一粒一粒が高速振動する剣を作った。

「・・・この気配は！」

「ユウさん？」

「どうしたよ」

「・・・わりい、ちよつと行ってくる」

「何か感じたのですか!？」

「ああ！かなり面倒なのだ!!」

「え？なんですかいったい！」



「俺でも移動出来ない物質さ」

「え!？」

「それはなんだ？」

「大まかな説明は省く!だがこれは危険な奴だ!!」

「だからなんなのですか!!」

「・・・未だにどういう構造になってるか分からない物・・・無限に近いエネルギーを持つている物質!その名も・・・」

「<sup>ダイクマター</sup>未元物質!!!」

## 第十話 最凶の問題児

一方その頃屋敷内では、

「G A Y a a a a a a a a a a !!」

ガルドの攻撃がレオンに当たる瞬間、レオンは自身の重心を右に反らして攻撃を回避し、ガルドの背後からミーレスが砂鉄の剣を刺そうとするがガルドは後ろ足を巧みに操りミーレスを蹴り飛ばす。

だがこれは罠であり、ガルドの真上から零が四本の剣を投げつけたと同時に弓矢を取りだしガルドへと射る。

四本の剣と矢は同時にガルドに当たり怯む。

「・・・くらえ！」

レオンは懐から鉛玉を取りだしガルドに投げつけたと思ったらいきなり鉛玉が潰され弾けとんだ。

「G A Y a a a a a !」

鉛玉の破片が刺さったにも関わらずガルドは縦横無尽に辺りを破壊し尽くす。

「・・・やっぱりキツいかなあれ相手だと」

「未<sup>ダイクマタ</sup>元物質<sup>1</sup>だろ？」

「ダメージ無し・・・ほんとめんどくさい」

その言葉通りガルドの体は身体中から出ている黒い靄のせいで瞬時に再生しているのだ。

「このままじゃジリ貧だ」

「心臓狙ってみるか？」

「わかるのか場所」

「こいつを使えば・・・」

零が剣を手放す瞬間、

「待たせたなあ!!」

「」「待ってない」「」

「あれえ!？」

ユウがやって来た。しかもスベった。

「ユウ君!？」

「飛鳥達は逃げるか見物してろ！外で十六夜とバカウサギが待ってる！」

「誰がバカウサギですか!!」

「自覚無しか」

ユウの背後から黒ウサギと十六夜が出てくる。

「ユウ頼む」

「任せろ！こういうやつは俺の専売特許だ！」

「意味合ってるか？」

するとユウの体からガルドと同じ黒い靄が出てきたと思っただら零とレオンにまとりついた。

「ミーレスは後方支援に回ってくれ」

「了解」

「さてと・・・やるぜ零、レオン！」

「おうよー！」

「G A Y a a a a !」

ガルドはユウに向かって突進してくる。

「学習しろよ」

ガルドの攻撃がユウに当たる瞬間、ユウの手から黄金の炎が出てきてガルドにアツパーを食らわせる。

「王金昇拳!!」

ガルドはアツパーを食らい、天井に衝突する。

「悪いがこれじゃあダメージは出ねえ」

「充分だ！」

零は先程と同じ様に弓矢を取りだしガルドに矢を射る。

射られた矢はガルドの体を貫きガルドの巨体が落ちてくる。

「見たくない奴は目瞑ってろ！」

レオンは持っている鎌でガルドの首を切断する。

「駄目よ！それじゃあギフトゲームは勝利出来ない！」

「勝利方法はこの屋敷の何処かにある剣で心臓を刺さなきゃいけないの！」

そう。それが本来のこのゲームの勝利条件だった。

本来なら。

「悪いが勝利条件は変わってる」

「え？」

「恐らくこいつが未元物質を纏った時点で勝利条件が変わった……そうだろ黒ウサギ」

「……はい。勝利条件は『ガルドの殺害』に変更されました……そして」

「まだゲームは終わってねえ！」

首が取れたはずのガルドの巨体が再び動き始める。

それはバイオレンス中のバイオレンス状態であった。

「なんでまだ動くのよ!？」

「これが未元物質のめんどいところだ……永遠に動き続ける兵隊だな」

「こんなのどうやって」

「どうやって? こうやるんだよ!」

ユウは腰を落とし右手を後ろに構え、何かを掴むように形作るとその手の中に光が集まり始める。

「……闇を払え、光の槍!!レイ・クンツニル光の神槍!!!」

右手を押し出した瞬間、槍の形をした光が飛んでいき、ガルドの体を飲み込んだ。

「結局また良いところを全部ユウに取られたわね」

「勝てたのかよあのガルドに」

「無理ね」

「そうか」

「それではフォレス・ガロのメンバーに伝えに行きましょう」

「わかりい俺は少しここに居る」

「ユウさん？」

「大事な野暮用だ。ロウウイ達も頼むわ」

「「「了解」」」」

「ではまた」

「……やつと二人きりだな」

「……うんそうだね」

ユウの背後から声が聞こえる。

そこにはガルドに纏っていた黒い靄があり、徐々に形作っていた。

ツインテールにしながらも後ろで長い髪を靡かせ、

白夜叉と似たような作りの黒い和装ミニドレスを着て、

黒いミニブーツを履き、

その瞳はまるで猫のように鋭い眼差し、金眼をしている少女になった。

「お前だろ？ガルドを殺すように仕向けたのは」

「人間が悪いよ。彼が力を欲しがってたから力を与えたただだよ」

「そして俺に殺させる様にしたんだろ？」

「流石あく分かってるう」

「おい確信犯」

「ふふふ」

「あのガルドにとり憑いてただろ？」

「そうだよ」



「そしてガルドの体を操ったと」

「大正解！バカだったよあの男、少し力を与えてやったら調子乗っちゃって私に支配されやすくしてくれたんだから」

「まったく・・・で、そうした理由は？」

「二つある」

「一つは？」

「戦ったら面白そうだったから」

「・・・二つ目は？」

「・・・アイツが許せなかったから」

「・・・」

「アイツは自分のコミュニティを大きくするために沢山の人達を殺してきた・・・それが許せなかったから」

「・・・そっか」

「・・・」

「バカ野郎！」

「ひっ!!？」

「一人で勝手なことするな!!」

「ごめんなさい」

「……まあ言いたいことはこれだけだ」

「……」

「次からは一人で勝手なことするなよ？」

「……はい」

「よしじゃあ手伝え」

「え？」

「俺たちと世界助けしに協力しろ、面倒な問題児」

「うん！分かった!!」

「行くぞアン！」

「分かった兄様!!」  
にいさま

## 第十一話 吸血少女

「おうユウ・・・その女の子誰だ？」

「俺の妹だ」

「アンㄥクレメンズよ」

「へえーそうなんだ、もしかして誘拐したかと思っただぜ」

「ちげえーよ！そんなことすんのは口ウウイだけだ！」

「だるい」

「それでは戻りましょう」

「そうだユウ」

「ん？どつたのレオン」

「ガルドの体俺がもらっついていいか？」

「大丈夫だ問題ない」

「どういう事？」

「ほら、俺の奴隷に出来るからさ」

「ただ後でやれ」

「うーす」

「・・・貴方達本当に恐ろしいわね」

「それではお茶を淹れてきますね十六夜さん、ユウさん」

「おうよ」

「ほーい」

俺達はノーネームのコミュニティに戻ってきて早々にくつろいでる。

まああんなことがあつた後に休みまくつてるのはどうかと思うが。

「さてと、ユウに聞きたいことがある」

「ん？なんだ？」

十六夜は頭いいからな。

秘密が色々バレないようにしないと。

「お前 「ダークマター」 未元物質「ダークマター」 持つてるだろ」

「……」

「……やつべえ。」

「お前はあのととき「同じ物質じゃないと破れない」のが分かつてたんだろ」

「あ、ああ」

「でもあんなの早々取り出せるモノじゃない、たとえお前の能力でもな」

「ふむふむ」

「なら答えは簡単だ、「ダークマター」 それの中にあればいつでも出せる」

「なんかもう十六夜怖いよ？ どんだけ人の秘密バラすの？」

「お前みたいな面白物質は解明したいからな」

十六夜俺達と同じじゃね？

もう人外じゃね？

俺達とおんなじように世界旅しようぜ？

とまあそんなこと言ってる場合でもないか。

「その話はまた今度で、とりあえず」

「外の奴、早く出てこい」

「・・・ほう？ 気付いていたか」

窓の外から一人の少女が出てくる。

一目見て気づいた。

・・・吸血鬼だ間違いない。

「お前達がノーネームの期待の新星か」

「そういうお前は？」

「・・・レティシアって名前か」

彼女には悪いと思ったが心を読ませてもらいました。

やっぱり楽だねこの能力。

「心を読む能力か、情報通りだな」

「へえ？ もう有名なのか？」

「白夜叉の部下になれば尚更だ」

「ああーそういうええそうだった」

「で？何しにきたんだ？」

「お前達の実力を測りたい」

「直球〜」

「いいな？」

「OK」

「なんで黒ウサギに話さないのですかー!!」

「黒ウサギは」

「弄って」

「ナンボだからな」

「三人とも酷いですー!」

まあゲームのルールは簡単だ。

お互いにレティシアの槍を投げて掴んでまた投げるといふシンプルなルールだ。

でもこれ優劣ありすぎだと思う。

「では行くぞ」

「おっしやー!」

最初は十六夜からだ。

・ ・ ・ もう嫌な予感しかしないな。

「ハアアアアー!!!」

レティシアが自分の槍を十六夜目掛けて本気で投げつける。

そして十六夜というと、



「ハッ！しゃらくせえ!!」

レティシアの槍を殴り、粉々に砕いた。

・・・やりすぎやりすぎ!!

俺はその槍の破片を全て地面に移動させる。

「十六夜やりすぎだわ」

「ん？そうか？」

「いや、私の予想以上だな。完全に私の敗けだ」

・・・ん？まず投げ合ってすらもないんですけど？

「レティシア様・・・」

「黒ウサギ、心配するな。この者達は、」

レティシアが何か言い終わる瞬間、

突如空から赤い光が降り注いできた。

・・・てか、この光あぶねえ!!

「黒ウサギ!!」

「レティシア様!!!」

## 第十二話 説明しがたい暴力

「そうはイカの！」

「ユウさん!？」

「キサマ何を!？」

俺はなんか少し面白そげフンゲフン・・・危なそうな光に向かって全力ダツシュし、  
「金時計だ!!」

カキーン、といったであろう音をたてながら光に廻し蹴りを行い、思いつき吹っ飛ばした。

「お前なんだその掛け声」

「ノリだ悪いか」

「いや全然」

「バカな!」  
「ゴーゴンの威光」をいとも容易く!？」

「こんなの楽勝だ。元々」  
「ワームホール」  
「時空間移動」は光すらもねじ曲げられる。なら光を曲げるこ  
となんて造作でもねえ!」

「くっ!全員撤退だ!!」

「待ちなさい！この黒ウサギが簡単に逃がすとても！」

「無理だな」

「なんとたつて」

「バカウサギだもんな」

「バカウサギじゃないです黒ウサギですー!!少しは信用してください!!!」

「でもアイツ等逃げたぞ？」

「・・・ふえ？」

黒ウサギには悪いが確かにアイツ等は逃げてるてか逃げ切ってる。

恐らく特殊なギフトがあつたんだな。

・・・姿を消せるギフト・・・・・・・・透明マントか!!あの伝説のド(ピー)・・・・・・・・

規制かかつちやつた。

「アイツ等は『ペルセウス』のコミュニティの者達だ。何故私を助けた」

「え？助けちやいけない理由でもあつたのか？」

「え？いや？え?!」

「ならよし、じゃあサウザンドアイズに行くか」

「おうそうだな」

「おら動けそこで出番がなくなつて縮こまつて落ち込んでる何もできなかった恥ずかし

い黒ウサギ」

「心の傷を簡単に決らないでくださいーい!!!」

「お前……僕のものになれよ」

・……いきなり何言ってるんだこのセクハラ野郎？

俺達は今サウザンドアイズの白夜叉の部屋にて、この「ペルセウス」のコミュニティのリーダー、ルイオスというやつと話をしようとしたらいきなり黒ウサギにこんな発言してる。

おかしいな？俺が知ってるペルセウスってこんな奴と似てたか？

此方のメンバーは十六夜、飛鳥、黒ウサギ、レオン、そして俺だ、ユウだ。

オレオレ詐欺みたいになるのは良くないから名前はちゃんと出させてもらいました。

白夜叉は俺が来た瞬間にため息ついてたけど何故だ？

「先に言っときますけど！この黒ウサギは私達の物よ」

「そうですそうです黒ウサギはって違いますよ飛鳥様！」

「その通り！この黒ウサギは既に俺のもんだ」

「そうですそうです黒ウサギはってだまらっしやい!!」

「良からう！ならば言い値で買おう！」

「う・り・ま・せ・ん!!」

「フツ……バカだな白夜叉」

「なんじゃとユウ」

「黒ウサギは・・・既に俺達の・・・奴隷じゃないか♪」

「なっ、なんだって!?!」

「十六夜さんも白夜叉様も何ノツてるんですか!?!黒ウサギ本気で怒りますよ!」

「バカだな黒ウサギ。怒らせてんだよ♪(グツ)」

俺と十六夜がいい笑顔で親指を突き立てると、

「コンノオ馬鹿様ガター!!」

ハリセンで安定で叩かれる。

そりやあもう怒りは全ての生命の感情の起爆点みたいなもんだからその威力はすごいなの。

「なんだこれは!ノーネームってお笑いコミュニケーションだったの?絶対芸をやれば儲かるよハハハハ!」

・・・あつ、いい忘れたけどレティシアはノーネームの本拠地に置いてきたていうか縛ってきた。

・・・後で怒られるか。

「勿論黒ウサギは「やらねえよ」・・・チツ」

「ふん黒ウサギの二百年守ってきた貞操は簡単には渡しません」

「その格好で言っても説得力ないんだけど」

「まあエロい服着てればね」

「こ、この服を着れば費用が三割になると白夜叉様から言われたから着てるだけで！」

「おい白夜叉」

「ん？」

「超グツジョブ♪(グツ)」

「うむ♪(グツ)」

「ああ・・・話が進まない」

「だが白夜叉その程度か？」

「なんじやとユウ？お主にはまだこれよりもエロい服を着せられるとでも？」

「いやエロい服じゃねえ・・・のか？」

「なんなのじゃ」

「いや〜(ゴニヨゴニヨ)」

「なんとそれは良いアイデアじゃ!!」

「だろ？」

「お主・・・天才か？」

「俺は天才だが達人はお前だけだ白夜叉」

「もう止められないこのお二人は（泣）」



「悪いが無理だ帰らせてもらおう」

「そんな！」

やっぱリレテイシアをこつちに貰うことは出来ないか。

まああつちも先に仕掛けてきたが現状悔しいがコイツらがやったという証拠がないからな。

「それにもしかしてそつちが盗んだんじゃないの？そうすれば君達のそのような状況も説明がつく」

こんな風に相手にとって有利な状況を作ってしまう。

・・・仕方ないな。

ならこつちからも仕掛けるかレオンは暇になって寝てるし。

「ならば、俺達とギフトゲームしようぜ」

「ユウ？」

「ユウさん!？」

「ギフトゲーム？僕にはデメリットの方が大きいんだけど？そんな状態でギフトゲームを受けると思ってるのか？」

「お前が勝てば俺のギフトをやる・・・でどうだ？」

「何？」

「ユウさん!？」

「お主!!」

「どうだ？あの白夜叉を完封するギフトが手に入るぞ？メリットでかかないか？」

「・・・ふん、そうやって強引に僕と勝負しようとしても無駄さ。僕と戦うなんて身の程を知れ」

　　そういい残しルイオスはこの部屋から出ていってしまった。

　　・・・・・・・・計画通り♪

「お主笑ってる顔が悪巧みしてるようにしか見えないぞ」

「ああ、ああいう馬鹿はこういう風になれば良いからな」

「？」

「さあーって、レオン！」

「ん？話終わった？」

「仕事だ」

「・・・了解!!」



「というわけで参加資格の二つの宝玉持ってきたぞ」

「これで文句ないだろ？」

「ふ、ふざけるなあおとき話したのが二時間前だぞ!？」

「その二時間前で集めてもらったんだよ俺達の仲間達に」

—回想シーンという名の苛めシーン—

—クラーケンの場—

「えつと〜これでよし。おーいミーレス良いぞ」

「了解ヤマト」

「やつと準備が出来たか、このつまみの巨大イクラも食べ終わる頃だったからな」

「お前なんでイクラ知ってるの？タコなの？イカなの？」

「気にするな！」

「じゃあ始めるか！」

「フツ、どつからでもかかっていやちよつと待てなんでお前全身からそんな重火器大量に装備してるの？もう一人はなんで電氣流してるの？」

「ミニガンフルバースト!!！」

「玉を全部砂鉄に変えてもらったから全部の磁力操って一発一発常に電流弾に変えてる」

「マテマテマテ!!そんなことすればアバババババババ!!!!??」

説明しよう!!ミニガンとは、ヘリコプターみたいな機体に取り付いてる機関銃の一つ・・・だと思おう。

武装兵器とか化学兵器とか全く分かんかったわ。

「ミッシヨンコンプリート」

「これでいいんだな」

—グライアイの場—

「なんで水が弾かれるの!？」

「いや防水加工してるだけなんで」

「それがギフト!?!いらな!!」

「知ってる」

「とりあえずまだるこしいからもういいよなロウウイ」

「巻き込まれなければなんでもいい」

「3・2・1・爆破♪」

ドゴーンー!、という音が鳴ってグライアイの迷宮が崩壊したその数秒後・・・

「・・・やりすぎた?」

「やりすぎだわ十円で動く者」

「うるせえ!!」



「とまあこんな感じで二時間の間で俺達の仲間達がこんなことをしてたんだよ」  
「ふざけすぎだろ!!!」  
「ごもつともです」



## 第十三話 魔王狩り

「というわけで攻略は俺達六人とジン・ラッセルに任せろ」

「参加したかった」

「頑張ったの俺達だし」

「大丈夫だロウウイだけ殺すから」

「だるい」

「進むのはユウ、零、レオンで行って、」

「援護でロウウイとミーレスで、」

「残った俺は誘導か」

「期待してるぜキチガイ」

「ちよつと何言ってるかわかんない」

「と、とりあえず早く行きましょう」

「「「「「了解」」」」」

「なんかサクサク進みましたね」

「確か、発見されれば挑戦権を失うんだっけ？このゲーム」

「まああつちは透明化してるからこつちもしてもいいよね」

「そう考えれば俺達本当に卑怯だな」

「同感」

今どういう状況かかろく報告しておこうと思う。

俺達四人は零は透明になる薬を飲み、レオンは自身の体を透明化して、俺は空間移動して三人にしか見えないようにしてるんだ。

あ、ジンⅡラッセルは俺の時空間移動で同じように空間移動させてるから。

後はヤマトがバウンド弾入り散弾銃を両手で二丁持つてヒヤツパー状態だし、ロウウイとミーレスは透明になった人達（俺達以外）に加熱と電流のコラボレーションで地獄の苦しみを与えているところだ。

そして只今俺達はあのジコチューお坊っちゃんの部屋？の目の前に到着したところだ。

何事も無くて良かったな。

遠くから悲鳴が聞こえる気がするけど気にしない気にしない♪

「説明乙」

「おうよ」

「お前らふざけすぎだ！」

「「すいませんでした」」

んまあルイオスのところに来たけれど、正直楽勝すぎだ。

コイツ全く覇気がないから大したことないだろうな。

俺の第六感がそう言うてる気がしないでも無くは無いです。

「もうめんどくさい!!出でよ【アルゴール】!!」

その瞬間、光が走った。

光が収まるとそこには異形の姿が目に見えた。

見るからに悪魔のような肌の色をし、その髪はまるで蛇のような恐ろしい形をしており、その体にはベルトのようなもので覆われていた。

「これが魔王か」

「そうだ！僕のしもべのアルゴールだ!!」

「ユウ」

「ん？」

「……別にあれを倒してしまっても構わんのだろう」

「早速死亡フラッグを建設してしまっただけど大丈夫だ問題ない」

「お前も建設してしまっただぞ」

「ふん！アルゴール!!全部石に変えてしまえ!!」

「GAYaaaaaaa!!」

アルゴールの口に禍々しい光が灯り、それが直線上に放出されユウ達を襲う瞬間、

「よいしょよ」

ユウが右手を挙げると、目の前にワームホールが現れ、その光を飲み込んでしまう。

「・・・は？」

「光をねじ曲げられる穴だぞ？そんなもん効くかよ」

「いや！石に変えられるはずだ！そんなことが出来るわけが!!」

「まあうるさいからさっさと仕留めるわ」

「!!」

「赤原を駆ける！フルンディンク【赤原猟犬】」

零から放たれた赤き矢はアルゴール目掛けて飛んでいき、アルゴールの体を射貫いた。

「GAYaaaaaaa!!!」

「一撃で仕留められないけど、まあ致命傷にはなったかな？」

「いや逆にブチギレてるんたが」

「いや？充分だが？」

声が出た方向を見ると、ユウが右手を巨大なクリスタルの腕に変化させて、アルゴールの上に移動していた。

恐らく時空間移動で飛んだんだな。

便利すぎるぜなんだよあの能力。

「よいしょつと!!」

ユウはその右腕でアルゴールの頭を掴み、思いつきり地面に叩きつけた。  
ドゴーン！、という音を立てながらアルゴールの頭はそのまま地面にめり込んでいた。

その一撃だけでアルゴールは気絶してしまったのだ。

「あ、アルゴール!!？」

「さてと？」

ユウはその右手をルイオスに見せつけるように動かすと、

「チエックメイトだルイオス」

その顔を勝利を確信した顔へと変化させていた。

## 第十四話 東の間の休息

「じゃあこれからよろしくメイドさん」

「いやなんで三人がそんなこと言ってるの？」

今どういう状況かかろく報告しておこうと思う。

・・・ん？デジャブになっちまったか。

気にしないけどな。

俺達はあるからルイオスの身と心を（物理的に）破壊した後、ヤマトの撃ったバウンド弾を全員で回収してから、ノーネームの本拠地に戻り、縛っていたレイシアを解放して、レイシアにノーネームに居られるようになったと伝えた後で十六夜・飛鳥・耀の三人がさつきのセリフを言って今に至る。

俺がルイオスとの戦闘で使ったクリスタルの腕は俺の種族の一つの能力であり、俺のギフトカードに表記されない物なんだ。

理由はこれは俺の力であるが能力じゃないからだ。

簡単に言うならば種族別で俺のギフトが変わるような物だ。

キメラはほんとに楽でいいな♪こんな風に色んな力を使えるようになるんだからな。

「確かユウは種族一つに付き魔力が上がるんだっけ？」

「魔力だけじゃなくて色々と性能が上がるだかな」

「だがユウ……私を縛った罪は重いぞ？」

ヤベエ……レティシアさんがめっちゃ怒っていらっしやる。

怒らせるような事は……あるなメチャクチャあるな……怒らせるような事しかしてないな。

「ほんとにバカだな」

「俺はバカじゃねえ！アホだ！」

「それより私はお前達に感謝をしなくてはいけない……ありがとう」

「礼はいらんよ」

「だからお前達がメイドをしろと言えばそれに従おう」

「いや……なんか続きそうだからいいや」

そのときユウの耳飾りがユウだけに聞こえる音で震えだした。

これは通信の合図である。

「もしも……白夜叉か？」

『お主！本当にアルゴールを一撃で倒したのか!？』

「倒したって言うよりも気絶させたの方が正しいな」



因みに白夜叉には俺特製の髪飾り型通信機を作ってやった。俺は道具作成スキルはA+だからな。

キメラは色んなスキルを得られるから便利なことこの上ないな。

因みにレオンが召喚する鎌と背中に背負ってる鎌は別物だ。

背中に背負ってる鎌は俺が作ったお手製の鎌だ。

余程の事がなければ背中の鎌は普段使っている。

『なんかもう・・・お主には頭が上がらんような気がする』

「そんな頭が上がらんような奴がお前の手下なんだよ」

『・・・お主まさか儂のここにいれば楽に利用出来ると思っていたのか?』

「・・・」

・・・いや? 凶星じゃないよ? ヴィテからの導きだよ? 決して最強人物の元に居れば何をして相手から手出しはされないから色んな策略が練れるし、利用する機会もかなり多いから便利だ!、とかそんなこと全然思ったり考えたり計画したりしてないからな。

「白夜叉の下に着いて悪巧みしてますか?」

「はいします♪」

『・・・』

ヤベエ！つい乗せられて口が滑った！↑バカのアホ神

『ユウ……後で話がある』

「はい……」

上司って怖いね！

こんな感じに嵌められて怒られるだけ？

反省しています。

「と、とりあえず皆さんパーティーをしましょう！ノーネームの勝利とレティシア様の  
帰還祝いです！」

「の、後に皆寝ちまったか」

「ずいぶん楽しんでたから仕方ないと思うよお兄様」

今起きているのは俺とアンの二人だけである。

困みに午前3時である。

寝ろって言われそうだが、実は俺は例外として俺達二人は余り睡眠を取らなくていい体質なのだ。

兄妹だからって訳じゃないからな？

大体の人は気付いてると思うが、アンは未<sup>ダークマター</sup>元物質そのもので出来ている。

なんらかの事があり、ダークマターが意思を持ち、生まれてきた特異個体・・・それがアン＝クレメンズの正体だ。

「お兄様はこの世界は楽しいと思う？」

アンは俺の事を兄様かお兄様と呼んでくる。

余り違いがないと思うと思うだろうが、兄様の場合は面白がっている時、お兄様だと真剣な時という意味が変わってくるのだ。

おかしな妹だと思うよこんな分かりづらい表現しなくてもいいのにさ。

「楽しいよ・・・どんな世界でも楽しさはある・・・それを見つけられるかどうかが生き物が生きていくのに大切な事の一つだと思ってるからね」

「私のせいでこんな目に合っけていても？」

「まあ確かに最初は面白そうだからこの世界に来た、その後にお前が逃げて追い掛ける事にした、その後他の世界が壊れかけていることをヴィテとお前から聞いた。」

「・・・」

「だけどそれがどうした」

「え？」

「旅の目的に一つ二つ追加された位旅人としていつもあることさ」

「お兄様・・・」

「そんなことよりも・・・お前が素直に話してくれたことの方が俺は嬉しかったんだ」

「お兄様・・・！」

「お前は迷惑をかけるがちやんと皆のために動ける奴だってことは分かってるからな」  
俺はアンの頭に手を置いて、頭を撫でながら、

「心配するなよ・・・アン」

「・・・ありがとう兄様」

そこにあつたのは・・・心配事が無くなった妹のいつもの無邪気な笑顔であつた。

## 第十五話 火龍誕生祭

ペルセウスとのギフトゲームが終わって早数日、ノーネームはサウザンドアイズからの支給を受け、異世界から来た問題児達の協力もあり、数々の農場や製品を作っている中、黒ウサギはというと・・・

「ああああの問題児様方はー!!!」

怒っていた。

メチャクチャ怒っていた。

その理由は黒ウサギの手に持っている二枚の手紙にあった。

一枚目の内容は、かなり省くと「私達は火龍誕生祭に出掛けてくるから1日以内に全員捕まえないとコミュニティを脱退します P. S. 案内役としてジン君を連れていきます」

と、書かれており二枚目の内容は、「火龍誕生祭が面白そうだから俺達六人全員行ってくるから P. S. アンも一緒についてくるから農作業黒ウサギガンバ」

と、まさに逃走していった問題児九人に対してもはや黒ウサギの堪忍袋の緒が完全にブチキレてしまったのだ。

「もう許しません！レティシア様！私は皆さんを連れ戻して来ます！」

「だが黒ウサギどうやって行くつもりだ？境界門は料金の問題上使うことは出来ないだろう」

「大丈夫です！ユウさんから作ってもらったこの靴があります！」

そう言うとき黒ウサギはどこからか黒いシューズを取りだし履いた。

「ぜつつつたいに捕まえますからね!!」

黒ウサギが思いっきり地面を蹴り、その怒りが分かるようにとてつもない速さであったという間に見えなくなってしまうた。

「.....」

「あのレティシア様はどうされますか？」

「無論追い掛けるさ」

「ですがどうやって？」

そう言うときレティシアは懐から大量の金貨を取り出した。

「うえ!!」

「うむ、黒ウサギが恥を忍べばこの金貨で境界門使って飛べたのだがな」

「こんな大量の金貨いっただいどうやって!!」

「ユウからもらった」

「.....」

あの人は黄金律でもあるのかな？

「いったい何者なんだあの者は」

「いったい何者なんでしょうかあの人は」



「さっさと俺達を飛ばしてくれや」

「いきなりじゃなお主は」

という訳で俺達は今白夜叉の所にいるところだ。

何故かと言うとお金の関係上境界門が使えないのだ。

ん？お前金持つてるだろって？・・・それは言わないお約束。

「てか、ユウ。貴方なら簡単に移動できるじゃない」

「俺が移動できる範囲は知ってる場所か目に見える範囲だけだ」

「便利に見えて面倒な制約があるからね」

「ふむ・・・なら飛ばす代わりに一つ頼まれてくれぬか？」

「その話って長い？」

「まあ一時間くらいかの」

「黒ウサギに追い付かれるわ!!」

「白夜叉さっさと飛ばせ！」

「話は聞かなくていいのか？」

「ああ！その方がおもしれえ！」

「白夜叉大丈夫だ」

「ん？」



「まさかあんな移動手段があるとはな」

「ユウもやれば？」

「いやだよめんどい」

十六夜達がはしゃいでる中でアンが実体化して会話している。

アンは基本的にいつも霧状になっていて実体化する事は普段余りないのだ。

「そういえばアン——」

アン何か話そうとしたら、

「見つけましたよ問題児様方——!!!」

黒ウサギが上から降りてきた。

ものすごい勢いで地面に降り立った。

しかもとてもじゃないがいつもの綺麗な顔じゃなくて顔の上半分が真っ黒に染まっ  
ていて紅い光が輝いていた。

「フッフモウニガシマセンヨ」

ヤツベエメツチャオコツテイラツシヤル。

「逃げるぞー！」

十六夜は飛鳥をお姫様抱っこしてそのまま飛び、

ユウは一瞬で移動し、

零はマントを取りだし透明化し、

レオンは霊体化し、

ミーレスは自身に電気を流し高速化し、

ヤマトはジェット機で逃げ「やべ燃料ねえや」・・・られなかった。

「フフフフ・・・」

いつの間にか黒ウサギは耀とロウウイを捕らえていた。

「あ、黒ウサギに頼まれて反発脚力強化シューズ作っただった」

「なにそれ!？」

「踏み込む時の力に比例して反発し、一気に加速できるシューズだ」

「鬼に金棒じゃねえか!!!」

## 第十六話 逃走中

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「逃げ切れたか？」

「いつの間にかはぐれちやっとな」

「今俺はレオンと一緒に行動している。」

黒ウサギから逃げるときに全員別方向に逃げたのだが、恐らく十六夜は飛鳥と一緒にいるだろうし、零とミーレスも合流しているはずだ。

ロウウイはともかくヤマトは捕まっただろう。

燃料ねえってなにやってんだアイツは。

「さて何をする」

「飯食おうぜ」

「まあやることないから別にいいか」

「よしレッツゴー!!」

その頃零とミーレスは逃げた先の場所にあったベンチに座ってこれからの方針を考  
えていた。

どう考えてもユウ特製のアイテムなら兎である黒ウサギにとつてとてつもない巨大  
な力を發揮出来るはずだ。

何故ならばそこまでもユウが作った道具が強力すぎる物なのだ。

流石は道具作成A+。

その実力は伊達ではないのだ。

実質ユウが作った道具は余程の事がなければ全く壊れないのだ。

材料が良いのか、技術が良いのかよくわからないが何故か壊れないのだ。

実際レオンの鎌は手入れが全く要らないほどいつも綺麗なのだ。

そんな感じで黒ウサギ＋ユウの道具は合わせちゃいけないのだ。

「ミールスこれからどうする？」

「捕まらないようにすればいいんじゃない？」

「そうならどこか行くか」

「そうは言ってもどこに行くよ？」

「・・・」

「・・・」

「俺達ユウがいないとほんとに捕まるんじゃない？」

「そんなフラグ建てないでくれ」

「では早速フラグ回収しますか♪」

「・・・え？」

「旨いなこのクレープ」

「それでもユウはブルーベリー味とマンゴー味のミックスなんだな」

「俺はそれが目の前にあつたから買っただけだ」

「ほんと好きだな・・・そういえばあのシューズどんぐらい性能上がるか?」

「十六夜ぐらいの威力で上がるぞ」

「それ・・・十六夜逃げ切れるか?」

「知らんよ?俺は作ってほしいと頼まれただけだし、十六夜が逃げきれるかは十六夜自身の問題だ」

「無責任だな」



「なんとでも言え」

さてそんな感じに話をしていると奥の方から何か歓声が上がっていた。

何があつたか耳を傾けていると街の人達のこんな声が聴こえてきた。

「すげえぞ！月の兎がこんな下層に来てるぞ！」

「しかもその兎と対等に渡り合ってる人間がいるぞ！」

「マジかよ！そんな人間がこんな下層にいるのかよ！」

「うおおー！！どっちも頑張れー！！」

「・・・」

「・・・」

「十六夜だな」

「十六夜だろうな」

うん・・・こんなことをするのは十六夜だろうし、黒ウサギしか追いつけないだろうな。

アイツ等いつたい何をしたらこんな大きな騒ぎに変化してしまうんだ。

てか、ここつて確か「サラマンドラ」っていうコミュニティがなかったっけ？

こんなこととしてたら駆けつけてくるぞ。

と思つたら、いきなり遠くの塔みたいな物がいきなり割れてしまったのだ。

恐らく十六夜がやったんだな。

さつさとここから離れようと思ったんだけどレオンが興味津々だから駄目だな。

「・・・さてと、クレープ買いに行こ」

「らってらっ」

「さてクレープ買って逃げてきたがどうするか」

俺は二次被害を避けるためにクレープ買った後に人の気配が無い路地に入り込んだ。あのまま留まっていれば黒ウサギとレティシアに捕まる筈だしな。

ん？なんでレティシアがいることが分かったかだつて？

クレープ屋の近くのベンチに座ってクレープ食べてたところを見たんだよ。

まあ案の定飛鳥は捕まってたよ。

隣で同じようにクレープ食べてたもん。

「まあクレープウンマイ」

そしたら前からフードを深く被った背の小さい子がぶつかってきた。

「おっと」

「あら？ごめんね急いでたから」

「いや、大丈夫だ。俺も前方不注意だったからな」

・・・なんかスツゴい怪しいけど調べられないな。

ん？心読めばいいだろつて？

実は調べられたのは俺の後ろ髪を止めている髪止めに眼が着いててそれで見た対象

の心を読めたというカラクリなんだ。

第三の目だけ？ 格好いいだろ？

「どうしたの？」

「いや考え事をしていただけだよ」

「そう・・・ならもう行くわ」

「おうじゃなあゝ」

「あれが白夜叉の部下・・・見た目は大したこと無さそうね」

「で？なんだこの状況・・・レオン何か教えてくれ」

「サラマンドラの人達が十六夜と黒ウサギを連行してった」

「どうとう捕まったか」

「行くのか？」

「サウザンドアイズの一味だからな一応俺は」

「一味ってwww」

「来るか？」

「いや俺は飛鳥とレティシアと行動しているよ。はぐれたりしたら不味いからな」

「オツケー。じゃあ送つとくから説明宜しくな」

「おう！」

レオンを飛鳥とレティシアの所に送っていった後は、

・・・アイツ等の所に行かなきゃいけないか。

「さてと・・・白夜叉に怒られる覚悟で行かなきゃいけないな」

「火龍誕生祭・・・あのヴィテという者が言っていた未来の分岐点か」

あの日・・・ユウ達と初めて会ったあの夜の夜に会ったあの不思議な者。

あの者がこの時にユウのサポートをしてくれと頼んできた夜。

あの者がどのような能力を持っていて何故そのような事を言ってきたのかがよく分からなかったのだ。

・・・いや。言葉を変えよう。実は少しは検討がついているのだ。恐らく【未来視】の能力を持っている筈だ。

そうならばあのヴィテは、ユウ達の世界の「ラプラスの悪魔」いうことになるのだ。

「全く・・・なんなのだユウ達は・・・儂がこれだけ考えても全く答えが出てこない」  
しかし、これも全て過程に過ぎないのだ。

何故なら、確証が無い。

こればかりは本人に聞いてみないと分からないモノなのだ。

ユウも説明してくれなければ何一つ分からないのだから。

「はあ・・・」

「どうしました？」

「いやヴィテの能力が知りたい・・・と・・・」

「私の能力が知りたいのですか？」

「なっ!? ヴィテ!!」

「はい♪呼ばれた気がしましたから」

「お主もよくわからん存在じゃな」

「で? 知りたいのですね? 私の能力?」

「お、教えてくれるのか?」

「ここまで協力してくれましたからね。それぐらいの報酬は教えてあげてもいいでしょう」

「お、おお・・・」

「私の能力は・・・【未来視】ではありません」

「何?」

「どちらかと言えば【未来監視】と言えます」



「未来監視？ いったいどんな能力なのだ」

「この能力は簡単に分かりやすく言えば “いつでも常に未来を見ることが出来る” という、能力です」

「なっ!? そんな能力を人間が持っている訳がないじゃろ!」

「仕方ないのです。．．私は生まれたときから機械——兵器として改造された者なのです」

「っ!?!」

「この左目がその改造された証拠です」

そう言うと、ヴィテは自分の左目を指差す。

それは恐らくとてもじゃないが辛い日々であつた筈だ。

生まれたときから兵器として色々と実験されたのであろう。

しかし、ユウの世界ではそのような実験を行つていふと思つた瞬間にユウに対しても怒りを覚えてしまった。

「ですが．．．ユウ様とあのお方のおかげで私は．．．【人】として再び歩けるようになったのです」

「．．．え?」

「今度は．．．ユウ様達と一緒に過ごせる様になつたのです」

「そ、そうなのか」

というよりも、ユウはこんな常に先が分かる相手に戦って勝ったと言うのか？

儂では絶対勝てないであろうな。

「・・・あの方には私のこれからの人生・・・ううん、【運命】全てを救われました。だから私はあの方に恩返しがしたくてこのように道案内をしているのです」

「成る程な・・・しかし早く助けてくれなかったとか思わなかったのか？あれだけ強いのに助けてくれなかったかって」

「・・・それも思いはしました」

「うむ・・・」

「しかしあの方はそれでも【全ての生命を守る】という理念の為に出来ることを全てをやってくれました。それこそ自分がどれだけ傷ついていたとしても」

「あのユウがそんなことを」

「それでもあの方は、まだ足りないと言いました」

「まだ・・・足りない？」

「ユウ様の努力が【光】とすれば、私の事も含めて兵器開発等は【闇】になるでしょう」

「ほ、ほう」

「ユウ様はこの闇を払う為に出来ることを全てをやっています」

「だからどうしたと？」

「あの方は頑張りすぎたのです。だから今度は私があの方を【助ける】番なのです」

「・・・」

「それこそが私を救ってくれたあの方への恩返しなのです。私を助けてくれときと同じように【どれだけ遅くても必ず助けてそれ以上の幸せ】を与えるために」

「・・・そんなことを思われてユウは幸せ者じゃな」

「そんなことでも頑張ってしまっ困った方です♪」

「儂はユウの事を勘違いしてしまったようだ」

「大丈夫ですよユウ様は簡単に許してくれますよ」

「ところでユウにはまだ能力があるのか？あつたら教えてほしいのだが」

「流石に能力は教えてあげられませんが、特殊能力だけは教えられるですよ」

「な、何!?それはなんなのだ!!」

「・・・ユウ様の異例な力・・・それは夢を想い叶える力・・・それがユウ様の最も強力な唯一無二の能力です」

「そしてなんでこんな事になってしまったんだ十六夜、黒ウサギ」

「いや、実は黒ウサギとおいかけっこしててよ♪」

「わ、悪気はなかったんですよ！十六夜様がまさか塔を叩き割るとは思っていなかったんです！」

「十六夜だから何が起きてても不思議じゃないだろ？」

「はい・・・そうでした。すみませんでした。」

「お前が逃げてる間こっちは頑張つて逃げ切つたんだぞ」

「うるせえ！こんな面倒事ひっぱんじゃねえ！白夜叉に怒られてしまうだろうが！！」

「それが本音ですか!?!それが本音だったんですか!?!」

「これが本音だと？違うわ！クレープ食う時間がなくなつてしまつたからだよ!!」

「それが本音ですか!!?!本音だったんですか!!?!」

「お前やっぱ面白すぎるぜ!!」

「だからめんどいと思つたんだよこんな面倒事に引つ張られてしまうんだからよ」

「いいからお前達が何をしたか説明しろ!!」

「「すいませんでした」」

## 第十七話 魔王襲来の知らせ

十六夜・黒ウサギ・ユウがサラマンドラに事情聴取を受けているその頃、

「もうおいかけっこ関係なくなつたな」

「当然よ十六夜君があんな派手なことをしたのだもの」

「むしろ私は何故止めなかつたか分からないのだが？」

「だるかつたから」

「そうか」

オツス！オラ、レオンって言うんだ！ユウ以外のオリキャラがこんなことするのは俺が最初だぜ！

あつ、俺は俺って、呼ぶからな？

オラっていうのはノリで言ってみただけだからな。

んで、俺たちはなにをしてくるかというクレープ食べてんだ。

あのあとクレープが旨かつたからまた買って二人に事情を説明したあとこうして三人でクレープを食べながら街を歩き回ってんだ。

多分ユウがキレルだろうけどな・・・クレープ食えなくて。

「そうそう、俺のあとにユウ以外のオリキャラもこうやって会話するだろうから楽しみにしてくれよな。」

「そういえば貴方のギフトはいつたいどんな能力なのかしら?」

「そういえばユウ以外はあまり戦ってる姿は見えないな」

「俺のギフトの『重力圧縮』<sup>グラビトン</sup>は、名前通りの能力さ。」

「一つの物体の周囲にある重力をその物体の一点に集中させる力だ」

「つまり、重力で押し潰すギフトなの?」

「いや?ユウのおかげで色んな使い道があることが分かったんだ」

「ほんとに何者なのだアイツは」

「この『重力圧縮』で出来るのは、物体を押し潰す・物体を破裂させる・物体に助力することが出来るんだ」

「いつたいどうやってるの?」

「質問ばつかだな・・・破裂させるのは只能力を解除すれば元に戻ろうとする力を利用して破裂させてんだよ」

「確かにそれなら納得がいきそうだが・・・」

「助力はどういう事なの?」

「まんまさ。重力を集中させればそれだけ威力が増すだろ?」

「へえ〜」

「まあユウならもつと変な方向に能力を応用しそうだけだな」

「あのギフト欲しいわね、瞬間移動なんて羨ましいわ」

「それだけならまだ良いのだが・・・お前は『始終』について何か知っているか？」  
「言つていいのかな・・・どうなんだろうな」

「そんなに秘密な能力なの？」

「いや？それでもないぜ。ユウの『ワームホール時空間移動』と似た能力だからな」

「あれと同じなのか？」

「それも飛びつきり卑怯な能力」

「アイツはなんでそんな力を持っているのだ」

「キメラだからだろ？」

「納得だ」

「納得よ」



「で？お主等は何故こんなことになってしまったか分かっておるのか？」

「十六夜と黒ウサギのせいに決まってるだろ」

「お主最初の約束は何処に言ったのじゃ？」

白夜叉の言葉に対して、ユウは、？の顔をする。

確かに問題を起こしたのは十六夜と黒ウサギである。

元々は二人がおいかけてつこを始めてしまったのが原因である。

・・・・いや、それ以前に黒ウサギにあのような手紙を出したから怒って追っかけて来

たんじやないだろうか？

そして俺達はそのまま逃げ始めた・・・あれ？もしかしくなくても俺にも責任がある？

「もしかしくなくてもお主には最初から責任があるに決まっておろう」

「え!?俺何もしてないよ!？」

「黒ウサギに農作業任せたじやろう」

「・・・あつ」

「そうです！ユウさんにも責任があります!!」

「黙ってる黒ウサギ」

「ええイ！いいから早く答えろ！誰の仕業だ！」

「俺達のせいだな」

今キレているのは、「サラマンドラ」の参謀であるマンドラという男である。

このような問題を引き起こしたからこの男に事情聴取を受けているのだ。

早くクレープ食べに行きたいのにめんどくさいな。

「そういうや白夜叉。俺達に何か頼もうとしてたよな？あれはなんだ？」

「無視をするな！」

「確かにそれも問題なのじゃが・・・」

「・・・何かめんどい事件か？」

「うむ。ある人物から教えられての。ここにあまりよくない未来が見えたようじゃ」  
「よくない未来？」

「・・・ん？」

「その内容がこうじゃ。・・・〔魔王襲来の恐れ有り〕だそうじゃ」

「魔王だ?!？」

魔王とは、この箱庭にてとてつもない力を持っている者達の事を指す意味にもなるし、災厄とも呼ばれる者達でもある。

そして、*“ノーネーム”*をあのような弱小コミュニティに変えた原因でもあるのだ。

「つまり、それを俺達ノーネームに頼みたいというわけか」

「そんなものノーネームに勤まると思ってるのか!!」

「思っておるからこうしてお願ひしているのじゃ。・・・それにこのユウは僕の部下でもある。期待は出来る筈じゃがのう？」

この上司・・・俺の事をスーヴの出汁みたいに扱ってやがるな。

いいぜ、そっちがそういう事をするなら乗ってやってもつともつとハードルあげてやるよちくしょうが。

「今んとこ負け無しだからなく魔王も楽勝に勝てちやいそうだな」

「・・・何？」

おおくマンドラが反応してるしてる。

もつとあげてみようか。

「なんだつたらサラマンドラも守ってやるよマンドラさん？」

「キサマ！私を怒らせようとしてるのか!？」

「あれあれどうしたの？天下のサラマンドラの参謀さんがノーネームのメンバーに対してまるで馬鹿にされたかのような反応しちゃってさ。あの自慢げにいたのは全部演技だったのかな？」

「黙れ小僧！それ以上言えば只では済まさんぞ!!」

「それだけ大口叩けるなら結構。なら全部守れよ？それが出来れば前言撤回してやるよ」

「いったいどちらが大口を叩いているのだ!？」

「俺は自分の実力に自信がある。でもあんたはどうなんだよ」

「っ!」

「・・・」

「いいだろう！もし魔王と戦うとき、そのときは全力で魔王を叩き潰そう！そのあとはその首を晒し無様に焼き払ってくれよう!!」

「よし話は終わりだ俺のはな。後は頑張れ十六夜と黒ウサギ」

「ちよ!?置いてかないで下さい!!」

「じゃあなユウ」

「おうじゃあな」

「ふい〜」

今俺は温泉・・・しかも露天風呂に浸かっている。

あのあとクレープ食べようと思ったけど時間も時間だし、戻ってきて宿のある旅館に入りそのまま風呂に直行して今に至る。

それにしてもマンドラさんかなり怒ってたね。

演技とはいえあそこまで言いまくったのは久しぶりじゃないかな？

まあ、半分は本気だったんだけども。

白夜叉の魔王襲来の知らせはとりあえず信じてても平気だろう。

何故ならアイツが動いてるなら100%信じきれる。

それほどまでにこの知らせがどれだけ大事なのかよく理解させられる。

こんなことはだいたい非常事態の可能性が高いからその対処をしなければならぬ  
いからだ。

「で？いつ入ったお前等」

「「「ついさっき」」」

いつの間にか、ロウウイ・零・ヤマト・レオン・ミーレスが露天風呂に入ってきてい  
た。

ほんとにいつ入り込んだんだよ。

「そうだよ」

「なんだレオン？」

「クレープ旨かった」

「よしそこで正座してろその頭叩き割ってやる」

「レオン！ヤマト！ロウウイのタオル脱がせるぞ！」

「了解！」

「だるい」

「ははは・・・」

ウンオレタチヘイジヨウウンテンノヨウダナ。

「そういえばまたなんか戦いでも起こるのか？」

「やっぱ感づいちゃう？」

「そりゃあね」

「まあ簡単に言えば起こる」

「簡単にし過ぎだわ」

「でもよ・・・俺達なら負けねえだろ？」

「」「」「当たり前だろ」「」

「よし、OK！」

すると、キメラな為聴力が良いのか女湯の方から何やら声が聴こえてきた。

その内容は、

「やはりその肉体美は芸術の域に達するの？それほどまでの肉体を持ちながら己の価値を全く理解してないとは嘆かわしい事であるがやはりそれはその魅力も存在する！そのような無知な肉を調教し、どんなときでもぶべらあ!？」

・・・カコーン、というとても清々しい桶の当たる音が聴こえた後、恐らくだが白夜又はそのまま風呂に後ろからダイブしたのだろう。

あの白ロリヘンタイだったのか。

上司の新しい情報が得られた所で、

「・・・俺はなにも聞いてない。

上司が馬鹿だったということしか俺は知らない」

「なに言ってるんだよお前は」



## 第十八話 聖十字の槍

「それではこれより『造物主達の決闘』決勝戦を始めます!!」

うおおー!!、と周りの観客席から大歓声が聴こえてくる。

今どんな状況かと言うと、まあ簡単に言えばこのギフトゲームの観戦をしているのだ。

理由は三つある。

一つ、黒ウサギに謝るために耀・ロウウイ・ヤマトがこのギフトゲームで勝ち、優勝しようとしている。

二つ、その後全員でこの大会に参加しているコミュニティ―特に『ラッテンフェンガー』について警戒しているからだ。

十六夜が名探偵顔負けの推理とジン・ラッセルの知識のおかげでラッテンフェンガーは、『ハーメルンの笛吹き』と繋がりがあられるかもしれないという事が分かったからだ。

ハーメルンの笛吹きは魔王のコミュニケーションティだったらしいんだ。

なんか壊滅したみたいなんだけど、警戒に越したことはないとの事である。

三つ目は、例えハーメルンの笛吹きメンバーじゃなかったとしてもすぐに動けるように観客席にいるのだ。

それに俺はサウザンドアイズのメンバー（仮）だから出ななきゃならなかったからな。クレープまた食いたかった。

「ロウウイとヤマト大丈夫かね？」

「ロウウイは死んでも平気だ」

「そーいやレオン」

「どつたの？」

「なんか怪しい気配を感じるから魔王が来たら飛鳥を連れて一目散に向かえ」

「お？なんで飛鳥を？」

「どういう事かしら？」

「なんとなくだ」

「なんとなくってどういう事よ？」

「了解！」

「いいんだ!？」

・・・さてと、向こうの十六夜と白夜叉を止めようかな？

あの温泉のとき、俺達は風呂から上がって、牛乳飲んだりとか卓球してたりしてた

ら、十六夜がやって来てその後女性陣が上がって来て、十六夜が白夜又みたくに変態発言をし、その後十六夜と白夜又が共感の証しとして手を握ってたから今回もなんか始めるかもしれないからそうなる前に抑えないといけない。

「そーいや白夜又」

「なんじゃ？」

十六夜が手に持っていた双眼鏡を眼から離し、また持ち手が付いてる双眼鏡を離した  
白夜又もそれに答える。

・・・黒ウサギのスカートの下覗く気満々だなこの二人。

「黒ウサギのギフトー」絶対に見えそうで見えない”というギフトを付けたんだってな  
？チラリズムかよ趣味が古すぎだぜ」

・・・え!?黒ウサギそんなギフトを持ってたの!?

通りで最初に会ったとき空中で一回転したときスカートの下が見えなかったわけだ

!

キメラである俺ですら見せない程の力があるのかそのギフト!?

やべえ!使えそうで今思えば俺全く使えなかったわ!

「ふん・・・お主程の者が真の芸術の魅力に気付かんのか

幻滅じゃな」

「何?」

「いや、スカートの下を覗く芸術の魅力なんて分からんわ」

「だいたいの方がその筈である。」

「・・・え? 皆そうだよね?」

「まさか違うの!?!」

「真の芸術とはそれすなわち未知なる物への飽くなき探究心!

それを追い求める未知の想像力!

つまり真の芸術とは何物よりも勝る尽きること無き欲望!

その正体は、己が宇宙の中にある!!」

「己が宇宙の中に・・・だと?」

「なんか哲学みたいな事言ってる!?!」

「そう! それは乙女のスカートの中とて同じ事!

・・・見えてしまえば下品な下着達も、見えなければ芸術だ!!」

「見えなければ・・・芸術か!!」

「なん・・・だと!?!」

「た、確かにそんな方向性の芸術があっても可笑しくはない。」

「俺も何か作るときはその芸術性を求めたりするが、まさかこのような芸術を導き出せ

る人物が存在するとは！

「共に見届けようじゃないか。

この世に奇跡が起こる瞬間を！」

「白夜叉……！」

「ふっ……俺は今日お前の事を始めて上司で良かったと思えるぜ。

俺に新しい芸術を教えてくれたからな」

「ならば上司として命令しよう！共に見届けるぞこの奇跡を!!」

「おうよ!!」

そう言葉が合図となり、十六夜と白夜叉は双眼鏡を装備し、俺は瞬間移動で取り出した望遠鏡を構えた。

その時間僅か0.1秒というビックリな速さである。

「えっと……」

「見るな、馬鹿が移る」

後ろにいるマンドラの横にいるのが、サラマンドラのリーダーにして、北の階級支配者であるサンドラだ。

なんかマンドラの妹らしい。

ジン＝ラツセルとはよく一緒に遊んだりしてたらしい。

こんな年で魔王と戦うのか・・・頑張って勝たないとな。

「さてと、そろそろ試合が始まるな」

「頑張って応援するか」

「ほんとにごめん。本当は私が出なきやいけなかったのに」

「俺達からお願ひしたんだから当然だよ」

「気にしなくていいって」

「うん・・・頑張って来てね」

「任せろ」

・・・さてと、レオンがやったように俺も自己紹介しておくか。

俺はロウウイ。

とにかくこんな状況だが簡単に説明は済ませておこうと思う長くなるだろうし。

俺達は、黒ウサギに捕まった後耀がこのギフトゲームに参加したいと聞いて、「耀が見つけて、俺達が手に入れる・・・つまり三人で手に入れた物だ」と言いくるめてこんなことになってしまったのだ。

ていうか、零・レオン・ミーレスが戦闘してるのに、俺達だけ全く戦闘シーン出てないのはなんか悔しかったからである。

メタいな充分に。

「まあいいか・・・頑張るか」

「任せとけ」

そうして俺達は黒ウサギがいるステージまで歩いていった。

黒ウサギがいるところまで上った瞬間、

「ヤツフウウウ!!!」

「うわああああ?!?!」

いきなり巨大なカボチャの顔が目の前に現れて二人は腰を抜かして大きく尻餅をついた。

「アツハツハ! 見ろよジャック! ノーネームの奴等がビビって腰を抜かしてやがるぜ」

「お前なんでカボチャの頭してんの?」

「フオツホツホ! 申し遅れました。私はジャックと申します」

「ジャック・・・ジャック・オー・ランタンか!」

「え!? あのジャック!?!」

「ええ多分あなた様方の想像通りだと思えますよ」

「無視すんなよ!」

「アーシャ落ち着きなさい」

どうやらこの青い髪のツインテールの少女はアーシャというらしい。

弄りがいがあるようだ。

「そ、それでは白夜叉様よりゲーム開始の宣言をしてもらいましょう!」

「うむ!・・・皆のもの! 黒ウサギのスカートを覗きたいか!?!」



「ウオオオオオ!!!」

「何故そうなるんですか?!?」

「ドンマイ黒ウサギ」

恐らく隣にいるユウも笑ってるだろうな。

面白い事があればノル奴だからな。

「さてと、気をとり直してゲームを始めよう」

白夜叉がパンパン、と手拍子を起こした瞬間、ロウウイ達が立っていたステージから植物が生えてきた。

「うおお!?!」

「す、スゲー! ユウでもこんなこと出来ねえぞ」

「ノーネームがはしゃいでらあ」

「アーシャ悪口は言わないでください。ゲームとは皆が楽しむから喜ばれるのですよ」  
「うっ……」

そして植物の成長が止まりきったとき、恐らく地上からかなり離れた場所まで上がったと思われる場所に上がったと思う。

「ルールは簡単……この木から脱出した者のチームの勝ちだ! ……それでは開始っ!!」  
白夜叉の合図を引き金となり、ゲームが開始された。

「さあ勝負だノーネームの奴等！」

「自己紹介しないのか？俺はロウウイだ」

「俺はヤマトだ」

「ほう・・・ノーネームの癖によくわかるな。この私は天才な・・・」

アーシヤが言い終わる瞬間、

「よし行くぞヤマト」

「あいよ」

ヤマトが足をジェットエンジン付きのキヤタピラーに変化させ、ロウウイはそれに乗って遠くに走って行ってしまった。

「あのやろう共！行くぞジャック!!」

「ええ！彼等は地上から行くようだ。空中で移動出来る私たちが有利です」

「炎で足止めする！」

アーシヤがロウウイ達に炎を発生させるが、炎が自然に消えて二人は平気な顔で炎から出てきた。

「何?！」

「面白いギフトをお持ちのようですね」

「やっぱロウウイの加熱処理変なところで役に立つな」

「知らんよ」

俺の“加熱処理”は、熱を加え、処理を施す事が出来る。

それは熱を熱くする事も冷たくする事も出来る。

炎とは熱い熱から発生しているだけだ。

つまりは逆の事を行えば炎が消える。

それを利用して炎の海から出てきたのだ。

「くっ！・・・すまないジャックさん」

「分かりました。ならば私は彼等の足止めを。アーシャは先を行きなさい」

「・・・ヤマト俺は降りる」

「ロウウイ？」

「二手に別れてくる。なら先に行つてこい」

「・・・了解」

ロウウイはそのままヤマトから飛び降りて、ヤマトはそのまま先に行つてしまった。

「まさか一対一でお相手してくれるとは」

「まあね」

「ならこの炎を受けなさい！」

ジャックは手に持っているランタンから炎を発射してロウウイに命中させる。

(こんな程度・・・っ!?)

ロウウイは異変に気付いた。

自分の体に付着した炎が熱を抑えても消えないのだ。

このままでは確かに服が燃えたりしないが空気は別である。

炎が燃えるには空気が必要である。

熱を抑えても空気が燃え続ければ酸素を補給出来なくなる。

つまり息が出来なくなるのだ。

「私の炎は地獄の炎！その程度では決して消えたりはしない！」

「・・・なら」

刹那・・・まさに一瞬の出来事であった。

炎の渦を一闪―たったの一振りですべての炎を薙ぎ払ったのだ。

その中心にいた人物――ロウウイの手には、一本の槍が存在した。

血塗られたかのように赤い紅い穂先までも真っ赤に染まった十字型の刃の槍を右手

に持っていた。

「そのような槍を持っていたのですね」

「ユウと似た感じだな。本来のギフトカードに記載されてない力だ」

「ユウ・・・白夜叉様の部下になった者ですか。」

これはこれはかなりの強敵に出会えたようだ」

「・・・行くぞ【怨呪槍 レガリア】」

二人が構えた瞬間、

「試合終了ー!!!この勝負引き分け！」

「「ありや？」」

「やっちゃったぜ☆」

「ほんとになにやってんだよ」

「アーシヤなにながあつたのです？」

「同時に脱出しちやつたんだよ！くっそー！！」

「あはは・・・」

試合が終わり皆が休憩しているその時、空から黒い羊皮紙が舞い降りてきたのだ。

「ま、魔王がきたぞおー!!!」

## 第十九話 黒死病の魔王

「魔王？」

「とうとう来たか」

「レオン頼む」

「了解！ そんじやあ飛鳥行くぞ」

「えっ？ ちよつと担がないでつてきやあああ!?」

「・・・一部誘拐だな」

「言うなそんなこと」

「さてと十六夜どっち行く？」

「ああ？ あの変な野郎蹴ってくる」

「見えてるの!？」

「俺も見える」

「流石キメラ」

「お主等勝手に動くな！」

「白夜又は情報提供してろ！ 恐らくお前は動けなくなるからな」

「なっ!? 待て!」

「準備はいい? ヴェーザー、ラッテン、シユトロム」

「ああ準備は万端だぜ」

「ええ平気よ」

「  
.  
.  
.  
」



ふふふ、私達の準備は大丈夫なようね。

これだけの準備をしてきたのだから。

絶対に失敗する訳にはいかないからね。

それにしてもあの白夜叉の部下になったあのユウって奴は最初に会ったとき全く覇気が無いから強そうには見えないわね。

全くなんであんな奴が部下になれたのか訳が分からないわ。

そんなことを考えていると、

「!?マスタ―避ける!」

「っ!?ヴェーザー!」

ヴェーザーがいきなり現れた金髪の少年に蹴り飛ばされた。

それに気をとられてる隙に自分にも殺気が現れて、気付いたときには目の前に赤い帽子を被った白髪の少年に蹴りを入れられそうになった。

それを間一髪で受け止めるが勢いを殺せず、そのまま吹き飛ばされてしまう。

「くっ!・・・」

「・・・手加減は要らなかったな」

その顔を見たことがある。

あの路地裏にて視察のために出会ったあのユウ・クレメンズだったのだから。

「……お前あの路地裏で会った奴か」

「……何故分かったの？」

「雰囲気で分かるさそんなもん」

「……そう、どうやら見くびっていたようね」

俺はまだ心を読む能力が復活していない。

何故って？なら聞こう。

目を瞬き無しですつと開けたままでいられるか？

俺は無理だ。だから閉じる。

まあいいや・・・今俺の前にいるのが魔王——物凄く幼く見えるがやはり雰囲気は戦いに身を投じてる感覚がはつきり分かる。

十六夜達に戦わせるわけにはいかないな。

「目的はなんだ？只襲うって訳じゃないだろ？」

「あなたは敵に自分の計画を話すタイプ？」

「話さないな」

「ならそういうことよ」

「成る程分かりやすいつな!!」

ユウはまた瞬間移動で蹴りに行くが、少女から黒い霧が出てきてそれを阻む。

だがそれだけでは終わらずその霧がユウの周りで漂い、それを吸ったらいきなり肺が苦しみ始めたのだ。

「ぐっ!?!なんだこれは!?!」

「あらあら早速かかったのね」

「何を・・・しゃがった!」

「さあ？あなたの体を見れば分かるわ」

そう言われたので自分の体を見てみると、所々に黒い斑点が着いていたのである。

「まさか『黒死病』か！」

「あら？勘が良いわね。でももう終わりよ。体に付着したならもう瞬間移動でも取り除けないわ」

「・・・ならこんなのはどうだ？」

「はっ？・・・」

少女がユウの体を見てみると、ユウの身体中にあつた黒い斑点が全て消えていたのである。

「なっ!?! いったいどうやって!?! まさかあなたの種族に黒死病でもあつたの!?!」

「いや流石にキメラでもそんな種族はない。これは俺の恩恵ギフトの効果だ」

「他にギフトがあつたのね」

「それにお前の正体も分かつた。お前は——」

ユウが喋る瞬間、

「皆さん！ジャッジマスター審判権限の使用が許可されました!! 直ちに戦闘を停止し、代表者は召集して

ください!!」

「空気読め黒ウサギいいいい!!!」

「・・・お笑いコミュニティなの？あなたのところ」

「言つとくけどこのゲームに不備はないわ」

黒ウサギから話を聞いてみると、このゲームは何か可笑しい点が多いらしいのだ。

一つは、この魔王達がそれぞれどのような伝承のゲームでヒントというヒントを記載していないこと。

二つは、なんか皆がこれが重要だと言ったこと。

それは、俺は知っているが白夜叉がゲームの参加者なのに参加できないということだった。

あんまり関係ないんだけど俺にとっては。

「白夜叉様に参加できないことに何も思わないのですかユウさん!!」

「俺にとつては黒ウサギに邪魔されたことが一番思うことなんだが?」

「あなたのとこほんとはお笑いコミュニティじゃないの?」

「お笑いはこのバカウサギで充分だ」

「バカウサギじゃないです! 黒ウサギです!」

「で? 不備はないとどうして言いきれるんだペスト」

その言葉にノーネーム側のメンバーが全員固まったのだ。

ちなみにメンバーは、十六夜・黒ウサギ・ジン||ラツセル・ユウ・零・サンドラ・マンドラの七人である。

零を連れてきた理由? そんなのなんとなくに決まってるだろ?

「あら? もう私の名前が分かったの?」

「黒ウサギが邪魔しなければな」

「だからなんで黒ウサギのせいなんですか!」

「自覚なしか」

「何故敵同士なのにそんなに息が合うのですか!？」

「それは置いといて・・・何故ならちゃんと段取りを踏んだのだもの。それなのに不備があるなんて言われたくないわ」

「成る程。ならこれ以上問い詰めても無駄だな」

「そんな！彼等は隠蔽工作を行った疑いが！」

「そんなの説明できるか？俺は無理だ」

「あら？分かってるじゃない。あなた私達の仲間にならない？」

「申し訳ないがノーネームで間に合ってるよ」

「そう・・・まあどうせ全員私のモノになるからいいわ」

「何?」

「・・・あなた達私達の仲間にならない？そうすれば全員助けてあげるわよ」

ペストがそう聞いてきた。

まるでこのゲームは必ず自分が勝つとでも言いそうな雰囲気である。

流石は魔王と言われる者であるが、次のユウの一言にペストは眉を少し動かした。

「いや。お前達の方が弱いからいいや」

「・・・なんですって?」

「テメエ。調子に乗るなよ」

「ヴェーザー……」

「このゲームは、お前達が今有利な条件に出来る権利がある。だがそれでも俺達には勝てないぞで？」

「……そう。ならゲーム再開日は一週間。」

そしてあなた達へのペナルティは、ユウ一人に背負ってもらおうわ」

「なっ?!?そんなこと認める訳には!」

「代わりにそのウサギをゲームに参加させても良いわよ? “箱庭の貴族”が居れば少しは楽になるでしょう?」

「構わんぞ」

「ユウさん!?!」

「じゃあ条件を付けるためにあなたのギフトカードを見せてもらおうわ」

「はいよ」

そう言うユウは簡単に自分のギフトカードをペストに投げ渡した。

ペストはそのカードを人目見ると、ペストはくすり、と微笑した。

「ならペナルティは二つ。」

一つは、「人間以外の種族の使用禁止」よ」



「なっ!？」

「まあそう来ると思ったよ」

ユウが分かりきっていた顔でそう答える。

だがユウはキメラである。

人間以外の種族が使用出来ないとなるとそれはキメラにとって致命的になってしま  
うのだ。

「二つ目は、「このカードに記載されているギフトの禁止」よ」

「ふえ？」

「分からないでも思ったの？あなたギフトを隠しているのよね」

「ソナナコトシテマセンヨ？」

「片言になってるわよ」

そう、ユウは自分のギフトでギフトカードに書かれていた文字を誰にも見させないた  
めに隠していたのだ。

しかも見た人が誰もが疑問に思ってしまうようなバレバレな隠し方で。

「それではユウさんは何も出来ないじゃないですか!」

「別にこれは正当な条件よ？」

「まあ構わんぞ。ペナルティがあっても勝てると言っちゃったからね」

「ユウさん!!」  
「フッフッフ…楽しみね一週間後が」

「大丈夫なのですかユウさん」

「平気だって。人間としての力は使えんだから」

「ですが人間の力しか使えず、ギフトの使用禁止までついてしまつてはあんまりにも」

「まあ足止めは出来るか」

「気楽すぎです!!」

「ああそうだ黒ウサギ」

「は、はい!」

「・・・サンドラ任せた」

「はい?・・・」

「じゃあなく♪」

「ちよ!?!ユウさん!?!」

「・・・なんとかなるな」

その台詞を呟いていた時のユウの顔を黒ウサギは見る事が出来なかったが、絶対に  
見ることはしてはいけなかった。

何故ならばユウの顔は・・・まるで獲物を狩る悪魔のような残忍で恐怖を呼び  
込み、絶望を見せつけてしまうような顔をしていたのだから。

## 第二十話 最強種の由縁

約束の一週間後のペストは、

「・・・」

「どうしたのマスター？何か考え事？」

「・・・ええ、ユウの事よ」

「あのガキか・・・今回の最弱じゃねえのか？」

「いいえ、まだよ。なんてったってギフトカードに記載していない力も使えるのだから」  
そう。ユウには制限として種族使用の禁止と能力使用の禁止を付けたのだが、まだ自分達の知らないギフトが隠されているため今回のダークホースとなっているのだ。

「？　そこまで心配することなくないか？」

「馬鹿ね。貴方は知らない能力の相手と戦って勝てる？」

「・・・確かにキツイが所詮は人間の力しか使えないなら警戒はいらないだろ」

「いえ、まだ引つ掛かるのよ。ユウはギフトカードに書かれていた文字を隠していたでしよう？」

「ああそうだな」

「何故わざわざそんなことをしたのかよ」

「うーん・・・何故だ？」

「それが引つ掛かつてるのよ。あのときは確認もしなかったし」

「・・・可能性の話をしなすと最強の能力とか？」

「当たり前でしょ？隠してるのだから」

「・・・見つかつては不味いこととか？」

「まあなんにせよいいわ・・・どうせ私達が勝つもの」

そのペストの言葉にヴェーザーとラッテンは、微笑んでいた。

自分達の勝利を目前にしているのと同じように。

「・・・ヴェーザー。貴方に『神格』を与えるわ」

「なっ!?!マスターそれは」

「確実にユウを倒しなさい」

「・・・了解だマスター」

「時間・・・ですね」

「さあ！始めようかゲームを!!」

「なんでユウさんが一番張り切ってるのですか!!？」

「え？ゲームは楽しむもんだろ？」

「そんな当たり前の事を・・・はあ」

「じゃあ作戦通りに俺と十六夜は敵の本陣に突っ込む。

黒ウサギとサンドラ、そしてアンはペストを抑える。

他はラッテン、シュトロム、ゲーム攻略を頼む」

「だがユウ。レオンはどうする？」

「飛鳥も来てない」

「・・・南無三」

「「諦めたらそこで試合終了だぜ？」」

「まあ行くか」

正直ゲーム攻略なんて頭で考えても分からん。

なら俺に出来ることは、攻略しやすいように邪魔者を倒すだけだ。

俺と十六夜はそのまま一気に移動し、敵の本陣の近くに近付いたとき、

「・・・わりいが」

「ん?・・・」

「ここで死ねや!」

ドゴツ!、とヴェーザーがユウの頭目掛けて太いパイプのようなもので地面に叩きつ

け、ユウの体が一瞬で埋まってしまった。

「いっつー!」

「はっ・・・人間の癖にかてえな」

「ヴェーザー・・・お前「神格」を?」

「気付くか・・・お前の種族にも似たようなのがあるということか」

「・・・十六夜先に行け」

「馬鹿言え。お前の実力を見るいい機会だ。見物させてもらうぜ」

「・・・了解」

そう言つてユウはヴェーザーに向き直る。

その顔は純粹に楽しむ気満々の子供のような顔をしていた。

「戦うんだな」

「当たり前だ。逃げるかよ」

「そうかい・・・なら死ね」

「そうだ・・・お前に面白いもん見せてやるよ」

そう言つてユウは右手を出すと、手から金色の炎が燃え始めた。

まるでユウの生命の輝きのように見えた。

「それは？」

「・・・【王金おうじんの波動はとう】」

「波動？」

「命ある者達にししか使えない特殊な力さ。どの種族にもある王を主張する証にもなる」

「それが王を？」

「お前だつて使えるさ。ただ使い方を知らないだけさ」

「・・・で？それはどんな力だ」



「・・・生命の炎」

「あつ？」

「これは俺の寿命を燃やし威力を増す力さ」

それは言葉に受けとれば、燃やせば燃やすほど死に近づく能力ということである。

「・・・お前死ぬのが怖くないのか？」

「怖いよ？でも死なない」

「・・・どういう意味だ？」

「質問多いな・・・簡単さ、不死だからだ」

「なっ!!」

これには十六夜も驚いている。

何せ自分が越えようとしていた者がまさかの不死者だというのだから。

そうなればユウはその波動の力を、

「100%発揮できるといふことさ」

「ちっ!!それはギフトカードには!!」

「書かれてないさ。残念だったな」

「ありかよそんなの！」

「まだ話は終わってない・・・体を鍛えてるとはいえど、人間だけの力では対抗しづらい」

「そ、そうだ！まだ！」

「リミット・・・【限界】」

ユウが何かを呟いたと同時に、ユウの右手の金色の炎が手だけじゃなく右腕全体に覆われていった。

その手の炎は形を変え、まるで今にも噛み付こうとしている龍の頭のような形に変化したのだ。

「言っただろ？100%発揮できるって」

「な、な・・・」

既にヴェーザーと十六夜が絶句していた。

自分達がどれ程高い位置にいる相手と戦おうとしているのか理解し始めたからだ。

「でもまだだ」

「えっ・・・」

「リミットブレイク・・・【限界突破】」

その言葉を呟いた瞬間、右腕全体の炎がユウの体に吸い込まれるように移動し、それと同時にユウの白い髪がどんどん黄金色に染まっていき、ユウの瞳も黄金色の変わっていったのだ。

ユウは被っていた帽子を取り、そのまま十六夜に投げ渡した。

そのときのユウの顔はただ笑っていたのだ。

「さてと・・・覚えておけヴェーザー」

ユウは笑いながらヴェーザーの方に腕を向け、

「これが最強種の力さ」

圧倒的な強者の余裕を見せつけたのだ。

「貴方達私の演奏聴いていかない？」

「「遠慮する」」」

一方の人外パーティはラッテンとシュトロムを相手していた。

他のメンバーはゲーム攻略に行ったがやはりこちらもゲーム攻略なんて頭で考えても分からん組ばっかりだったのだ。

「じゃあラッテンはロウウイと零が」

「シュトロムはヤマトとミーレスが」

「狩る!!」

「貴方達仲良いわね」

といっても、シュトロムはいいとして、ラッテンの音楽を防ぐ方法などこの二人には全くない。

どうするか悩んだ結果、

「ごり押しだな」

「・・・貴方達脳筋ばつかなの？」

「やるだけやる」

そう言つてロウウイは紅い十字槍を取りだし、零は黒と白の似た形の二本の剣を取り出した。

「怨呪槍 レガリア」

「干将・莫耶」

「さあ始めよう!!」

## 第二十一話 異変の原因

「早く偽りのステンドグラスを見つけて破壊しろ！ノーネームの奴等に遅れを取るなよ！！」

マンドラは、サラマンドラのメンバーに命令しながら考え事をしていた。

例えどれ程の力を持っていたとしてもそれが使えなければこのゲームにて足手まといになるはずなのだ。

なのにアイツ——ユウは自ら敵の本陣に突っ込んでいったのだ。

自分が取れない鎖に縛られていると知っていなながらも。

「アイツに遅れを取ったら恥さらしになる……こちらも奮闘しているのだ。

……さっさと倒してこい」

「へえく？貴女達三人が私の相手なの？」

そう言つてペストは、自分に挑む三人を睨んだ。

一人は、サラマンドラの幼いリーダー——サンドラ。

一人は、箱庭の貴族と言われる兎——黒ウサギ。

一人は、ペストと同じような能力を持つ少女——アン。

正直に言つてアンの力が分からない以上力差はあまり分からない。

でも負けるはずがない。

何故ならある人から貰つた物があれば絶対に負けることがないからだ。

「ユウさん達が倒せるように時間を稼ぎましょう！」

「分かりました！」

「兄様が来れば余裕だからね」

「・・・貴女達どうしてそこまでユウを待っているの？」

「アイツには今なんの力も持たないただの人間なのよ？」

「そう思っているのは貴女だけだよ」

「・・・は？」

「兄様なら絶対に負けない。」

「何よりも妹である私が言うのだから間違いない」

「・・・そんなことあるわけが——」

ペストが言い欠けた刹那、

ドゴオオン、と遠くに黄金色の炎が空に向かって燃え上がっているのが見えたのだ。

そこはヴェーザーが向かっていった場所だ。

ならあそこでヴェーザーと戦っているのは、

「兄様だね」

「!!」

「どうする?・・・兄様もうすぐここに来るよ?」



「  
・  
・  
・  
俺の勝ちだ」

「  
・  
・  
・  
俺の負けだな」

遠くから見学していた十六夜の目からしてもこの実力差は歴然だった。

ユウがいつもの白髪の戻っているのに対して、ヴェーザーはボロボロの姿で地面に叩きつけられていたのだ。

以前自分も黒ウサギ目掛けて蹴りを入れ、穴を開けた事はあるがそれとは比にならない位の大穴をユウは一撃で作ってしまったのだ。

これ程の力を見せつけられても一つの感情が出てくるのだ。

・・・戦いたいと。

「・・・お前絶対に魔王になった方が良いで？」

好き勝手しまくれるぞ？」

「そんなのつまんねえよ。」

それよりも強敵と戦いまくってる方がよっぽど楽しいぜ」

「フツ・・・この戦闘馬鹿が」

「俺は馬鹿じゃねえ。」

「アホなんだよ」

「ハハハツ・・・お前には敵わないな」

ヴェーザーは笑いながらも楽しそうな顔でそのまま消滅していった。

ユウの一撃を受けても粘っていたのだから強かったのだろう。

「……行くぞ十六夜」  
「……おう！」

「流石にごり押しキツかったか？」

「当たり前だと思いが？」

今現状どうなってるか？

俺達二人はラツテンに攻撃を与えられず、ヤマト・ミールレスもシュトロムに効果的なダメージを与えられてない。

以上。

すると近くの壁から亀裂が入り、

「ロウウイ殺しに来たぞー!!」

「だるいだるい」

「レオンやっとか！飛鳥は？」

「ちゃんといるわよ・・・」

「悪いけどレオンはシュトロムの相手してくれ」

「オツケー！じゃあ俺の部下に任せる」

そう言うのとレオンは足下に魔方陣を描き、

「さあ来い！【ゴア・マガラ】!!」

「「おいモン○ンのモンスター出してんじやねえ!!」」

出てきたのは、漆黒の鱗を纏い、濃い紫色に発光している角や爪を持ったドラゴンの姿だった。

「最初からクライマックスだぜ！」

「それもネタ！」

「メメタア」

ゴア・マガラは、シュトロムに突撃し、そのまま引つ張っていつてしまった。  
・・・あれ多分あの二人も巻添えになつてるだろうけど気にしないでおるか。

「じゃあ私はさっき手に入れたこの子で！」

「ごめん多分飛鳥の出番ないわ」

「・・・えっ？」

「ちよつと無視しないでよ!!」

「そうだらツテン」

「な、何よ？」

「後ろ」

「え？後ろ」

後ろを見ることは出来なかった。

何故ならもう斬られていたのだから。

死者を操る死神——レオンハートの手によつて。  
ラッテンは叫ぶ間もなく簡単に消滅していった。

「お前最低だな」

「レオン・・・卑怯だろ」

「死神に卑怯も糞もあるか？

無いだろ」

「確かにな」

「じゃあ親玉の所に行きますか」

「ラジャー」

「そ．．．んな．．．ヴェーザー．．．ラッテン．．．」

二つの位置から来る風が止んだ。

それはつまりそこでの戦闘が終了したのだ。

しかし、マスターである自分には分かる。

あの二人が敗れたのだと。

「もう．．．いいわ。」

全員ころしてあげる!!もう手加減しない!!!」

「「っ!!」」

三人が身構えた瞬間、ペストに変化が起きていた。

それはペストの胸の辺りが光輝いていたからなのだ。

「あれはいつたい!?!」

「おい黒ウサギ」

「平気か三人とも」

「ユウさん！それに皆さんも！」

「あれ？ヤマト、ミーレス。」

「シュトロムはどうしたの？」

「レオンの契約獣が倒した後、ミーレスの時間止めで飛んできた」

「それも便利だな」

「て言うかさ」

「・・・うん」

「・・・ペストのさ」

「胸の辺りで輝いてるの」

「「「「【聖杯】じゃねえか!!」「」」」」



## 第二十二話 決着

「聖杯……とは何ですか？」

「ああ……なんて説明すればいいのやら」

「とりあえず色んな願いが叶う杯だと思えばいいぞ」

「な!? それは凄いギフトですよ!」

「ギフトじゃあねえ」

「てことはこの世界以外にも聖杯が絡んでるのか」

「これはグラウンド「それ以上はいけない」……」

「貴方達ほんとお笑いコミュニケーションじゃないの?」

「「絡んできている時点で貴女も同類です」」

「……まあいいわ、すぐに殺してあげる」

ペストは、その身に取り込んだ聖杯の力を使い、自身の肉体を変化させた。

それはユウにとってついさつき戦った相手と同じ気配になったのだ。

「ペスト……お前神格を!」

「ええ……これで私は貴方も殺せるわ」

「・・・」

ユウは黙って少し考えた結果、

「黒ウサギ」

「は、はい!!」

「お前確か箱庭の貴族だったよな？」

「そ、そうですね・・・」

「てことは、幾つかある審判権限ジャッジマスターの中にアレがあるな」

「えっ?・・・! 成る程! ってかなんで知ってるのですか!？」

「白夜叉から聞いた」

「白夜叉様ああ!!?」

「まあ早くしてくれ」

「分かりました分かりましたよ! ではでは皆様を月旅行ツキリョウに連れてってあげます!!」

黒ウサギがギフトカードを持つと、それから光が発し全員の目が見えるようになったときにその景色は一変していた。

何故ならそこはさつきまでいた都市ではなく、月の表面に立っていたのだ。

「これで黒死病は使えないし、バレる心配もない」

「え?」

「零」

「ん？」

「やれ」

「おうともよー！」

その返事を合図に零が手を動かすと、ペストの周りに金色の波紋が現れ、そこからペストの動きを封じるように鎖が巻きついたのだ。

「これこそが【天の鎖】だ！」

「神仏を取り押さえる鎖とかチートだろ」

「神格も神仏と一緒だしな」

「貴方達ふざけるな！こんな鎖！」

「ムダムダア！何せユウでも千切れないからな！」

「仕方ないだろ！・・・まあいいや。」

トドメ指すぞー！」

そして人外六人がそれぞれペストを取り囲むように移動し、

「そうだ黒ウサギ」

「こ、今度は何ですか!?!」

「・・・帝釈天・・・」

「……え？」

「さあ！やるぞお前ら！」

「……やるか」

ロウウイは紅い槍を取り出した。

しかし、その槍はあの「怨呪槍 レガリア」では無かった。

持ち手は似ているが先端の穂先の形状が違っていた。

渦巻き状にうねり捲つていて、その先端が二又槍の形状になっている。

その槍の先が狙うはただの一点。

その一点に向かっていく血塗られた聖槍。

「……【断罪槍 ロンギヌス】」

その槍は、一言で簡単に言えば、神殺しの槍なのである。

「さっさとトドメ指すか．．．トリース・オン 投影開始！」

零は魔力を集め、その手に武器を複製する。

その左手にはドリル状の剣が握られていた。

その剣を赤い矢に変化させていた。

「カラドボルグII 偽・螺旋剣」!!」

「ざくつてとー！ やつと必殺技が撃てるぞー！」

そう言い、ヤマトは右手にハンドガンを持ち、懐から黒い銃弾を取り出した。

実はこの銃弾は特殊な方法で作られているのだ。

誰が作ったか？

そんなのユウに決まってるじゃないか。

【ファントム・バレット 幻影の魔弾】

ヤマトはその銃弾をハンドガンの中に装填した。

この銃弾の特殊能力は、射撃／投擲、等で能力を発揮する性能の武器の力を弾に込め、活用するという能力なのだ。

そう。それは詰まるどころ射撃性能があればどんなものも銃弾として使えるのだ。

例え、神殺しの武器であつてもだ。

【ファントム・バレット幻影の魔弾・グレイ・ホルク死棘槍】

「神殺しなら任せとけ!!」

レオンは、虚空から専用武器「クロノスの鎌」を召喚し、それを大きく振りかぶるように構える。

「元々死神なのに今更神殺しの武器を持って任せろと言われてもなんだがなく、と思われてしまうだろうがあまり関係ないので言わないようにしましょう。」

「この鎌は刈り取った者の魂を裁く!!」

【ジェノサイド・リーパー】!!」

「・・・技名とか言わなきゃ駄目かな？」

そうなんかメタ発言をしているが気にしないでおこう。

だがそういうミールレスは、既に撃てる体勢をとっていたようだ。

ペストへと照準を合わせ、その右手にはレオンから貰った鉛玉を親指で弾くように置き構える。



そしてミールレスは、更にギフトを使い、四枚の歯車を斜線状に真っ直ぐ並べたのだ。「これで加速させるか。」

・・・撃つよ【加速超電磁砲】  
アクセル・レールガン

「ユウさん！帝釈天様に何か!?!」  
「いや？とりあえず見てろ」

そう言うとは何処から取り出したのか分からないがユウの右腰に一本の剣の形をした刀を取り付けていた。

そしてその剣から一つの光が出て、ユウの右手でその輝きを増し、一つの槍に変化していた。

それは、黄金に輝く雷イカツチの槍。

太陽の栄光をも獲得し、その輝きをより増したもの。  
あらゆる障害をはね除け、その一撃を貫かんとするもの。  
その手に握られているは、戦いを収める光とならん。

「その槍は!!?」

「太陽の主権を得し雷槍よ! 焯天の敵を穿つものよ!

今ブリューナクここに! 不俱戴天たるものを貫かん!!

【太陽神槍・金剛杵】!!!」

「くっ！なんなのよこの鎖！全く外れないじゃない！」

その頃ペストは【天の鎖】を外すのに、苦労していた。

何故外れないかというと、この鎖は神を封じ込め弱体化させるための道具なのだ。

聖杯の力を使って、神格を得てしまったせいでこのように封じ込まれてしまったのだ。

そうこうしてる内に六方向からユウ達の攻撃が飛んで来たが、生憎鎖で身動きが取れない状況になっているのだ。

つまり、ペストに防御手段は無いのだ。

「ぐっ?!ううう?!」

あまりの一撃に一瞬意識が飛びかけたが、このまま食らっていれば体が吹き飛んでしまうのだ。

しかし、まだペストには秘策が残っていたのだ。

そう。自分にはまだ聖杯が残っている。

聖杯があればいくらでも復活は出来るのだ。

そう思い聖杯を取り出そうとするが、ここでペストはあることに気付いたのだ。

自分の体内にあったはずの聖杯が消えているのだ。

「な、何で?！」

「ごめんね? 私が回収しちやっただからさ」

「!!」

そこにいたのは、自分と殆ど同じようなギフトを持っているユウ・クレメンズの妹。

「アン・クレメンズ!!」

「じゃあね? また会えたからね」

ペストは必死に手を伸ばした。

そうしなければ、こんな自分に着いてきてくれたあの二人に申し訳がたたないのだ。

どうしても・・・あの二人を・・・裏切りたくない。

そう願いながらアンの持つ聖杯に手が触れる瞬間、

ペストの体は無惨にも粉々に消滅していった。

それは儚くも気高く、力強く生きようとした一つの生き物としての輝きである。

## 第二十三話 旅立ち

}\  
???  
}

「・・・礼を言わせて貰うぞヴィテよ」

「それはどうも」

「お主がいなければ今頃どうなっておったか」

「白夜叉様は何も出来ませんでしたしね」

「うぐつ・・・それを言われたら反論出来んな」

「ですがユウ様の手助けが出来ましたから大丈夫です」

「・・・少し聞きたいことがある」

「ここで白夜叉は、常に疑問に思っていたことを問い詰めてみる。

もし、これが本当なのだとしたら、このヴィテと戦わなくてはいけなくなる。

それほどまでに不可解な疑問をヴィテにぶつけてみた。

「お主は・・・知っていたのか？こうなる未来を」

「・・・白夜叉様に会う前から、と言えば宜しいですか？」

「っ！・・・お主は知ってて黙っていたのか」

「仕方ないのです。」

本来私はこちらの世界に干渉してはいけませんのです。

実際に干渉出来るのは、ユウ様とユウ様が連れてきた者達だけなのです」

「お主は、違うのか？」

「私は少し特殊な方法でこちらに移動して来たのです。」

元々ユウ様にも内緒ですからね」

「……この事ユウは、気付いてると思うか？」

「気付いてると思いますよ。」

あの人は、そういう小細工が効きませんからね」

「……」

「ともかく……ご協力ありがとうございました」

そのヴィテの金色の瞳は、じつと白夜叉の方を向いていたが、白夜叉は分かっていた。

その目が向いているのは、自分では無い。

その目に写るは、一つの運命そのものを写していた。

「さあ〜つてと！聖杯回収したからそろそろ別の世界に移動しなきゃな！」

因みに俺は、荷造りはとっくに済ませた。

だって俺の時空間移動ワームホールを使えば、俺の荷物を別空間に移動させて簡単に片付けられるからだ。

つくづく便利な能力だこれ。

他の五人も今荷造りの真っ最中だ。

まあ時間がかかるだろうな。

そうこうしてる内にノーネームの基地の中から黒ウサギが出てきた。

・・・まあそうなるよな。

「・・・本当に行つてしまうのですか？」

「仕方ないだろ？これは最初の約束なんだからな」

「そうですか・・・寂しくなりますね」

「聖杯を回収したからこの世界は正常な歴史を辿るようになる。

もう心配は要らない」

「そうじゃありません！ユウさん達とお別れしなくてはいけないことです・・・」

「黒ウサギ・・・」

「・・・絶対に泣きませんからね！仲間の旅立ちを精一杯笑顔で見送るのも大切な事です

!!」

そう言っている黒ウサギの目には涙を流して赤くなっている場所もあった。

恐らくここに来るまでの道のりでも泣いていたのだろう。

そりやそうだ我慢なんて出来るわけがない。

彼女は、ノーネームが崩壊したとき仲間達がバラバラに行方不明になってしまったのだから、必然的に心が悲しんでいるのだろう。

・・・流石にこのままにした状態で旅立つ訳にはいかんよな。

「黒ウサギ、知ってるか？【平行世界】と【時空世界】と【虚空世界】の三つを」



「へっ?・・・し、知りませんけど」

「涙拭きながらよく聞いとけ。」

「この三つの世界は、三つとも一緒だが三つとも別々なんだよ」

「ど、どういう意味ですか?」

「まず【平行世界】・・・【立体交差平行世界論】は分かるよな?」

【立体交差平行世界論】が分からない人は、簡単に分かる取って置きの方法がある!

・・・

・・・

・・・

「・・・ググってくれば一瞬だ。↑他人任せ

「ええ、分かります。」

「でもそれがどうしたのですか?」

「十六夜・飛鳥・耀の三人は、【平行世界】から来たという認識は分かるな?」

「分かりますがいったい何を仰りたいのですか?」

「俺達六人は、【平行世界】じゃない【時空世界】から来たんだ」

「は?・・・」

「【時空世界】というのは、名前の通り、時間と空間が色々ごっちゃ混ぜになつてる世

界だ。

その世界に正しい時間と空間は存在しないんだよ」

「? それでは【平行世界】と変わらないのでは?」

「いや変わるんだ。」

例えば時間を行き来出来て、空間を行き来出来ない奴がいるとする。

そいつは、それで運命がどのように転がるか分かるようになる」

「な、何ですか!?!」

「そいつは、時間の干渉を受けないからだ」

「へ? え?」

「時間とは、その生物が生きていたという証を示してくれるものだ。」

空間とは、その生物の人生を残させてくれる場所になるものさ。

時間と空間・・・その二つが合わさる事で、その生物の【生きた歴史】に変化するの

さ」

「は、はあ・・・」

「なら時間も空間も越えられる生物はいったいどうなるのか分かるか?」

「え? えつと・・・」

「分からないならいいよ。」

その生物は、生きていた証もその場所も捨ててしまった者になるのさ。

そして何も残らない・・・そんな【運命】になってしまうのさ」

「そ、それじゃ時空間移動のギフトを持っていてユウさんは！」

「まあ・・・そうなる。」

俺が何をしようが居なくなればそれは消えてなくなる」

「そ、そんなの！悲しすぎます!!」

「いやいや。」

実はそこまで不幸ばっかじゃないんだよ」

「ふえ？」

「この聖杯は恐らく【平行世界】のじゃない。」

【時空世界】か【虚空世界】から来たものだ。」

それによりこの世界は【平行時空世界】に変化したのさ」

「な、何ですかそれは？」

「簡潔にすれば【時空がごっちゃ混ぜになった平行世界】さ」

「ますます訳が分からなくなりました」

「まだ分からないのか？」

「つまりは、俺みたいなものだよ」

「??？」

「……あらゆる干渉を受けないということだ」

「ならそうと早く、」

その時彼女は気付いたのだ。

彼と同じということは、先程の説明通りに並べていくと基盤が無い状態になるのだ。

それは、彼のような状況と同一視出来る世界ということになる。

それが導く答えとは、

「ユウさんが生きた証は、この世界では残るのですか!!？」

「そういうことだよ。」

そして俺は、知ってる場所に移動出来る」

「ま、まさか……」

「……またいつでも会いに【来れる】のさ黒ウサギ」

「あ、ううう……ぐすつ……」

「……泣くなよ黒ウサギ。」

旅立つ仲間には笑顔で見送るんだろ？」

「はいっ……はいっ！」

その通りでございませうユウさん！」

「・・・最後になるが【虚空世界】についてだ」

「ぐすつ・・・はいっ・・・なんででしょうか」

「これは何もかもが【虚無】の世界なんだ。」

大地は白く濁った土塊に変化し、空は黒い瘴気に染まっている。

生命の息吹や生命の鼓動すらも消え去ってしまった穢れた世界さ。

まさにこの世の終わりのような光景だよ」

「そこには・・・だれも？」

「・・・生存している生き物なんていない。」

全ての種が絶滅してしまってるのさ」

「・・・寂しい世界ですね」

「俺は、そんな世界にしたくないから・・・今旅をしているのさ」

「ユウさん・・・」

そうこうしてる内に基地からロウウイ達五人とノーネームのジン||ラツセル・十六

夜・飛鳥・耀が来ていた。

ようやく荷造りが終わったのかあの五人。

「いつでも行けるぞ」

「了解」

「だが待てよユウ」

「ん？」

いきなり十六夜が呼び止めてきた。

いったい何が残っているとしても？

「最後のギフト教えろや」

「・・・ああ」

そういやペスト達からギフト暴かれた後、話してなかったな。

いや、知られたくないなら話さなくていいよな。

「そうよ。」

聞きたいわ」

「聞かせてほしい」

「黒ウサギにも聞かせてください！」

満場一致かよ！

クソツタレが絶対に言わんからな。

とか言っても結局のところ俺自身が甘いから話すことになるんだけどな。

「分かった分かった！だが条件として十六夜にしか言わん!!」

「「ケチー!!」」

「ほっとけ！」

まあそれから十六夜にしか話さなかったよ。

ん？黒ウサギの耳はどうしたか？

・・・塞いだよ？物理的に。

「ハツハツハ!!成る程な！そりゃあお前最強だぜ！そうかそうか!!」

「十六夜君！私達にも教えなさい！」

「いいや、これは教えられねえ」

「自分達で解いてみる。」

「それもギフトゲームには必要な経験さ」

「でもほぼノーヒントなのよ」

「うん・・・なら一つだけヒントをやろう」

「!!」

そう言うとうユウはこの場にいる全員に指を指し、こう叫んだのだ。

それは、

「この場の全員が持つてる」

と、答えたのだ。

「いや！分かりませんよ!!」

「これが俺から贈る『ギフトゲーム』さ！

頑張つて解いてみろよガキども！」

そう言つて別世界へのゲートを作ると、

「ほいっとな」

いきなりユウが魔方陣を展開したのだ。

そしてそこから人影が現れる。

それは先日のギフトゲームで死闘を繰り広げた強敵（ユウ達にとってはそうでもな



い)の姿が写っていた。  
そう。

そこには魔王——ペストが居たのだ。

「「ペスト!?!」」

「「こは?・・・」

「ういっす」

「・・・なんであんたがいるのよ」

「俺が喚んだから」

「・・・私は消滅したはず」

「お前が破ったギフトの【始終】で喚び出した」

「・・・何のために」

「連れてくために」

「はあ?」

「お前が聖杯使ったからお前自身が特異点になったんだよ。」

お前が出ていかなきゃ【虚空世界】が生まれてしまう」

「・・・私には関係な「てか連れてくから」い、って人の話は最後まで!」

言い終わる前にユウのギフトで転送されていた。

・ ・ ・ こういうとき便利だね！

そしてユウ達は、自分達の仲間に笑顔でこう言い切った。

「「「また会おうみんな!!」」」

## 【番外編】 人外達の活動調査

はあゝい。

皆元気がしら？

私？私ブラック・パーチャイは「黒死病の魔王」ペストよ。

今日は何をするかと言えば、皆が気になるあの人外どもの調査をしに行くわよ。何故かって？気になるじゃないアイツ等がいつも何をしているのか。

というわけで、ユウに作って貰ったこのビデオカメラ？だっけ？

それを使って調べに行き撮ってくるわよ。

・・・結構行きたくないんだけどもしかしたら何か（ユウの）弱点が見つかりそうだから興味半分で行くことにしたのよ。

それに彼の妹もノリノリだったし。

アイツ人徳があるのか無いのか分かんないわね。

とりあえず逝ってくるわ。

字幕死にたい  
ようね？

最初は、同時に見つかってラツキーと思つたわ。

ロウウイとミールレスが部屋でうづくまって何かしているわね。

いったい何をしているのかしら？

こんなときは黒ウサギの耳を模倣して作ったこのヘッドホン型盗聴機の出番ね。

何故隠してないのに盗聴機なのかしら？

まるで意味が分からないわこの装置。

誰が作ったのか？

・・・ユウに決まってるじゃない。

アイツの妹が作ってほしいと頼んだから作って貰ったのよ。

アン||クレメンズ恐るべし。

とりあえず聞いてみましょうか。

何々？

「ミールレスそつちに動いて」

「・・・これでいいか？」

「OK後はこうやって・・・」

「おおうよしよし」

「うまくいきそうだな」

「なんとかかな」

・・・いったい何の会話してるのかしら？

全く意味が分からないわなんなのあの会話は。

くっ！まさかここまで面倒だとは！

ユウ以外楽勝だと思っただのに。

何故かって？だってアイツ後ろにも目があるからストーリーキング出来ないじゃない。

おっと、戻ってこないと危ない危ない。

いったい何の会話なのよー。

「そこでスト○イク○ヨットをやれ！」

「あっ！ゲージミスった！」

「あっ！やべっ！ボスの攻撃が！」

「あ、死んだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もう一回攻略に行くか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

結局なんだったのあの会話は??

次は零を発見したわ。

さっきの二人の光景は分かる人には分かるのでしようね。

私には分からないけど。

それはそうとなんか知らないけど零が昼寝をしているわね。

確かに今日の天気は、憎たらしい位に雲が無い状態で光輝く太陽が出ているTHE☆  
昼寝日よりだけどその近くで誰かいるわね？



あれはー……春日部 耀？

何でアイツのすぐ近くで寝顔を見ているのかしら？

もしかして好きなの？

(零……)

ん？

(私が買ったかったケーキや食べたかったクレープや楽しみにしていたプリン等食べた)

なんか違うこと考えてない？

(後で三毛猫に顔引っ掻いて貰おう)

さて！

次はレオンを見つけたわ。

零はあの後三毛猫に顔を引つ搔かれて、両腕の関節を徹底的に駆逐された後、首を数えた数で三回位回されていたわね。

圧倒的に即死コースの筈なのにまだ息の根があつたんだから中々に化け物よねアイツも。

結局好きな食べ物を好きだけ奢るといふことで手打ちになつたみたいよ。

アイツ・・・金飛んだわね。

でもって、レオンは何をしているのかしら？

「ほら、お前ら。飯だぞ〜！」

あれって・・・レオンが回収して服従させた死体達ね。

ご飯・・・ゾンビが食べるものって・・・。

「よ〜く噛んで食べるよ〜」  
.....  
.....。

あの後ただの肉だということが分かって少しホッとしたわ。

もうすぐで終わりのところで今度はヤマトを見つけたわ。  
ユウ達はアイツの事キチガイと呼んでいるみたいだけど、  
私にはあまりそうには見え  
ないわね。

でも頭がぶつ飛んでる事だけは分かるわ。

・・・・・ん？

これをキチガイと呼ぶの？

それはそうとこつちもこつちで何かしてるわね。

コイツら人外どもは大人しくノーネームの手伝いをしないのかしらね。

さあ、何々？

「このように銃の構造を少し工夫してこうやれば弾丸の威力が上がるけど、逆にリロードに時間が掛かるし、こつちのようになれば今度はリロード時間が減るけど弾数が少なくなってしまうってちよくちよくリロードしなきゃいけないし、いや待てよ？こんなのにしてみればもしかしたらこれがこうしてあれがああなって・・・etc.」

うわあー！

全く何言ってるのか全然わかんない！

アイツ等の世界どうなってんの!?

あんなのがいっぱい居たらそこらへんみんなこんな奴みたいに変なこと言い続ける世界になるじゃない！

これは・・・見なかつた事にしましょう・・・。

やっと最後のユウに来たわよ。

何で人外どもはあんなにめんどくさいのが多いのよ。

お陰でユウは諦めてしまおうとまで考えてしまったじやない。

流石にユウはあんなのじや・・・ないわよね？

かなり不安なんですけど。

「全部知ってるぞ」

あつ、バレてたみたい。

「アンをとつちめて白状させた」

あんた自分の妹に対して酷すぎない？

「それでよ、ペスト」

な、何よ？

「ここは楽しいか？」

.....  
.....  
.....





## キヤラ設定：序

## キヤラ設定【人外オリキヤラ 主人公編】

ユウ||クレメンズ

種族；合成生物<sup>キメラ</sup>

性別；男

年齢；16歳<sup>??</sup>

能力；時空間移動<sup>ワームホール</sup>、始終、<sup>???</sup>

説明；

時空を超えて色々な世界に行き来出来る自称ただの旅人。

真っ白い髪と真っ赤に染まった瞳を持ち、真っ赤な帽子と全身が真っ白の魔導士のコートを羽織っている。

性格は、とりあえず面白い事を求めているのにプラスで戦闘が大好きな戦闘バカであるため強い相手と戦う事を最優先事項で活動するアホである。

何故か髪が長くて、それを纏めるために魔力を込めて作った髪留めを着け、纏めた後ろ髪がピンツ、と硬直してしまつてるといっておかしな髪型をしている。

その髪留めに彼の脳の神経をリンクさせた眼が相手の心を読めるという能力を持っているが、本人はそれを「第四の眼」と言っている。↑何故第三の眼じゃないのか？

彼は本来の能力とは別に能力が複数あるので実際にはそれを混ぜながら戦闘を行っている。

合成生物キメラな事もあつてか、複数の種族に成れ、それにも能力が分けられるらしい。

他にも隠している事があるのだがあまり他人には教えないようにしており、それによつて振り回される人が数多くいるようだ。

道具作成能力が有り、作った物は滅多な事がなければ壊れないという技術を持つが万能では無いらしく、失敗するときは失敗するみたいだ。

彼の味方である少女―ヴィテからの話では、ユウの持つ特殊な能力「夢を思い叶える力」という能力があるようだ。

彼が持つ最後の能力は、本人曰く、「全てにおいての根源であり、生命の源の起源の力」らしいがあまりにも本人が残念すぎるせいかな、そこまで強そうには思えないのだ。

ロウウイ

種族；人間

性別；男

年齢；17歳

能力；防水加工、加熱処理、血行促進

説明；

ユウと一緒に異世界を旅することになった人外達の仲間の一。

オレンジ色のショートヘアをしており、栗色のキャップとモコモコのコートを着ており、いつも口元を隠している。

性格は、気分屋でスイッチの切り替えが激しく、大体のその日の気分でやる気を出したり、出さなかつたりする。

ほぼ毎日ゲームをして人生を満喫していたり、バイトで物運び等をして食費を稼いだりしている。

彼がフラツと、街中を歩いていた時、どう行つた経緯で何故か二本の槍を手にしてしまったが、本人はあまりどころか全く気にしていない。

対象者を束縛する能力がある血のように紅い十字の槍「怨呪槍 レガリア」と、あらゆる防壁を重ねても全て貫く同じように紅い二又槍「断罪槍 ロンギヌス」を両手で持ち、戦闘を行うが、能力が能力の為あまり戦闘に介入する事をめんどくさがってやろうとしないちゃんとした人間である。

因みに本人曰く、常に健康体だという。

絶撃 零

種族；魔術師

性別；男

年齢；17歳

能力；投影トレス、王ゲート・オブ・バビロンの財宝

説明；

ユウと一緒に異世界を旅することになった人外達の仲間の一人。

黒色のショートヘアと黒いロングコートを着ており、黒いメガネをかけているほど全身真っ黒な服装をしている。

性格は、能天気でもあり、しっかり者でもあるため、どんな性格なのか誰もよく分らない。

普段はロウウイと同じようにゲームをしてぐだぐだしているがやるときはしっかりとやるタイプ。

あることがきっかけで魔術に興味を持ち、努力の結果投影魔法を習得する事が成功し、何気に真似してみたらなんとなく王のゲート・オブ・パピロン財宝の発動に成功した。

本来の誓約をことごとくぶっ壊してきた為、本来はあり得ない「多重投影」が出来るようになり、より少ない魔力が枯渇してきた為、現在進行形でユウから魔力供給を受けることで漸く満足に戦えるようになった。

基本的にオールラウンダーではあるが、本人は接近戦ぐらいしか戦えないバカである。

他の者達から色々とデイスられてたりする。

ヤマト

種族；強化人間

性別；男

年齢；17歳だと思われる

能力；変体<sup>トランス</sup>

説明；

ユウと一緒に異世界を旅することになった人外達の仲間の一人。

茶髪のぼさぼさのショートヘアをしているが、おっさんのような顔をしているため年齢が見た目では分からない。

性格は、少し破天荒な性格をしており、調子に乗るとすぐにヒヤツハーしてしまうキチガイである。

大体の休日にはサブゲーをしまくっているため、射撃の腕は一流ではある。

強化人間ていうのは肩書きだけで、本当は能力の変体トランスによって肉体が変化しただけで強化人間扱いになっただけである。

能力で肉体を変化させ、銃を整形したり、肉体に密接している部分を変化させ、砲台を形成したりすることが出来る。

本人が銃を使用しまくってる為、剣等の接近戦用武装をあまり形成せず、銃等の遠距離武装を形成している。

基本的に戦い方は、中・遠距離戦を進んで行うが、剣術があれば全距離で戦えるはずの強化人間である。

ユウによって作って貰った「幻影の魔弾」ファントムバレットは、彼の能力と戦い方に最大限力を発揮出来る特殊な銃弾である。

伝説の逸話の投擲武器の能力を元に銃弾に魔力を込めて作った為、その性質上投擲・射撃武器でなければ模倣した弾を作ることが出来ない。



レオンハート

種族；死神

性別；男

年齢；精神年齢17歳

能力；重力圧縮<sup>グラビトン</sup>、死者隷属

説明；

ユウと一緒に異世界を旅することになった人外達の仲間の一人。

薄い茶色のショートヘアと黄土色のポロシャツを着ており、またニット帽とマフラーを着け、背中にはユウが作り、自分で磨いだ死神の鎌を装備している。

性格は、ユウと似たような性格に楽観的な感情があるため本当に死神なのか不思議なところである。

死神な為、その仕事は死者をちゃんとあるべき所に導く事をしているが本人はほとんど放棄してしまっている。

最近の楽しみは、格闘ゲームで色んな人と対戦する事にハマってしまっている。

背中に背負う死神の鎌で戦闘するが、大抵の敵には「クロノスの鎌」で戦闘するため、背中の鎌はあまり使われていない。

能力の使用用途は、「ものを押し潰す」・「ものを破裂させる」・「ものを押す／抑える」といった複数の動作が行えるが、重力圧縮という名には関係無いような行動も出来る。

もう一つの能力である「死者隷属」は、死者の魂を復元した肉体に憑依させて、服従させるといっわば違法契約ではあるが、隷属させた者は感情が無いため結果証拠が出ないのだ。↑黙認してるだけかも？

実はこの【死者隷属】は、本来の能力がレオンが死神という理由で強制的に変化したもので、その能力が退化してしまったのだ。

本人はロウウイを何かと殺そうとするが、ロウウイの持つてる槍が死神だろうと貫く槍なので結果的に殺す事が出来ない。

ミールス

種族；人間

性別；男

年齢；16歳

能力；超電磁砲<sup>レールガン</sup>、機械仕掛けの神<sup>デウス・エクスマキナ</sup>

説明；

ユウと一緒に異世界を旅することになった人外達の仲間の一人。

薄い紺色のジーンズと赤色のシャツとその上にうす緑色のジャージを着ており、髪色は濃いブロンズ色になっている。

性格は、常識人だが稀に天然顔負けなボケをかましてくるためある意味時限爆弾のような性格をしている。

ただの人間なのだが、持ってしまった能力のせいで、普通の人間では無くなってしまったが、本人は全く気にしていない。

こちらもかなりのゲーマーであり、休日にはロウウィと一緒にゲームをしていたりする。

能力上、狙い当てる事がヤマトよりも正確に行える実力派スナイパーである為、その戦い方は遠距離戦が基本だが、磁力を操り、砂鉄の剣を作ったり出来るため接近戦も行える。パーフェクトオールラウンダーである。

だが本人は、自身を完全万能者とは見ておらず、常に精進している。

またもう一つの能力は、本人はあまり使わないが、緊急事態時には遠慮なく使っているところを見ると制限はあまり無いように見える。

電力と磁力を合わせた戦い方をするが本人曰く、メンドイらしい。

能力名が機械仕掛けの神、と書かれているが本当の神ではなく、神のような能力なだけである。

## デートアライブ編

### 第二十四話 新たなる世界

「・・・なあ、少し聞いて言いか？」

「どした？」

「俺達は箱庭から別の世界に飛んだよな？」

「何を当たり前なことを」

「それで別の世界についたよな？」

「ついたな」

「それで何故ユウと零とロウウイが下敷俺きになってんだ？」

「知るか」

「私が先に飛ばされたのに乗ってるのは不思議ね」

「おっ？ペストちゃんと来てたのか？」

「むしろ、来なかった可能性があったの？」

「いや全然」

「早く退けお前ら!!」

いきなり前途多難な新世界スタートである。

「ん？」

「何か分かったか？」

「植物達に聞いたんだけど、どうやらここは《天宮市》てんぐうしって、所らしい」  
「らしいてなんだらしいって」

「どうやらここは《空間震》くわんしんって言う、空間の地震のようなので破壊された元居住地だったそうだ」

「元・・・じゃあ今誰もいないのか？」

「居ないってよ。」

「はた迷惑な話だ」

「それも聖杯が絡んでるのかな？」

「いや、聖杯がこの世界に来た時間軸が何時かは知らんけど破壊されたこの辺りの魔力からは聖杯の魔力は伝わらないから元からあったんだろ」

「なんとか治せないか？ユウなら行けるだろ？」

「いや、俺等の状況からこれは治さない方が良さそうだ。」

「もし、誰かに見つかればそれだけで大騒ぎだからな」

「まあ、背中に鎌を背負ってるヤツが居れば当然か」

「ロウウイうるせえ！殺すぞ！」

「やれるもんならやってみるよ！」

「今回ロウウイはスイッチが入ってる、と」



「でも情報集めなきやいけないだろ？」

「それは当然さ。」

情報無しで異世界歩けるわけねえだろ」

「私はどうすれば良いのかしら？」

「ああ、ペストは、ヤマトと行動してくれ。」

その方が都合が良い」

「何故？」

「なんとなくだ」

「……」

……さてと、そろそろ行動するか。

そうやって腰を上げたユウは、全員に向かってこう叫んだ。

「お前ら散れ!!」

その言葉を聞いてそれぞれ建物の壁に張り付くと、全員のいた場所に、一筋の光が灯され、そこには美少女がいた。

金属のような、布のような、不思議な素材で構成されたドレスを身に纏い、そのドレスから広がった光のスカートのようなものを着け、長い闇色の綺麗な髪を持ち、その眼に摩訶不思議な色を映していた。

見ただけで間違いなく分かる。

・・・恐らく普通の人間じゃない。

その少女がその身に合わない大振りな剣を構え、ユウに斬りかかるが、ユウは真剣白羽取りで抑え込む。

・・・真剣白羽取りって、防御の一種なのか？

「・・・何故来ると分かっていた」

「そりゃ殺気がピンピン伝わってきたからな。

嫌でも分かるさ」

「そうか。

お前はかなりの手練れのようにだな。

さつさと片付けようか」

「アイツ等ならとつくに逃げたぜ？」

そう聞き、少女は回りを見渡すが、ユウの言った通りユウ以外の奴らは皆忽然と姿を消していた。

アイツ等流石だな。

おいかけっこ最強だろあの逃げ足。

・・・あれ？ロウウイとヤマトは黒ウサギに捕まってたやん。

「くっ！」

少女が悔しがる中、ユウは耳の通信機を起動させて他の者にメッセージを飛ばす。  
「いいか!?!このポイントに行け!そこが合流ポイントだ!頼んだぞ!」

「合流ポイント……と、言われてもねえ。」

「……ねえ、通してくんない？」

ロウウイの目の前には、なんだこれ、と言いたくなるようなでかさの巨大な白兎がいた。

しかも、イメージとは違い、明らかに噛み千切る為の牙がついていた。

しかし、話しかけているのは、このウサギでは無い。

その上にいる人物に言っていた。

可愛らしいウサミミが着いた緑色のレインコートを着ており、ふわふわそうな海のように青い髪をしている女の子である。

「ここは、通し、ません！」

『ヤツハー、悪いねおにーさん』

「うお?!ウサギが喋った!」

『ええー。』

心外だなー。

よしのんはちゃんとしやつべれつるよーん』

「じゃあ喋ってくれよ、心臓に悪いわ」

『にやははー、今度からそうするねーん』

・ ・ ・ ふざけてても、逃がしてくれそうもないな。

ガキン！ガキン！！

そんなぶつかり合う金属音が聞こえてきた。

その正体は二人おり、一人は合流ポイントに急いでいた零だった。

もう一人は、これまた少女であつた。

袖から揺らめく火焰を纏った白い和装をし、天女の羽衣のような帯がその身体に巻き付いており、頭の両サイドに着いた無機的な角が着いていた。

だが、驚くのはそこだけではない。

その手に持っているは、少女の身の丈を超えている漆黒の棍の先端に、空気を焦がす程の焔が有り、刃になつていた戦斧だった。

「なあ？逃がしてくれるか？」

「あなたはバカなの？敵がいるのに見逃してくれると思つてるの？」

「思わないナー」

「つまりはそういうことよ」

「あんまり戦いたくないんだけど」

「なら簡単よ。」

「あなたが私にやられればそれで解決よ？」

「冗談！そんなので死ねるかよ！」

「なら良いわ・・・焼き焦がせ灼爛<sup>カマ</sup>殲<sup>エル</sup>鬼！」

「はあ！・・・はあ！・・・はあ！」

「廃虚であるこの場所は、既に使い物にならなくなったビル等が立ち並んでおり、サバ

ゲーをしまくつてるヤマトは、そういう知識もあつてか追つ手から逃げるのにビルを上  
手く使つて逃げてゐるがユウみたいにいつの間にか回り込まれてしまい、そのたびに  
また移動を繰り返してゐた。

「流石に……これ以上……来ないだろ！」

「あらあら？これで逃げ切れたと思ひなのですか？」

今ヤマトは、ビルの支柱の影に隠れてゐたのだが、その後ろから声が聞こえてきた。

これもまた綺麗な少女であつた。

赤と黒のドレスを纏つた赤と金のオッドアイを持ち、その両手に細緻な装飾が施され  
た古式の長さが違う銃を握つてゐた。

だが、これだけならヤマトは一人でも勝てるのだが、勝てない理由があつた。

それは彼女が一人では無いからだ。

その後ろでは、彼女に似た人物が複数いたからだ。

流石にお互い銃使いで一対多でもこれは流石に無いと思うんだ。

「引き金を引いた瞬間に、自分も引かれる事を自覚してないのでですか？」

(分かつてるけど、限度があるだろ!!?)

これは……理不尽である。



ここで一句。

今現在

敵に見つかり

逃走中

なんてやってる場合じゃないけど、必死に逃げているレオンであった。

「冗談じゃねえぞ！なんだよあの早さ！黒ウサギよりはええじゃん！！」

そこでレオンは、追いかけてきている追っ手を確認する。

その相手もまたしても少女だったのだ。

しかも二人。

橙色の髪に、水銀色の瞳で、暗色の外套を纏い、身体の各所をベルトのようなもので締め付けているのは共通していたが、片方は、右手右足と首に錠が施されており、そこから先は引きちぎられた鎖が伸びており、もう片方もそれと鏡合わせのように逆に錠と鎖が着いていたのだ。

唯一違うのは左に錠を着けている方が長い髪を三つ編みにしていることと気だるそうにしており、もう片方は、すごい活発的そうなところだけである。

ただ、メチャクチャ早い。

ジェット機か？、と思うほど早いのだ。

「ふん．．．もう終わりか？ 所詮は我が暗黒の風の前に吹くそよ風よ」  
うわあー、めっちゃ中二病。

「発見。もう逃げられませんよ」

「．．．」

「質問。何故夕弦を見たまま固まっているのですか？」

「お前がマトモそうで良かったと思ってるんだよ」

「同調。耶俱矢には困ったものです」

「お前・・・大変だったんだな」

「首肯。ありがとうございます」

「え？何で私抜きでお互い納得しあってるの？ねえ、夕弦く!!」

「これ勝ち目なくね？」

「なら、さっさと捕まって」

ここでミールレスの状況を確認してみよう。

白い純白のウエディングドレスみたいなのを着ている少女に壁際に追い込まれている、終わり。

とまあ、何とも最悪な状況になっていた。

その少女の頭上では王冠のようなものがこちらに照準を合わせていた。

間違いなくあれは、こちらを狙い打つ物だ。

「流石にまだ死にたくないな」

「大丈夫、痛みは一瞬だから」

会話のキャッチボール出来てないなこりや。

恐らくあの王冠から発せられる技は、間違いなくユウの光の神槍レイ・クングニルと同等の威力がある筈だ。

そんなの食らったらひとたまりもないなと思いつつながら、戦うしかないなと思いつつ、諦めかけていた。

「さつさと殺す」

「おーい、目的変わってるぞ」

「今千里眼で見たけど、アイツ等見事に見つかってるじゃねえか!!」  
「お前達劇団でもやってるのか？」  
「それ前にも言われたからちよつとショックだわ」

## 第二十五話 精霊

「はあー！」

紫の鎧を纏った少女が斬りに来るが、ユウは、それを紙一重で避けていく。

そこから蹴り等を入れていくが、余程反射神経が良いのかすぐに弾かれて防がれてしまふ。

いかに熟練者同士と言えど、立て続けに攻防を繰り返していけば、流石に動きが鈍ってくるだろうと思いつながら戦っているが、全くそのような姿を見せない。

このままでは他の仲間合流されそうだから、ユウは一旦攻撃を後ろに避けてから撤退を図ろうとしたら、

「逃がさん！」

剣から斬撃が飛んできたので、ブリッジで間髪一髪で避ける。

「あ、ぶねえ、下手したら上半身と下半身がお別れだったぜ」

「すばしっこいな、ろくに一撃が当たらない」

「それはこっちの台詞だ、手数はこっちの方が多いいの見事に全部防がれちゃってるからな」

「次は斬る」

「物騒だな」

とは言つても、やはり刃物持ちに素手はキツいな。

・・・しようがないこつちも剣を取り出すか。

「よいしょっと」

ユウが背中に手を伸ばすと、そこから明らかにユウよりもデカイ大剣が出てきた。

黒き刀身で鱗のような素材で覆われた紫の線が入っている全体的に刺々しいフォルムのその大剣を片手で軽々と持つその姿は、戦いに飢えた狂戦士のようにも見えていた。

「ほう・・・中々の大剣だな、それがお前の剣か？」

「いや、これは標準剣だ。」

本来の俺が使う剣は、強すぎるから使わないだけだ」

「それは私の事を弱いと言っているのか」

「いや、本当に強すぎるからだ、なんせ・・・」

そう言いながら、ユウは大剣を構え、

「俺さえも斬れるからだ!!」

高速で斬りかかった。



流石に速すぎたのか、対応が少し遅れたが剣で受け止める。

しかし、威力を殺せず、そのまま後方へ吹き飛ばされていく。

大剣だという事もあり、その一撃が重い為少しは覚悟していたが、元々のユウの一撃が更に重くしたため、少女は後方のビルに次々とぶつかっては貫通していき、五回目でようやく威力が殺され、止まることが出来た。

そして少女は、覚悟を決めた。

——斬る。

サンダルフォン  
「《塵殺公》!!!」

「ようやく本気モードか．．．は？」

驚いたのも無理はない。

先程吹っ飛ばした筈の少女が、空を飛びつつ、その手に明らかに少女二人分の長さはある巨大な剣を片手で持っていたからだ。

ユウの持った大剣も中々でかかったが、あれはそれより全然大きかったのだ。

そのときユウは、ようやく自分が斬られるという事を自覚し始めた。

「《塵殺公》！《最後の剣》!!」

「そりやねえよ．．．なんだよあのバカデカイ剣はよ」

「はあああ!!」

少女が自分に向かって剣を降り下ろす。

あれは間違いなく自分を斬れる．．．でも避けることは出来ない。

それには理由がある。

なら、選択肢は一つしかない。

「相殺するだけだ!!」

ユウは、大剣を両手で構える。

この一撃を叩き斬る為に。

「何ッ!？」

「やるか!!」

すると、ユウの大剣が変化をし始めた。

何かのギミックなのか知らないが、紫の線が入ったところから装甲が外れて擦れ、その大剣は異様な姿になっていた。

まるで命が宿ったかのように、その姿を変貌させたのだ。

「おりやあああ!!」

その剣で少女の一撃を受け止める。

明らかに威力が違っていたが、その大剣が折れるどころか傷も付かず、その一撃に耐える。

だが、剣は無事でも肉体はそうもいかない。

その剣から発せられるエネルギーはそう簡単には相殺しきれず、徐々に肉体に傷を付

けていく。

しかし、そんな状況でもユウは笑っていた。

それどころか——楽しんでいたので、強者との戦いを、これ程の者とのぶつかり合いを純粹に楽しんでいた。

「これだから旅は止められない!!」

しかし、このまま続けていけば、肉体は斬られてしまう。

そうなれば、逃げなかつた理由も斬られてしまう。

そうなつてはマズイと流石に思うので、

「おらああああ!!」

その一撃を弾き飛ばした。

その威力を完全に相殺しきつて。

恐らくこれが最後の余力のはず、あちらはもう戦う力は残っていないはずだ。

そう思つてたら、少女の方から近づいてきてくれた。

「まさか私の渾身の一撃を受け止め、弾いてしまうとは」

「お前のような単なる威力だけの一撃は、何度もぶつかつてきたから平気だ、と言いたいところだけど結構キツかつたな守りながら弾くのは」

「守りながら?・・・!」

「やつと気付いたか……そう、お前の一撃を避けたら、俺の後ろにあるあの街が斬られるところだったからな」

そう言い、後ろに指差したところは、現在大勢の人が住んで暮らしている天宮市があつたのだ。

植物に聞いて、人がいるところを聞いていたので、どこにあるのかは分かっていたが、その人達が死んでしまつてはマズイと思つたので少女の剣を受け止める事にしたのだ。

「お前は……街を守るために、わざと？」

「街がなければ避けたけど、誰かが死ぬのはまっぴらごめんだ」

「……すまない」

「おいおい謝んな、まだ決着はついてないぜ？」

まあ、あの一撃で結構力使つたから、立つので精一杯だろうけどな。

かくいいう俺も、先のは結構応えたけどな。

人間やめてなかつたら、マジで死んでたなこりや。

「んじゃ！」「十香!!」とおかって、うええ!!？」

折角カツコつけて終わらせよう思つたのに、誰だ!？」

そこには、……少し変な感じがしたが、れっきとした人間だった。

「……ん？あのぶつかり合いがあつたのに人いたの!？」

「し、シドー!?!何故ここに!？」

「お前を助けに来たからに決まつてるだろ!？」

「……ん?」

「シドー離れてろ!コイツは強い!ハッキリ言つて私よりも!」

「いやあんた全力でやって押し負けたからそりや当然だろ?」

「バカ言うな!お前を見捨てられるわけないだろ!!」

「し、シドー……」

「これ完全に俺が悪者扱い!？」

「いやいや待てよ!」

「先に攻撃してきたのはそっちなのに何で俺が悪者扱いになつてんの!？」

「あれか!？」

「いたいけな?少女を傷つけて、挙げ句の果てには剣で斬りかかろうとしていたように見えたからか!？」

「……あー、否定しきれないわー。」

「なんか頭痛くなつてきたら、さっきの一撃で傷ついたか?」

「お前は何を言つてる!」

「お前ら二人のせいだわ!!」

コイツら天然コンビか!?

そういう奴の相手めんどくさいな。

「とりあえz」

そう言いかけた時、

ゴーン!!

「ハルギツチョン!!?」

頭上からこのビルの欠片と思われる破片という名の岩が落ちてきた。

ただ、これは自然現象ではない。

故意的に行われたのだ。

その実行犯とは、

「お前・・・何してくれてんの」

「あなたが私を吹き飛ばしてくれたから、その仕返し」

ペストエエ・・・。

少女——十香との戦いで少しダメージをおっていたので、その一撃が止めとなり、俺の意識はあつという間に暗闇の底に沈んでいった。

「で？案の定捕まってしまったと？」



「防水加工で自分が凍るのは防いだけど周りを凍らされて出られなくなった。」

「ただ単純に火力で負けた」

「いともたやすくおこなわれるえげつない行為をされた」

「喋りながら捕まった」

「最初から諦めてた」

「ユウを嵌めて一緒に連れてった」

「後半完全に自分勝手じゃねえか!!」

## 第二十六話 ラタトスク

「で？あなた達は何者なの？」

「捕まえておいてその質問はどうなんだよ」

俺達（ペスト除いて）は、赤い髪の少女——いつかことり五河琴里から事情聴取という名の尋問を受けていた。

何せ俺達（ペスト除いて）が揃って捕まってしまったからね。

しかも俺は気絶してたからここが何処なのか全然全く分からん。

「まず本気出せよお前ら」ボソボソツ

「「「「なんか・・・ねえ？」」」」ボソボソツ

「き・い・て・る・の!!？」

ヤベツ、怒らせちゃったよ。

「まあ話したくないならそれでいいわよ？・・・そうしたら」

「そうしたら？」

「切り落とすから」

「何を!？」

しかも両手で斧構えてるじゃん!!

殺る気満々!!?

流石に笑えないよ!?

ほらー!! そのあなたのあなのお兄さん横で青い顔しながらガクガクブルブルって震えてるよ!?

「ちよつと待ちなさい! あなたどうして土道しどが私の兄だつて分かつたの!?

「え? そこ気にしちゃう? ていうか心を読むなよ! 俺だけの特権だぞ!」

「心を読むの!?

「あ、マズッ」

これを墓穴を掘るつて言うんだね!

分かるとも!

「へえー？異世界からの旅人ねえ〜？」

脅迫しておいて信用しきってねえなこりや。

でも俺達は手錠で拘束されてるけど、これ簡単に壊せれるな。

隙を見て逃げるか。

「これは士道とはあまり関係が無さそうね」

「ん？どういうことだ？」

「敵に教える情報は無いわ」

・・・にやろう、仕方ねえな。

「教えろ」

「嫌よ」

「教えないなら、」

「教えないなら？」

「・・・昨日士道の歯ブラシを間違つて使つてさ」

「わー!!わー!!わあー!!!」

「え？俺の何？」

「エイツ!!」

「グフツ!？」

士道の腹に琴里の見事な飛び膝蹴りが決まったー!!

これは効果は抜群だー!!

自分の兄に対しての仕打ち酷すぎねえか!?

士道疼くまっただけ!?

「・・・分かつたわよ、教えるわ」

「俺も士道がこれ以上死ぬような事にならなければそれでいいよ、じゃないと死ぬ」

何気に酷いこと言つたな俺も。

「私達がどんな存在なのか分かってるわよね」

「俺達が説明してたときお前らが話してたな」

「そう・・・土道は私達——精霊の靈力を封印出来る力があるのよ」

「はあ!?!お前そんな力があつたのか!」

「黙って聞きなさい」

「すいません」

「コホン・・・だけど今朝事件が起きたわ」

「?」

「土道の靈力が突然逆流したのよ、私達精霊達にね」

「へえー」

「・・・でも不思議な事に土道に靈力がまだ宿っており、私達は私達で封印されてる状態のまま、靈力を使えるのよ」

「ん?別に問題なくないか?」

「そももいかないわ、いつ暴走するか分からないもの」

「それもそうか」

「それに土道によると天宮市の上空に何かある、と言ってきたのよ」

「上空?」

そんなの見えなかったけどな〜？

「どうやら土道だけにしか見えないみたいだし、その直後にあなた達の反応を感知したからこうして連行してみたのよ」

「・・・」

「で？何か分かったかしら？」

「・・・ユウ」

「ん？どつたの零」

「これって・・・聖杯？」

「デスヨネー」

うん、そんな超現象引き起こせるのは聖杯ぐらいしか無いわな。

まさかこんな形で変化を入れてくるとはな。

例えるなら、カーブのはずなのに回転がストレートみたいなものだ。

・・・打てるかそんなの！

「あー、多分その原因俺達知ってるわというか原因それしかなさそうだわ」

「あなた達の仕業ではないのね？」

「むしろお前らのその原因を取り除きに来た感じだな」

「・・・少し信用出来たわね」

「それでも少しかよ」

「じゃあこれから私達と行動してもらおうけどそれで構わないわよね？」

「雨を凌げて、食料があつて、好き勝手出来て、安心して寝れる所があるなら喜んで  
「決まりね」

「そういやさ」



「何よ？」

「琴里って土道の事すk」

ゴキツ☆

「それじゃあ暫くはこの精霊マンションで過ごしてもらおうわ」

「これお前らが建てたの？」

「そうよ？」

「「「「ラタトスク機関パネエ！」「」」」」

「それとユウは私達の家で過ごしてもらおうわ」

「え？なして？」

「もっと聞きたいことがあるからよ」

「成る程・・・お前ら〜」

「「「「?」」」」」

「ペスト反応してないな・・・お前らの用意された部屋だが」

少し重い空気に変えてから・・・。

「魔改造して良いからな」

「「「「任せろ」」」」」

ヘイジヨウウンテンマツタナシ。

「お世話になりまゝす」

「お世話しまゝす」

んまあ、軽いノリで五河家に入っていったら、

「あ、兄様お帰りなさい」

士道に瓜二つ（左頬にほくろがついてるが）の少女がいたよ。

兄様って言ったから一瞬アンかと思つたよビックリしたな。

「真那!? あなたまた検査すつぽかしたわね!」

「ゲツ!? 琴里さん! マズツ!!」

「にくがすかく!!」

「……えーつと、真那つて言う子を琴里が物凄い形相でおいかけつこを開始し始めた、  
と言えばいいかな？」

「土道……」

「……なんだ？」

「お前も……大変な妹を持ったな」

「……ああ」

この日を境に土道と何か仲良くなれた気がしたよ。

「いい加減逃げないでちゃんと検査を受けなさい!!」

「兄様に会うためなら例え火の中、水の中、琴里さんの中! 逃げ切りますよー!!」

「逃がすかこのバカ!!」

「……俺今日からこの家で暮らすんだよな？」

心配になつてきたよパト○ツシユ……。

## 第二十七話 精霊達と人外達

「土道のご飯がメチャメチャ旨かった」

「でしょー！ 兄様のご飯は最高なんですよ！」

「照れるからやめてくれ」

「はいはい、土道えらーい」

「こ、琴里……」

「……で？ 何処から話せばいいかな？」

本題はそこである。

琴里が何も無しにこちらの家に寝泊まりしろとか何かあるに決まってるよ。

こういうやつうちにもいるからなんとなくわかんだよ。

誰なのかって？

アンの事ですが何か？

「まず貴方達何が分かったのか知らなければならぬわ」

「あー、そこからか」

「そうよ」

「それはかくかくじかじか」

「まるまるうまうま、つて分かるか!!」

「デスヨネー」

知ってた。

「貴方人間じゃなかったのね」

「何が分かったのか説明してたのに何故そこに関心を持った？」

「ユウさん達の戦闘スタイルを知りたいです」

「お？さては真那〜。」

「お前戦い好きだな？」

「戦闘勉強は基本でいやがります！」

「お前とは気が合いそうだ！」

「おーい、脱線してるぞ〜」

「おっと、戦闘スタイルだったな

基本的に簡潔的に言えば、

俺が近・中距離型

ロウウイが近距離型

零が中距離型

ヤマトが中・遠距離型



レオンが近・遠距離型

ミーレスが万能型だ

本来の武器じゃない飛び道具は抜かしてるからな」

「レオンのところ普通に中距離と言いなさいよ」

「ツツコムとこはそこなんだな」

「にしても零って私が相手したやつよね。」

「弓も使ってたのはそれか」

「ん？弓使ってたとき琴里はどう戦ってた？」

「炎で燃やしてた」

「ダイナミック」

「うるさい」

「すいません」

「真那も戦ってみたかったです！」

「どっかの提督か！」

「ていうか真那は戦えるのか？十香達のような靈力感じないけど」

「この子はASTという魔術師達ウィザードの中でもかなりの強さよ」

「最強は誰だ？」

「知らなくていいですよ」

「真那・・・嫌なやつなのかそいつ？」

「・・・はい」

どの世界でも強いやつは嫌なやつなのか。

また新しい知識が知れたな。

でも戦ってみたい気持ちの方が強すぎるな。

・・・会えないかな？

「まだ聞きたいことがあるわよ」

「ん？なんだ？」

「貴方が何で反応したのかよ」

「・・・精霊の武器は天使なんだよな？」

「ええ、そうよ、私達と同じ霊力を宿しているわ」

「それなら反応してもおかしくないな」

「どういうことだ？」

「俺の種族に天使があるからだ」

「「・・・」」

「沈黙辛いからやめてくれえ!!」

「で？名前は何？」

「は？」

「天使の名前よ！私の灼爛<sup>カマ</sup>穢<sup>エル</sup>鬼のような！」

「あ、ああく成る程」

少し50分くらい悩んだ後、

「・・・うん、こんなのだな」

「じゃあどうぞ」

「ああ、俺の天使の名は

《《セイフェイエル剣乱盾翼》かな》

「どんなの？」

「腕に装甲が着いて、それに剣と羽のオブジェが四つ着いてる感じだ」

「能力は？」

「羽のオブジェが変化して、それに伴って剣に付与効果が発揮するタイプだ」

「臨機応変タイプね・・・キメラのあんたに似合ってるじゃない」

「だろ？」

「戦いなら真那や私達が相手するわ」

「全力でやりますよ！」

「それよりも寝ろ三人とも」

「「はーい」」

一方、別の方にて五河家を監視している者がいた。

それは前の世界の箱庭にて白夜叉にどう動くか説明していた謎の多い少女——ヴィ  
テであつた。

ユウ達と似て異なる方法でこちらの世界に飛んできたようである。  
流石に人外過ぎだと思うが。

「どうやら私がご説明しなくてもちちゃんと五河士道さんに出会えて、協力関係になれたみたいですね」

まあ、こうなるのは分かってましたけども、とヴィテは悠々とそのような言葉を発していた。

ヴィテの能力は謎の塊のようなものではあるが、二つだけ分かっていることがある。

一つは、彼女がユウよりも強大な力を有していること。

もう一つは、彼女は未来の世界を常に見ることが出来るという事である。

「・・・そこのお方、少しお話をしなせんか？」

ヴィテは自分の後ろに向かって声を飛ばす。

『きひひ・・・なぜ分かったのですか？』

「私は未来を見れるのですよときどきくるみ時崎狂三さん」

ヴィテの後ろの影から、ヤマトに「いともたやすくおこなわれるえげつない行為」を行つた狂三が出てくる。

しかも、天使と霊装を纏つた状態で。

「用件はなんですか？」

「あなたのお命……というのはどうでしょう？」

ヴィテは落ち着いた雰囲気で見渡してみるが、そこには狂三の分身達が自分に銃口を向けて取り囲んでいた。

まさに袋のネズミ状態である。

これならまだ良かったのだが、どうやら空にも伏兵が隠れているようで、完全に逃げ道を失っていた。

「さあ？ どうされますか？」

「……ふう」

ヴィテは一度溜め息を吐いた後、

「一対一で話し合いますか？」

「……はっ？」

狂三が驚くのも無理がない。

何故なら目の前の光景がとてもじゃないが信じられない状態になっていたからだ。自分の分身達が何故か全員首が跳ねられていたからだ。

その中心には、両手で逆手持ちしている二本の短剣が持たれていたヴィテが居たため、その剣で首を切ったかと思っただが、ヴィテはその場から動いていないのだ。

——化け物。

たったの一言がそう頭の中を走っていった。

精霊である狂三でさえも見えない速さで切ったということなのか。

それとも、ただの能力なのか。

「それで？」

「っ!!」

「話し合いを……しましょうか？」

戦慄。

自分と同じ両目、自分と同じような能力、圧倒的な力の差、何よりも自分では勝てないという事を初めて思い知らされた瞬間である。

「貴方……名前は……」

「……アルカヌム・ヴィテ。」

かつて心の無い殺人鬼として改造され、後に大量の人達を虐殺し、あの方達に救われて、今はあの方達のお手伝いをしています。

ただの……人殺しです♪」



## 第二十八話　　そうだ、学校に行こう

「ふああゝ・・・よく寝たわー」

お前寝る必要ねえだろ、だって？

残念なことに俺は戦闘で消耗したら、流石に休まないと回復しないんだ。

・・・まあ寝るのは好きだからあんまり困ってないんだけどな。

今何時だゝ・・・午前六時か、まあまあな時間だな。

この時間帯で誰か起きてるか？

起きてなければ、住まわせてもらってるから朝ごはん作らないといけないな。

「誰かいるかゝ、って土道起きてたのか」

「ん？　ユウか」

「土道早起きだったんだな」

「あんな妹二人居たら・・・な？」

「・・・優しい兄貴だな土道は」

でも、やろうと思ってた朝ごはんの準備はもう終わってるようだな。

しかもご丁寧に四人分——俺も含めた食器が並んでいた。

よっぽど世話やきなんだな土道は。

「朝ごはん、パンでも良かったか？」

「俺は基本大体のものは食うぞ」

「じゃあ先に食べててくれ、その内琴里と真那が起きてくるだろ」

「おう」

焼きたてのパンに瞬間移動で取り寄せた特製ジャムを塗りつけていき、パンの端っこから食べていく。

皆はパン食うとき、どっから食べていくんだ？

俺はこんな感じに食べていくぞ。

土道に淹れてもらったお茶を飲みながら、パンを食べ続けていく。  
もう軽く三枚目である。

そのとき上からドタドタ、という足音が聞こえてきた。

どうやら起きてきたようだ、と思いつつお茶を啜り――

「おつはよーなのだー！お兄ちゃん！」

「ブフウー!!!?」

噴き出した。

それは盛大に。

降りてきた正体は琴里である。

だが、俺の知ってる琴里とは天と地の違いがあった。

唯一違う点は、髪を結んでいるリボンの色が黒から白に変わってることだけだが。

「うわあ!?!どうしたのいきなり吹き出して?」

「お前誰だ!ほんとに琴里か!?!」

「琴里なのだー!」

「マジかよ土道!」

「あ、ああ、そうだぞ」

「マジカル!!」

あの鬼の形相の黒琴里とこんな天使のような無邪気な白琴里が同一人物だと!?

・・・わけがわからないよ。

「琴里さんはリボンを付け替えてスイッチを切り換えてるのですよ」

「真那おはよく、つてスイッチの切り換え?」

「ええそうよ」

いつの間にか、リボンを白から黒に付け替えていた琴里が仁王立ちしていた。

「・・・わけがわからないよ」

「知らないわよ」

「ほら、二人とも急げー、学校に遅れるぞ」

「はいはい」

「分かりました兄様」

「・・・世の中不思議しかないな」

「それでは転校生を紹介します・・・どうぞー」

「・・・ユウⅡクレメンズ。」

気軽にユウって呼んでくれ」

「絶撃 零だ。」

これからよろしく」

「レオンハートだ。」

俺の事も気軽にレオンって呼んでくれ」

・・・何故だ？なぜこうなった？

「それではユウさんは、土道さんの隣の席に、零さんとレオンさんは廊下側の席二つに座ってください」

「「ういっす」「」

俺は、ゴロゴロしようとしてたのに琴里に連行されて、この学校に転校した。

・・・ラタトスクの仕業か!?

強引に転校生にするって・・・なんだこの権力。

隣のクラスにはロウウイ、ヤマト、ミーレスが転校したけど、いつの間に?

「お前の妹恐すぎなんだけど」ボソッ

「・・・すまん」ボソッ

・・・なんか疲れたわこれからこうなると知ったら。

「それではSHRを終了します」

先生が教室から出て、ようやく落ち着ける。

幸い転校してきたのが男だった為あまり質問責めにはされなかったな。

「・・・少しいい?」

「ん?・・・えっと、とびいち 鳶一おりがみ 折紙だっけ?なんだ?」

確かミーレスと戦った精霊だったな。

元人間だつて言ってたけど、精霊って皆元々人間だったのか?

「貴方の席を交換して」

「はあ?」

確かに俺の席は窓際が一番後ろだから、色々とコソコソ出来そうだけど、コイツの目

なんか嫌な予感がする。

「理由は？」

「士道の隣だから」

アラマシゴクマツトウナヘントウ。

「ズルいぞ鳶一 折紙!!」

「夜刀神 やとがみ 十香」

ん？ コイツ俺と戦った奴だな。

士道・・・お前ハーレム作ろうとしてんの？

「士道どうすりゃいい？」

「え？えつと・・・」

「ううくん？」

決まりそうにないなこりや。

でも、少し安心した。

元人間だって言っても、やっぱり本質は人間なんだな。

・・・だとすると、この世界の聖杯の誘発点は――

「精霊・・・」

「ユウ？どうした？」

「……いや、なんでもない」

士道に少しだけ誤魔化した。

だがその瞬間感じ取った。

——明確な殺意を。

「!!」

急いで外を見る。

その予感は嫌な形でのちのち中してしまった。

「クソツ、マズいことになった」

「どうしたユウ」

「窓の外を見ろ！そして逃げろ！」

窓の外にいたもの……。

その姿を士道はよく知っている。

真っ黒い影に覆われていており、よく見えないが手に持っていた剣は見える。

それは——

「サンダルフォン塵殺公!?!」

「聖杯が送ってきた刺客だ！逃げなきや斬られるぞ！」

塵殺公を持った黒い人は、その剣を天高く掲げ、



「ーッ！」

校舎を両断した。

「……あつぶねえく危機一髪」

よく見ると両断された校舎は無く、代わりに空を飛んでいたユウが現れた。

あの瞬間、斬撃を瞬間移動させた後、認識障害を自身にかけ、ここに現れたのだ。

「……どうやら対象さえ消せれば、他は障害にしかならないってことか」

「……」

「だんまり……いや、喋れないのか」

ユウは、自身の右腰にペストをふっ飛ばした時に携えていた刀剣を取りだし、

「……いや、やつぱりこの世界のルールに従うか」

再びそれを仕舞い、今度は右手を上に掲げる。

「……《剣乱盾翼》!!」

一瞬、右手が光り、そこについていたのは。

腕の白い装甲が付き、手に向かって伸びている直剣と肩に向かって突き出しているような形の短剣、装甲部分に天使が羽を天高く広げるような形の第一の羽、羽を真横に伸ばし広げた形の第二の羽、羽を斜め下に広げた形の第三の羽、第一の羽と鏡あわせのように反対方向を向いている第四の羽がついていた。

その姿は、まさに天使の武器と言えるものであった。  
「これでお互いにフェアだ」

——始めようか、影精靈!!」

## 第二十九話 翼の盾と舞う剣

「影精霊？」

ユウが戦闘を開始した時と同じくらいに士道と十香とヤマトとレオンがその様子を見守っていた。

「ユウ曰く、こちらの世界の精霊の『霊力』と聖杯の『魔力』が混ざった結果、聖杯の泥に汚染された別の精霊が生まれるみたいなんだ」

「どこのグラウンド「それ以上はいけない」(´・ω´、)」

「つまりあの黒い十香は？」

「簡単に言えば、欲望に染まった十香だな」

「・・・」

「十香？」

「・・・シドー。」

あの私は、私より強いぞ」

「なんだって!？」

「ユウも分かかってる筈だ」

「なら助けないと！」

「それは心配ないわ」

「え？」

『ッ！』

「ッ！」

黒い十香——黒十香の攻撃を剣舞盾翼セファイエルの剣で防ぎながら、ユウはある確認をとつていた。

（魔力……）

ユウは、左手で殴るが、黒十香の体は、何もなかったかのようにすり抜けてしまう。

（霊力……）

また左手で殴るが、黒十香の体をまたもやすり抜けてしまう。

（やはりそうか……なら）

ユウは、右腕を自分の胸まで持つていて、

「……《剣乱盾翼セファイエル》《第一翼・斬奪エルダー》」

右腕についていた四本の羽の内、一番上の羽が左右に展開し、一つの翼に変化した。その翼から光が放たれ、長剣だった刀身が、大剣並みの両刃剣になっていた。

ヤッホー。

俺はヤマト。

サバゲー大好き人造人間だぜ！

・・・まあ、半分嘘なんだがな。

とりあえず俺達はユウの戦いを見ながら、どうなってるのかワケワカメの士道に説明していた。

「ユウの攻撃をすり抜けてる!？」

「当然だ」

「ど、どうゆうことだ？」

「あれは聖杯が作ったただのオモチャだ。

当然ながら実体は無い。

つまりあれは『霊力』と『魔力』しか出来てないんだ。

その意味は、片方で攻撃しても、ダメージを与えられないということなんだ」

「それじゃあ、十香達じゃ!？」

「手も足も出ないな」

「それじゃあ、ユウは!？」

「それなら平気だ、見てみろよ」

「え？」

士道が見てみた先には、

黒十香に斬撃を与えているユウの姿だった。

相変わらずチートな天使だよな。

「ど、どうなってるんだ!？」

「《第一翼・斬奪》<sup>エルダー</sup>」

「あれは『魔力』、『霊力』といった感じの力を無力化して、切り裂くユウの天使の能力だ」

「あれなら触れて斬るだけであの黒十香を消滅させられる」

「第一翼……まさか他の羽にも？」

「そう。」

他にも能力があるんだ」

「キメラだから出来たことだな」

「あれなら勝てるか!？」

「いやそうでもない」

「え!？」

「あれは直接剣で触れないと効果が発揮しないんだよ」

「正に一触即発だな」

「意味は違うと思うがな」

「なら、あの黒十香が《サンダルフォン塵殺公》で斬撃を飛ばしたら!」

「丁度その場面だな」

さてと!

そろそろこの戦いも終わってしまうかな!

……ああ、暇だわ。





「くっ!」

『・・・』

案の定、《塵殺公》サンダレルフォンで斬撃を飛ばし、それも街に落とさないうように、全部打ち落としながら、距離を詰めようとするが、すぐに引き離されてしまい、またもや斬撃を飛ばしてくる。

俺が瞬間移動出来ることは知ってる筈だから、不意打ちは通用しない。

かといって、斬ろうにも近付けない。

なら、答えは簡単だ。

こちらにも飛ばせばいい。

「《剣乱盾翼》セファイエル 《第二翼・軌跡》ロイド」

第一の翼が縦に重なり、元の四羽となったら、今度は二番目の羽が左右に展開し、光が放たれ、長剣だった刀身が、細い細剣になっていた。

そして、細剣ごと右腕を一振りすると、細剣に纏っていた光が剣の形のまま、黒十香に向かって飛んでいったのだ。

『!』

流石に予想してなかったが、素早く武器を盾代わりにしたが、全てを防ぎきれず、少し漏らしたが、そのときガツンツ、と黒十香の体からぶつかり合う音が聞こえてきた。

「みーつけた!」

『!』

黒十香は一目散にユウに切りかかりに行く。

先程の一撃で自分には有効なダメージを与えられてなかったことが分かり、斬撃を飛ばすなら、自ら近づけばいいと判断し、ユウとの距離を詰める。

こうなってしまうと、斬撃を飛ばす能力も役立たずである。

そして、常に打ち合っているとすれば、羽の切り替えも出来なくなる。

「その判断は正しい……だが、」

『?』

「チエツクメイトだ」

突如、ユウの姿が一瞬で消えた。

これはユウの持つ瞬間移動能力であろう。

そして、この状況で出てくる場所は、

「そこッ!」

『!』

背後——！

予め読んでいたのか、素早く防御することに成功した。

——だが、そのあとの行動は取れなかった。

何故なら黒十香の背後から、黒十香の体を構成する核が破壊されてしまったからだ。

いや、正確に言えば、貫かれてしまったのだ。

ユウの移動する前の位置の真下——そこには、槍投げをし終わった後の格好をしていたロウウイがいた。

ロウウイの持つ槍は、神殺しの槍。

例え、聖杯から生まれし精霊といえども、あの槍を食らい、核を破壊され、耐えられない筈がない。

先程のユウの斬撃は、全てこのために核を特定するためだということを知ったときには、肉体を維持できず、四散してしまった。

「お疲れさん」

「お疲れ、にしても千里眼楽だな」

「手に入れてみるか？」

「遠慮しとく、これからゲーセン行くし」

「いや、この非常時にゲーセンやってるわけねえだろ」

「行つてみなきやわかんねえだろ！」

「どんな理屈だよ！」

「す、す（こ）い」

「流石ユウだな、相手を誘い出すのウマイウマイ」

士道は確信した。

この六人なら、必ずやこの街の異変を解決できる。

その背後の建物の影から、金髪のサイドテールをした少女がこちらを見ていることすらも気付かないまま。

「……きひひ！なるほど。」

確かにかなりの実力をお持ちのようですね。

なら、私はどのように動けばよろしいのですか？

殺人者様——いえ、人類悪様？」



## 第三十話 神々の遊び（もうネタしかないな）

「・・・で？なにか言うことは？」

「なぜ俺は琴理に踏まれてるのか分からない」

俺ドMじゃねえぞ？

それはロウウイの方だからな？

・・・いま、「俺はちげえ」って、聞こえてきたな。

おかしいな、アイツただの人間のはずなのに。

「何も説明も無しで勝手に消滅させないでよバカ」

「それには謝るが踏まれる意味が分からん」

「ただの罰よ」

「Why？」

「大抵の男は幼女に踏まれれば喜ぶんでしよう？」

「それは一部の人達だけだっつーの！」

「貴方ロリコンじゃないの？」

「何故その考えにたどり着いた!？」

「アンが言ってたわよ」

「後でしばいとく」

「貴方のその話だと、私達じゃ何も出来ないじゃない」  
「あくまで〈ダメージが与えられない〉だけだ。」

触れることは出来るから足止めは出来るぞ」

「結局は貴方達に頼ることになるじゃない」

「仕方がないな」

「・・・で、その話は分かったわ・・・それと」

「ん？まだ何かあるのか？」

「貴方のとなりにいるのは誰なの？」

「隣？」

チラッと、隣を見てみると、そこには鮮やかな銀髪の赤と金のオッドアイの少女が立っていた。

確認するまでもない。

その少女は、

「てか、ほんとどうやって移動してんだよ、教えてくれよヴィテ」

「企業秘密です♪」

「だから誰なのよ」

「ああ、紹介しとくわ」

「アルカヌム・ヴィテと申します。

簡単にヴィテと呼んでください」

「常に未来と過去を見れる能力を持った少女です」

「狂三より厄介な能力持つてるじゃない!？」

「そりゃあ、俺が勝てないんだからな」

「あんたですら勝てないの!？」

「なんか呼び方コロコロ変わるな」

「私は貴方が勝てないことに驚いてるわよ」

「まあ待て・・・ヴィテ。」

何かあつたのか？これからの未来が」

そう言うと、ヴィテの顔が少しだけ真面目な形になる。

・・・ほんとに少しだけだ。

「これからの未来が変わりました。」

恐らく土道さんや精霊さん達じゃなくユウ様達がああ影精霊を倒した影響です」

「どんな未来だ」

「本来の歴史から大きく外れています。」

恐らく本来ありえない現象が発生します」

「本来一体ずつの精霊達が複数で召喚されたりってことか」

「な、なんでそう考えるのよ？」

「精霊達が何人いるか知らんが複数いるなかで、十香と同じ形の影精霊が出たんなら、それにもなつて他の精霊達と同じ影が来る。」

本来起こり得ないことは、精霊の同時による発生だと思っただけだ。

そんなこと合つたか？」

「・・・確かに精霊が出現するときには私達が行かない限り、同時出現はないけど、それだけ？」

「俺は直感スキルはA+なんだよ」

「なによそれ」

「ユウ様」

「ん？どしたの？」

「そろそろ種族の事を教えても良いのではないでしょうか？」

「これから別行動が多くなりますし」

「見たの？」

「見えます♪」

「・・・なら、仕方ないか」

「種族つて、キメラの？」

「まあな、事情が合つて出せない奴がいるけど、少しだけ出させてもらうわ」

そう言うと、俺の体から、四つの光が飛び出し、それが徐々に形を形成していった。そこに立っていたのは、

上半身が半透明なクリスタルで覆われ、右腕が特に人とは思えない程の琴理を握りつぶせそうな大きさの男。

白いワンピースを着ており、薄い翠色のロングヘアで、身体中のあちこちにチラホラと華が着いている幼い少女。

前の世界の箱庭にいた白夜叉の着そうな和装スカート着て、頭に耳より少し上から後ろに向かって生えている角を持った床に付くほど長い髪を持った少女。

前者とはまた違ったタイプのまるで巫女服のような和服で、鮮やかな金髪と同じ色の狐の耳と九本の尻尾を持った少女。

全員が人間では無いことが分かる印象だった。

「一人ずつ自己紹介していつてくれ」

「「はい」」

「一人返事！」

「・・・分かった」

まずはクリスタルの男から、

「シドと呼ぶ。」

こう見えても天使の一種になってしまった者だ」  
「え、ええよろしく」

次に花まみれの少女、

「ユグドと申します。」

種族は植物で、花壇の花を見るとうれしい気持ちになります」

「貴方はアホそうね」

「ふえ？」

「よくわかったな琴理」

次は、角の生えた少女、

「ミラ・ルミノックスじゃ。」

簡単にミラでよい、種族はただの鬼じゃ」

「のじゃロリでしかも琴理といい勝負だぞ？」

「何故人の胸を見ながら言うのかしら？（怒）」

「あゝ主よ？分かっておるじゃろうな？」

「は、ハイ（汗）」

最後に狐耳の少女、

「エウリユアレじゃ。」

「……本当は蛇の關係する女神の名なのじゃが何故か狐なのにこのような名前がついてしまつて少し気分が最悪なのじゃ」

「それでもまさかの呪術と魅力スキルがあるつていう中々にチートなキャラじゃないかな、たまも」

「たまも？」

「……エウリュアレという名前なのじゃが、たまもと呼んでくれんかの？」

「わ、分かつたわ」

「ほんとコンプレックスだよな」

「主様が悪いのだぞ！殺生石から出してくれたと思つたら、主様自身が「それ以上はネタバレになるからストロップー」誤魔化すでない主様!!」

「はあ……そしてこの世界で散歩しまくつてるー」

「呼ばれた気がして登場！皆の妹！でもお兄ちゃんは兄様だけ！アン！！クレメンズですー！」

「あんたもだつたの!？」

「とまあ、俺の種族の半分がこんなのかな？」

「カタログで言いますと、天使・植物・鬼・九尾・ダークマター、といった感じになりませぬ」



「皆個性的なのね・・・てか、ユウはロリコンじゃない」

「違いますー、何かの間違いですー」

「他はともじや無いですが出せませんからね」

「そんなに危険なの？」

「戦闘狂だからな」

「ユウ様も負けてませんよ？」

「でもこの人達はどんな存在なのよ」

「え？皆神様だけど？」

「え？」

「ユウ様が契約する者達の第一条件が〈神である〉ことですからね」

「うわぁー・・・」

「キメラには仕方がないんだよ」

「そろそろみなさん戻ってください」

「「「分かった」」」

そして、四人の神達が戻っていくなか、琴理は一つの疑問をユウに聞いてみた。

「貴方の天使もしかしてシドの物とは違うんじゃない？」

「あれ？よく気付いたな」

「！ じゃあ！」

「俺はアイツらの力は使える。

それと同時に自分の種族の力が使えるんだよ」

「なんで使えるのよ」

「そんなの決まってるだろ？」

「俺がキメラの最強種だからさ」

「因みに一番驚いたのは、ロウウイがあの後ゲーセン行ったら、マジでやってたつてどこなんだよ」

「興味ないわよ」

「興味ありません」

## 第三十一話 ある日の雨の日

黒十香の事件から一週間が経った今日この頃、

「・・・今日も雨か・・・」

「どうした琴理、雨嫌いなのか？」

「いや、そうじゃないわ」

「ならなんでだ？・・・チエツク」

「ここ最近雨が多いな、と思ってただけよ」

「確かに土道も洗濯物が乾かないって悩んでたな」

「それは悩ましい悩みね」

「悩みじゃん・・・チエツクメイト」

「だっー！また負けた！」

「・・・あんた達なにしてんのよ？」

「「チエス」」

「これで十戦八勝二敗でユウの勝ちか」

「ヤマト弱くね？」

「神のいたずらか・・・」

「悪魔の罠でもねえよ」

「くそっ！俺にも何か能力があれば！」

「ちやんとあるじゃん」

「他だよ！」

「着けられるけど？」

「着けて！」

「そんじゃあ、」

話をしよう。これは先程の話から二分後だ。

「下らねえので尺とるなよ」

「ほんとな」

「で？能力決まったの？」

「ああ、ヤマトには《完全演算処理能力》をあげることにしたわ」

「・・・なんなのその能力」

「簡単に言えば、スーパーコンピューター」

「それは分かってるわよ」

「これで頭脳戦でかつる！」

「なら、ヴィテと対戦だな」

「すいません、調子に乗りました」

「そういえばユウ様」

「ん？」

「一人この世界に来ますよ」

「「「「は？」」」」」

その言葉と同じタイミングでユウ達が居るリビングの扉が開かれ、

「久しぶりー！」



「誰?」

「酷いよ!」

「誰?」

「二回目!」

「えつと……どなたですか?」

「ああ!忘れてた!……どうもはやとび速翔 しゅん隼と言います!」

まるで狼がモチーフのような天然パーマのスキリしたような顔立ちの黒いジャケットと黒いジーンズを履いた青年が現れたので少し面白くしてみた。

「知り合いか?」

「一応な」

「ユウ君酷いよ」

「それよりも隼。

どうやってこっちに來たんだ?」

「その人に連れてきてもらった」

「……」

「……」

「 vite 逃げるな!」

「さよなら〜♪」バタン

「・・・外に逃げたな」

「これからよろしく！」

「・・・まあ、よろしくな」

「そーいやさ、土道よ」

「ん？どうした？」

「少し空間弄ってトレーニングルーム作ったから」

「はあ!？」

「いやさ、やっぱり体動かさないと鈍っちゃうんだよ」

「でも勝手に作らないでほしいな」

「琴理から聞いたけど、精霊達あまり霊力を消費しないからこれでストレス発散みたいに出ればいいかなと」

「・・・なら、いいか」

「ありがとな」

「別にいいよ、少し驚いただけだから」

とまあ、なんか完全に打ち解けた感じで土道と話し合ってたんだよ。

そしたら、そこにアンがやって来てさ？

「兄様く!!!」

「うわあ!?! どうした!?! なんて半泣きなんだよ!!」

「あ、悪魔が家にいるよー!!!」

「悪魔?」

「・・・まさか!」

ん?

士道は何か感づいているみたいだな。

悪魔ってなんなんだよ。

「こんな雨の日にお外に出られないから土道ダーリンのお家に遊びに来たのに今ラタトスクにいるから私かなーり寂しいので七罪なつみちゃんを可愛がって待っていいようかとデユフフ  
フ・・・」

「ちよ！美九みく離して！私は四糸乃の所に行くんだって！って、地味に服を脱がそうとするな！私への当てつけか！てか、二亜にあ！あんた私を助けなさいよ！ソファで優雅にのんびり本なんか読んでんじゃねえ!!」

「仕方ないじゃないか、土道少年がなんか大変な事になって私達もそれで彼を守るために集められたんだよ？私としては大切な恩義があるからわざわざ大変な漫画の連載を止めてまでこちらに来てるんだから暇なのよ。だったらやることは本を読むしかないじゃん」

「土道早く帰ってきて〜!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・アンが怖がってた理由が分かった。

あの美九とかいうどっかのアイドルのような雰囲気、奴の頭の中を見てみたけど、スゲエピンク色だったよ。

・・・ガチ百合じゃねえか!!

アンが怖がる筈だわそりゃあ。

アンああいうの苦手だからな本人はこんななのに。

後、なんかその美九に捕まってる緑色のボサボサ髪の橙色の服を着ている少女が暴れてるその隣のソファでオタク感満載の灰色のショートヘアの眼鏡女子が本を読んでいた。

なんとというカオス。

「それよりも土道。」

あの三人精霊か？」

「あ、ああそうだ」

「・・・世の中変な奴等しかないな」

「・・・うん」

その後士道が帰ってきてることが七罪にバレてこつちに逃げてきた時、同時にアンが見つかって、美九の目がマジでヤバイ眼になってた。

・・・今度からアンの事少し気にかけてようかな？

「やっぱりユウ様は色んな世界を渡り歩いてますから環境になれるのは早いですね」  
ヴェテは一人で薄暗い路地裏を歩いていた。

外は大降りの雨なのだがそんなことお構いなしでその場で立ちながら考え事をして  
いた。

箱庭でもそうだったが、ユウ様は甘い。

誰かの為にその力を使い、自分の為に戦い続ける。



そして一緒に歩もうとする。

とても甘く——とても優しい。

・ ・ ・ 私と会ったときもそうだった。

殺す為だけに私は命令で戦争を始めた。

沢山の人達 ・ ・ ・ 生き物達を殺して殺して殺し尽くした。

そんな中、あの人達に出会った。

あのとときの戦いを今でも鮮明に思い出せる。

これは過去を見ているのでは無い。

私自身の大切な記憶を思い出しているのだ。

あのとときは、私の方が強かった。

あの人達は手も足も出なかった。

それでも守りたい者達の為に何度でも立ち上がり、何度でも打ち倒され、何度でも私に向かつてきた。

初めてだった。

こんなにも殺したくないと思つたのは。

でも止められなかった。

止める事が出来なかった。



私に・・・居場所をくれた。

「嬉しかった・・・」。

あのとき私は変わった。

ようやく自分がしたいことがハッキリと作ることが出来た」

だから今度は、私が恩返しをする番だ。

ユウ様の甘さが世界を救うように。

ユウ様の優しさが世界を変えるように。

だからロウウイ様、零様、ヤマト様、レオン様、ミーレス様、そして今日来られた隼様。

あの人達もユウ様の作ろうとしてる世界を手伝ってくれている人達だ。

・・・手を伸ばせば、どこにいる誰でも手を繋ぐ事が出来る。

自分は一人じゃないと教えてくれる。

そんな世界を今度は私も作る。

ユウ様と・・・あの人と共に。

どれだけの困難が襲ってくるか分からない。

どれだけ未来が見えたとしてもそれはただの結果論だ。

確定した未来などある筈がない。



私の【未来監視】は、あくまで能力だ。

使用しなければ、当然過去も未来も見えない。

だからこそだろう。

自分の胸から鮮血が出てきたのに気付かなかったのは。

「……え？」

何が起こったか、そんなことを頭の中で整理した時には、体が重くなっていた。

私は後ろから刺された。

心臓を一突きされたのだ。

ゆっくりとその刃を抜かれた時、私は力無く水溜まりに倒れた。

今は夜なので、辺りは暗くなっており、私が倒れた水溜まりには暗くだけど、赤い液体が流れていることが分かった。

ちやんと分かる。

これは——私の血なんだと。

口の中が鉄の味でいっぱいだ。

これ……ちよつと……まずいかな？

「……ま……し……か……き……ま……」

何を言ってるのかまるで聞こえない。

私を刺した人は、すぐさまその場から離れた。

誰なのか後で調べれば誰なのか分かるが、ユウ様に迷惑はかけられない。自分でなんとかしよう。

そう決めたのだが、瞼が凄く重く感じてきた。

残念なことに、こうした大量出血の時には体力の関係上能力が使えない。

・・・何も出来ない。

「・・・はは・・・わた・・・しの・・・つめ・・・た・・・い・・・な・・・」

雨が冷たい。

体が冷たい。

心が冷たい。

全部冷たい。

あ  
あ  
・  
・  
・  
。

冷たくて  
・  
・  
・  
。



心地いい  
・  
・  
・  
。



でも  
・  
・  
・  
。

寂  
しい  
な。

「  
・  
・  
・  
ヴイ:  
テ?  
」

}\  
???  
}

## 第三十二話 心の拠り所

「その日の夜」

「・・・そろそろ寝るかな」

俺は日課に近い読書を終わらせて、寝ようする。

なんで日課に近いのかか？

それはほぼ毎日読んでるからだ。

内容はてんでバラバラなんだけどな。

俺は本を読むときだけかけける眼鏡を外し、寝床にて寝ようとする。

そしたら、窓から小突く音が聞こえてきた。

鳥かなんかだろうと思つた俺は、興味無しの状態でカーテンを開けるとそこには、

「・・・」

「入れてください、そろそろ寒いです」

何故こうなつたか知らんが、服の胸の辺りが血だらけになつて全身ビシヨビシヨの

ヴィテがいた。

正直に言つてすごい気不味い。

とりあえず、

「服着替えて、シャワーでも浴びてこい」

「洗濯お願いします♪」

「んで？何があつた？」

「それは話すことは出来ません」

「なんでだ？」

「これは私の問題です。」

だから自分で解決します」

ヴィテは真面目な奴だ。

自分に落ち度があれば他人に頼ろうとせず、自分自身の手で問題事を片付けようとする奴だ。

でも、

「何か考え込んでたのか？」

「……………」

コイツの能力上このようになるのはまずあり得ない。

俺はコイツの実力を嫌と言うほど知り尽くしている。

その経験から言わせてもらえばヴィテには不意打ちが通用しない。

もし、このように殺しかける事が出来たのなら、可能性としては一つある。

それは、ヴィテが能力を使用していないとき。



しかし、任意で解除出来るとはいえ、そう簡単に能力は解除しない。

なら能力が邪魔になるから解除する必要がある行動をヴィテがとっていたことになる。

そう考えた結果が『何か考え込んだ』になる。

「……何も」

「……」

「つたく、ヴィテも本当に素直じゃないんだな。」

「いいかヴィテ」

「はい？」

「俺はさ……心配なんだよ」

「俺はさ……心配なんだよ」

・ ・ ・ 本当に優しい人。

今私は能力を使用していない。

何故ならユウ様を本当に信頼しているから。

でも、私はこの方に負担をかけたくない。

この問題は私自身が解決するべきだ。

ユウ様はこことはまた別の世界を救うための旅の途中だ。

それなのに私の件でそれを遅らせる訳にはいかない。

でも、それでも甘えたくなくなってしまふ。

今まで愛情という感情をようやく知れたのに、今はそれは必要ないのに、私は今甘え

たくて仕方なくなっている。

ついさつきまで、私は冷たかった。

とても冷えていた。

凄く冷めきっていた。

本当に虚しかった。

・・・馬鹿ですね私は。

ボロが出てしまった。

私は機械。

そう考え込まなければ、私は私ではない。

今までも、ユウ様達と共に歩み始めた時も、これからもそうしていかなくちやいけないのに。

「・・・そろそろ部屋に戻ります、いきなり窓から入り込んでしまつて申し訳ございません」

甘えたいという感情を押さえ込まなくちや。

これからユウ様達はまた戦いを始める。

そのサポートをしなければいけない。

そこに、私の最前席は無い。

・・・頭を冷やしましょう。

これ以上はもうだめです。

「・・・・・・・・」

「それでは」

「・・・・・・・・待て」

扉に手をかけようとした時、私の視界が反転した。

気付けば、私は部屋を真横に見ている。

いったい何が起こったのか辺りを見てみると視界の上にユウ様の顔が見えた。  
とするとこれは、

「・・・・・・・・膝枕」

「そつ、少し待ってろ」

「・・・・・・・・何故膝枕？」

「ご褒美。従者を労るのは主の勤めだろ？」

そう言いながら私の髪を、頭を優しく撫でてくる。

今の私からすればこれは毒だ。

これじゃあ甘えなくなってしまう。

「ゆ、ユウ様・・・・・・・・」

「おっ？ 恥ずかしいのか？ なんだよ可愛いな」

「足の肉挟りますよ？」

「痛いので勘弁してください」

「それより膝枕をやめてください」

「嫌だ」

「何故ですか？」

「ん？ 何故ってヴェテが泣きそうだったからだぞ？」

「!!？」

「え？ 自覚なかったの？」

「そ、それは」

「今は甘えとけ、気負いすぎたら体に毒だぞ」

「／／／／」

「恥ずかしい。」

まさかそんな顔をしていただなんて。

そんな顔まるで捨てられそうな小犬に見えたのではないだろうか。

こ、こうなったら長期記憶される前に大きな衝撃を与えて記憶を消すしかない。

「・・・なあヴェテ」

「にや、にやいー!にやんですか!？」

あアアアアく!!!／／／

変な声を出しちやっただー!!!

ヤバいすごい動揺してる。

でもユウ様はそれに触れずに話しかけてくる。

「苦しかったり、辛かったりしたらいつでも頼りに来ていいんだぞ？」

「え．．．？」

気付かれてた。

それが分かった瞬間、顔が茹でトマトみたいに赤くなる。

うろううく．．．．．。

「俺はお前が好きだからいつも笑ってほしいんだよ」

「つく．．．．」

この好きは何も変な言葉ではない。

でも私にとって媚薬のようなものだ。

抑え込まないと、そうしないと私は。

「だからさ？泣きたいなら泣けばいい」

「あつ．．．」

そつとだけど、私の目から涙が出てきており、それを優しく拭ってくれる。

「・・・ユウ様は優しすぎます」

「そうか？」

「優し・・・すぎますよ」

でもそうだった。

私は一人ではない。

いつまでも側にいてくれる人を思い出した。

私の心を芯から温めてくれる人が。

「・・・ユウ様」

「なんだ？」

「・・・ありがとうございます」

「どういたしまして」

ああ・・・本当に優しい人だ。

あんなにまで暗くて重かった私の心はもう幸せでいっぱいだった。

まだ見たかったけど、安心したせいか眠気が襲ってきた。

温かい。

それだけで充分だったのか。

そして私の意識は、暗く、温かい黒い世界に沈んでいった。

「すう・・・すう・・・」

「・・・お疲れ様ヴィテ」

余程疲れていたのかヴィテは可愛い寝息を立てながら俺の膝を枕にして寝ている。



これは全世界の男子からなんかの罰受けんのかな？  
改めてヴェイテの寝顔を拝見する。

もう涙は流していないから、ちやんと安心できてたんだな。  
こんな小さな女の子にこんな辛いことさせちや、駄目だな。

「おやすみヴェイテ」

俺はサラサラの髪の毛を撫でながら囁くようにそう呟いた。

「それで？ 来れるか？」

『ヴェテがいるならどこへだつて行くぞ』

「なら、お前に任せる」

『それとなユウ』

「ん？」

『会つたら死刑な』

「・・・せつかくの感動が無くなつちやつたよ」

『それよりユウ』

「今度はなんだよ」

『ヴェテのこと・・・ありがとうな』

「・・・どういたしまして」

「やっぱ俺ら同じだな」

『やっぱ俺ら同じかな』

「・・・来るまで任せろ相棒」

『着いてから任せろ相棒』

## 第三十三話 嵐の前の静さ

「というわけで日々の疲れを癒すためなのか知らんが、このオーシャンパークに貸し切りで来たぞ」

ラタトスク機関マジで凄いな。

もはや国家レベルだろこれ。

このオーシャンパークに遊びに行くのにこの人数じゃ流石に迷子が出てきてしまうので、貸し切りにしたのだ。

まあ仕方ないな。

なんせ、

「シドー！ここには私達しかいないのだな？」

「し、土道さん。水が温かいです」

『ウーン。快適だね〜』

「といつかなんであなともいるのよ折紙」

「土道がいるなら私はどこにだっている」

「なかなか我に合ったところではないか！ねえ？夕弦」

「首肯。夕弦に合っていますね」

「今日は招待してくださいありがとうございます」

「だから私に引つ付くな！というかなんであんなは本なんか持つて来てんのよ！」

「読むために決まってるだろ？人がいないから気楽で楽だ」

「お前らゝあんまりはしやぎすぎて怪我するなよ」

「久しぶりだなプールなんて」

「滅多に行かないよな」

「ペストは平気なのか？」

「流石に水には触れられるわよ」

「死神なのに川じゃなくてプールか」

「別に良くね？」

「遊ぼー！」

「フフフ♪みなさん楽しそうですね」

二十くらいか？

めっちゃめっちゃ多いな。

なら、迷子になりそうだわ。

それにヴィテもあの夜から立ち直ったようだ。

あのあとどうなったのかか？

膝枕したまんま寝ましたが何か？

だつてどかせられないじゃん？

んまあ、立ち直ってくれたら俺も皆も心配しなくていいから良かった良かった。

「ユウ様？」

「いや、何でもねえ」

さて、俺も遊ぶか!!

「「うわああああ!!!」」

あつちで士道・十香・琴理がウオーターズライダーに乗ってるな。

三人乗りつて大丈夫か？あれ。

「うわあああーん！」

「四糸乃落ち着いて！よしのんならすぐ取ってくるから！」

「おおー？スツゴい冰山〜」

あつちでは四糸乃の手についてたよしのんが外れて不味いことになってるな。

人いなくてほんとに良かったわ。

「負けないからね夕弦!!」

「同意。負けませんよ耶俱矢!!」

「お二人とも頑張つてくださーい」

あつちでは夕弦と耶俱矢の水上海レースを美九が応援しているところだな。

あの二人はええな。

なんか諸事情で来られない精霊とラタトスクで自身の武装を点検している真那がないが仕方ないな。

それはそうと俺らサイドはどうしてる？

「くらえロウウイ！水鉄砲ならぬ水大砲！」

「わぶっ!!?・・・くらえや！」

「なっ!!?槍投げてくんじゃねえ！」

トレス・オン  
「投影開始！連続水鉄砲!!」

「そんなのこつちも出来るさ!!」

「オラオラオラオラオラオラア!!!」

「・・・馬鹿ばかり」

「そんなペストのパシリにされる俺ら」

「なんか損してるな」

「日焼けしないようにしませんと」

「私半分霊体だから日焼けしないなく」

なんで水鉄砲合戦やってんだよ。

。。。。。。。。。。。

。。。。。。。。。。ウズウズ。

。。。。。。。。。。ワクワクワクワク。

「俺も混ぜろやおめえらー!!」



「「「なんかやってきたー!!!?」」」

「ユウ様楽しんでましたね」

「あー、はしゃいだはしゃいだ」

「それよりもユウ様」

「ん？」

「ありがとうございます」

「またか。もう何年の付き合いだと思うんだよ」

「ざっと二百年くらいですね」

「馬鹿かもつとだろ」

「サバを読んでみました」

「・・・なあヴィテ」

「はい？」

「・・・今幸せか？」

「幸せじゃないです」

「ふええ!？」

「幸せにしたいなら・・・理想に向かって頑張ってください」  
「！」

「それなら、許してあげます」

「・・・約束するさ」

「なら・・・」

「早速だな！」

その言葉のすぐ後にオーシャンパークの壁にヒビが入り、倒壊していった。

その中心部に、いたのは黒い症気を纏った四糸乃・琴理・狂三の姿をした三人の闇精霊が飛んでいた。

「やっぱ来たか」

「見た通りですね」

「それじゃあ！」

「俺達に任せろユウ」

「ロウウイ!?!零!?!ヤマト!?!」

「お前だけ戦うのはズルい」

「たまには戦わせろ」

「そういうこった」

「いやでもな？」

「お前はあつちを片付けろ」

「・・・そうだな」

そのユウ達の後ろで、また壁が壊れる。

そこから全身鋼鉄の機械人間のようなロボット達がワラワラと出てきた。

「あれが《バンダースナッチ》か」

「ASTが作った戦闘マシーンか」

「じゃあヴィテを殺しかけた奴も・・・」

「はい・・・」

「・・・なら全部ぶっ壊すか」

「「ならこっちは任せろ」」

「任せませ」

「・・・レオン、ミーレス、隼」

「ん？」

「何だ？」

「どした？」

「やるぞ!!」

「  
「  
あ  
あ  
!!  
「  
「

## 第三十四話 黒き旅人

「はあああー！」

迫ってくる三体の《バンダースナッチ》を背負つてた大剣で一振りして全壊させる。

この大剣に使われている素材・・・というより金属なのだが、これがかなり特殊な金属を使っている。

加工そのものがまず難しく、熱を与えたり、冷やしたりしても脆くヒビ割れることもなく、同じ金属同士でなければ破損することがないという程の固さを持っているのだ。

当然ながら並の力を加えても全く傷など着かず、ましてや俺が全力でやらなければ壊れないのだから固いのなの。

そんな金属を使っているこの大剣を前にこのバンダースナッチ達の金属はまさに紙屑同然の柔らかさだった。

(まあ、十香の時はまだ耐えられてたが、あれよりも強力だと流石に折れかけるか)

「ユウなんで天使使わねえの？」

「手加減しないから」

「それ天使が弱いつて意味じゃ？」

「決してそんな訳じゃない」

何て会話しながらも俺、レオン、ミーレス、隼の四人で百は簡単に超える量の敵を風呂ぎ払いながら会話していた。

「纏めて刈り取れ！『ヴァリアントリーパー』！」

レオンが手にしている鉄の鎌には特殊能力がある。

それはレオンの意志一つで、鎌の刃が自在に変化するという呪術をかけてある。

・・・本人の同意があるからな？

レオンの鎌がバンダースナッチ達の頭や胴を次々と斬っていく。

ただしこの鎌は一気に刃を伸ばし、横風ぎで振るつてるので、

「あぶねえ！」

「うおつと!？」

「ひええい!？」

「あつ、わりい」

「『死ぬわ!』」

「死神だし？」

とかふざけながらも次々と破壊していくが、どこからともなく湧いてくるためキリがない。

まだ敵が出てくるのか、と思っているがコイツらを一掃したただけでは終わらない。

今この場にはいないロウウイ、零、ヤマトが突如として現れた四糸乃、琴理、狂三の三人の影精霊と戦っているからだ。

その三人を倒さなければいけないから、この邪魔なやつらの足止めをしているのだ。

「もう一踏ん張り頑張りますか！」

「了解!!」





「ふう……」

なんとかこのバンダースナッチ達を片付けられた。

今私達は外で待ち伏せしているバンダースナッチ達を相手にしていた。

「流石に実体の無い私もキツかったよ」

「アンさんお疲れ様です」

「流石だよヴィテさん」

「何がです？」

「何がって、全く疲れてないじゃないですか」

「いえいえ、ただ的確に首を切っていただけです」

「凄いよヴィテさんは」

やっぱりアンさんと一緒に居ると楽しいですね。

こんな人と一緒に居られるからこんなにも心が安らぐんでしょうね。

その刹那、背後から物凄く強い殺気が背中に刺さった。

その対象は、

(私！)

ガキン！

私は冷静に両手に持っていた短剣を使って、背後から来た殺気の籠った対象を防い

だ。

その対象を私はよく知っている。

「……よく私の剣を止められましたね」

「……やっぱり」

この人が私を殺しかけた相手。

今回も私やユウ様達を殺しに来た。

「確実に心臓を貫いた筈ですが……なぜ生きてるのでしょう」

「あなたは……」

「私の名は、エレン・M・メイザース。DEMから派遣されました」

DEM……。

琴理さんからよく聞いています。

精霊を殺すための組織。

今回の弊害になると思っていました。何故私を殺しに来たのか。

精霊だと思ったから？

もしくは、聖杯の影響を受けて私達をより危険と判断したから？

いずれにしても、この人は止めなくてははいけません。

「名前を教えたのは冥土の土産です」

なら、こちらも全力を持って、  
そう思ったその時、

「っ!？」

ガキン、とまた金属同士でぶつかると音が聞こえてきた。

そこで私は自分の目を疑った。

だつてありえないからだ。

私の目の前に、黒い人影がある。

それは黒い服を着ているからだ。

しかしそれだけじゃない。

ユウ様と全く同じ服を着ているからだ。

髪の毛も色が白じゃなく黒になっているが全く同じ形の髪をしている。

左手には、ユウ様と同じ大剣を持っている。

私はこの人をよく知っている。

かつて、ユウ様と共に私に戦いを挑んで、傷付き、倒れながらも最後まで立ち上がり、私を負かした後も側に寄り添ってくれた。

その人が、こちらに振り返る。

そのユウ様と違い、青い瞳に写っていた私の顔は泣きじやくつていただろう。

私の大好きな……。

「無事かヴィテ」

「バハムートさん!!!」

「……いったいどこのどなたですか」

「悪いがヴィテ。少し待っててくれ」

「は、はい」

そう言つて、エレンに向き直る。

その顔は怒りに満ちていた。

「聞かせてもらおうか」

「あなたに話すことは何もありません」

「ヴィテを傷付けたのはお前か？」

「……」

「……」

一瞬の間だ立つた時、

「そうだ、と言つたら？」

「殺す」

刹那。

バハムートさんは、大剣をエレンに振り下ろしてした。いくら私でも、見えないほどの早さで。

エレンもやはり予測していたのか、手に持っていた剣で防ぐ。

しかし、威力を殺せず少し足が地面に埋まってしまう。

「くっ!」

「意外だな」

「何っ!?!」

「埋まるだけで済むとはな」

「フツ・・・この程度!」

「てつきり踏ん張れると思ったがな」

「なっ!?!」

お互いに距離を取り合う。

エレンは恐らく警戒しまくっている。

何せ相手の力量がまだよく分かっているのだから。

対してバハムートさんは常に相手を見ている。

これは相手の力量が分からないからではない。

勝てるという自信しかないのだ。

「俺はユウとは違う」

「何？」

「ユウは、相手の力量を計りながら戦っているが、俺は最初から潰しに行くぞ」

「っ！」

そしてバハムートさんは、右腰についたユウ様と同じ刀剣を右手で手に取った。

完全にユウ様と左右対象になっている。

それもそのはずだ。

ユウ様とバハムートさんは、同一人物なのだから。

「我が盟約に従え！ 汝は偉大なる七王の一角！ 汝は世界を制する魔が一人！ 我は汝と契約を結びし者！ 我が問いに答え、我に汝の力を貸せ！」

「術式!？」

「まさか本気で!？」

「ああ」

「駄目ですよ！ ユウ様に迷惑がかかります！」

「別に良いだろ、アイツもやってるんだ」

「た、確かに」

「それに」

「それに？」

「ヴィテを傷つけられて黙ってられるか」

バハムートさんの周りに魔力が集中していく。

それはユウ様が十二天を纏った時と同じ、

「我が武器となれ！平天大聖!!!」

バハムートさんは、大剣を背に背負い、左手にある剣を手を取った。

まるで王冠のような形をした柄を持ち、まるで悪魔のような刺々しい棘のついた両刃剣を持っていた。

その剣は、赤い血が固まったかのような色になっていた。

ユウ様の持つ刀剣には《護法十二天》が宿っているが、こちらのバハムートさんの持つ刀剣には《七天大聖》が宿っているのだ。

「さあ、はじめようか！」



## 第三十五話 人類最強VS異世界最狂

「・・・凄いな」

「どうしたの十香」

「ああ折紙か・・・あの二人だ」

その示された先を見てみると、あの二人が戦っていた。

一人は、私が元々所属していたASTの上層部に当たるDEMの魔術師 ウイザード エレン・M・メイザース。

彼女はハッキリ言ってる強い。

人類最強の名は伊達ではない。

精霊の力がある私でも勝てるかどうか分からない——いや、恐らく勝てないだろう。

そんな彼女を相手にしているのは、黒いユウのような姿をしている奴だ。

ユウじゃないことは、建物の中で実際に本人が戦っているから確信を持てる。

そんな彼に似た者が、持っている剣でエレンの攻撃を弾きながら打ち合っている。

あのエレンを相手に弾きながら戦えるのは少数どころか数えるくらいしかないんだ

ろう。

「世の中はまだまだ広いのだな」  
「その通りね」

「ところでさつき」  
「十香」  
「と？」  
「と？」  
「折紙」  
「と？」

「くっ！」

「どうした？その程度か〈人類最強〉」

「この男・・・さつきから疲れも見せていない。」

まるでどこから剣を振るうか分かってるかのようには的確に尚且つ力を込めずに叩き落としてくる。

中々の手練れだ。

この世界の外にはまだまだ多くの障害がありそうだ。

「・・・何故お前〈外の世界〉を知っている」

「さあ？なんのことですかね？」

「・・・」

どうやら心が読めるようですね。

成る程これで合点が着きました。

加えて、行動のパターンも全て把握しました。

これなら、

(殺れる！)

「つ・・・」

片方の剣で攻撃する。

バハムートはこの攻撃を左手の剣で先程と同じ様に弾く。

すかさず、もう片方の剣で突きに行く。

バハムートは回避するために右手で剣を掴む。

魔力で防いでいるのか手には傷ひとつ付かない。

そこに弾かれた方の剣で斬りに掛かり、また同じ様に弾かれる。

だがこの瞬間を狙っていた。

相手の両腕を顕現装置リアライザを使ってその場で固定する。

「何!？」

「死になさい【ロンゴミアント】!!」

巨大な魔力が身動きの取れないバハムートに向かって激突する。

その光景を既に遠くに離れていたエレンは笑っていた。

「これで私の勝ちです。．．．やはりあなたでも私には勝てませんでしたね」

次はもう一人同じ姿をしているユウ・クレメンズも抹殺すれば、私達の計画もより先に進めれるようになる。

その後で精霊達を狩り尽くせばいい。

どうせいつでも殺れるのです。

命は長く持った方があちらも嬉しいでしょう。

「エレン・M・メイザースさん」

「．．．なんでしょうかアルカヌム・ヴィテ?あなたも早めに殺されたいのですか?」

「私はそんな自殺願望者じゃないですよ?」

「ならなんなのですか？ 今度はあなたが戦うのですか？」

「いえ、私は戦いません」

「・・・ほう」

「何故ならまだ負けてませんから」

「何？」

「まあその通りだな」

「!？」

声のした方に顔を向ける。

そこには奴が居た。

私の誇る最強の一撃を耐えきった奴が立っていた。

しかし、それだけではない。

何故なら傷ひとつ付いてないのだ。

あれだけ至近距離で打ち込んだのに、全く何事もなかったかのようにその場に立っている。

「くっ！」

「もう詠唱もめんどくさくなってきたな」

そう言う奴は、右手で左腰に着いている刀剣を手に取り、

「我が身に纏う衣よろいとなれ【牛魔王】」

魔力が再び奴の体にまとわりつく。

そしてその服装を別の姿に変えていく。

まるでそれは着物のような巫女服のようなスカートスカートの着いた女物の服装になつていった。

．．．完全に女装である。

頭にはティアアラに似た形の王冠が乗せられており、袖も二の腕を隠すところまでしか出ていない。

そして王冠の両脇に普通の人間には着いていないもの——うねった巨角が着いていた。

だが一番気になるのは、

「な、何故女装なのですか？」

「宿した靈魂が女だから生前の服装を着たらこんな感じになるんだよ」

「〈七天大聖〉って皆さんなんで全員女の子なんですかね？」

「知るかよ。唯一の救いは胸が出ないことだな。出てたら固っ苦しくなっちゃう」

「．．．．．」

ヴィテが自分の胸を触って、顔を曇らせていますね。

そんなに気にするものですかね。

「だがな」

「！」

「靈魂を生前の状態で宿せば戦闘力は単純な足し算だ。さっきので勝てなかったのに、お前に勝ち目はあるかな？」

確かにこの状況では勝ち目はない。

だがまだバンダースナッチ隊が残っている。

まだ状況は、

「悪いが今お前一人だけだぞ」

「えっ?・・・」

そのとき隣の建物から大きな音がしたと思ったら、突然壁が崩れていった。

「なっ!?!」

「ようやくか」

崩れたところに人影があり、砂ぼこりが無くなったと同時にその姿が確認できた。

そこに立っていたのは、ユウククレメンズだった。

右手に、まるで鯨の刃を極限にまで縦長にし、細くしたような剣を持っていた。

その後ろを覗いてみると、バンダースナッチ隊が全てバラバラにされていた。



恐らくユウクレメンズが全て斬ってきたのだろう。

これで完全に退路が絶たれてしまった。

「遅いぞ」

「ワリイ、遊びすぎたわ」

「二番死にかけた」

「お疲れ様ですレオンさん、ミーレスさん、隼さん」

「っ・・・不味いですね」

このままでは負ける。

この私が？

この者達に負ける？

そんなこと、認めない！

私は誰にも負けるわけにはいかない!!

どんな手を使っても!!!

必ず!!!

ヤツラヲコロシテ

「「危ないエレン！」」

「えっ?・・・」

気づけば、私はユウとバハムートに手を握られていた。

何があったのかは分からなかったが、今一瞬だが、何かに取り込まれそうになった？  
いったい何が？

私を取り込まれそうになった？

誰に？

どうやって？

何故？

「聖杯とは何も関係がなかったようだな」

「聖、杯？」

「本当に何も知らないようだな」

「この二人は何の話をしている？」

「聖杯？」

「そんなことアイクは言っていたでしょうか？」

「・・・今回は逃がしてやる」

「・・・何？」

「お前からDEMも聖杯の被害者側だと言うことが分かった」

「どういふつもりですか？」

「お前の質問は聞いていない」

「逃げるのか？ それとも戦うか？」

「・・・良いでしょう今回は私の負けです」

「・・・」

「次は殺します」

「殺せるもんなら」

「殺してみろ」

今回ばかりは、自分の力不足を実感できた。

なら、それに備えて対策するのみです。

首を洗って待っていなさい異世界の住人たちよ。

「・・・アイツ一瞬だが聖杯に取り込まれそうだったな」

「余程強力な聖杯がここにあるんだろ？」

「だが奴は知らなかった」

「また一から探すか」

「それじゃあ」

「ロウウイ達のところに戻るぞ」

「「「「おう!!!」」」」」

## 第三十六話 三者三強

ユウ達とエレンが激闘？を繰り広げているその一方で時同じくして戦っている者達  
がいた。

聖杯によって生み出された影精霊達を相手に行っている三人組。

ロウウイ・零・ヤマトの三人だ。

そちら側でも激しい戦いが繰り広げられていた。

「四糸乃とは会ってすぐに仲良くなったから戦いづらいな」

ロウウイは、今黒い四糸乃と睨み合っていた。

この四糸乃はどうやらよしのんのような別の人格は入っておらず、完全に自分の意志で攻撃してきているようだ。

それはそれで楽だから構わない。

何せ、人格が別れてて、その人格を切り離して再生とかしたら面倒だからだ。

その心配は要らないのは楽でいい。

問題があるとしたら相手の攻撃方だけだ。

今周りでは猛吹雪の状態だ。

人間の視力ならこんな吹雪の中ろくに見えもしない。

だが相手はこんな吹雪の中でもこちらの位置を把握出来る。

先程からこれのせいで全く攻撃が当たらず、防衛に回ってるしか出来ないのだ。

「流石にキツイ」

こつちも簡単な武空術ぐらいは可能だが、スピードは断然彼方の方が上だ。

しかもあの四糸乃はよしのんに乗っていない。

出せないのか、それとも出さないのか分からない状況だが恐らく前者だろう。  
何せコイツらの共通点は、

「心が無い」

『……』

黒四糸乃が右手を氷の剣に変えて斬りかかってくる。

先程からこのような攻撃を繰り返して、行ってきたからようやくやくなれてきたぞ。

その攻撃を右に持つてる「ロンギヌス」で横薙ぎに薙ぐ。

所詮は腕と一体化している。

弾けば腕も持つてかれる。

それは体勢を崩すことに他ならない。

「貰った!」

『……!』

だが、相手の方が一枚上手だった。

誰が想像出来るか。

黒四糸乃の腹から氷の腕が生え、左に持ってた槍「レガリア」を弾き飛ばす。

今度は逆にこつちが体勢を崩された。

すぐに体勢を整えようとしたが、どうやら読まれていたらしく追撃を仕掛けてきた。

『!』

だから気付かなかった。

一番の罠があることを。

「何!？」

突如下から昇ってきた氷の柱に呑み込まれる。

恐らく黒四糸乃が密かに大きくしていたのだろう。

奇襲を行うために。

「ぐっ!?! う、動けない」

槍を使うおうにも、槍も半分も埋まっている。

防水加工を使うおうにもこんな形じゃ意味を持たない。

黒四糸乃が氷の剣を構えてこちらを見据えている。

この状態からなら確実に息の根を止められるだろう。

そう、この状態ならな。

『!?!』

突如、黒四糸乃は、赤い十字架に囚われた。

『!?!?!』

逃げようともがいているが、ピクリとも動く気配がない。



「それが俺の槍の能力だ」

『?』

「敵を貼り付けに捕らえる能力……それがその槍の本当の能力だ」

そう会話しているロウウイは既に氷の柱から脱出していた。

瞬間移動したわけではない。

氷の柱を砕いたのだ。

しかし、槍は半分も埋まっていた筈だ。

いったい何をしたのか？

「これが俺の持つてる槍の能力だ」

ロウウイは、貼り付けにされた黒四糸乃に狙いを定める。

その時一瞬だが四糸乃の笑顔が浮かび上がった。

だが、それでもやらなければならない。

自分の世界にいるアイツを守るためにも。

「貫け【ロンギヌス】!!!」

放たれた槍は光の早さに近い速さで黒四糸乃の核に向かって飛んでいく。

光は十字架ごと黒四糸乃を貫いていく。

飛んでいった槍は軌跡を描きながらロウウイの右手に、十字架になっていた槍は左手

に戻ってくる。

核を貫かれた黒四糸乃の体は肉体を保てなくなり、その体を徐々に消滅させていく。「……子供を殺すのはやっぱりキツイな」

後に残ったのは、なんとも言えない勝利の後味だけだった。

「このバーサーカーことりん強すぎない?」

初っぱなから何を言っているんだと思うかもしれないが、俺はそう言いたい。

俺は琴里と一回戦った。↓その時実力が分かった。↓これなら勝てる、と思ったのに。

『・・・』

「斧固いし、でかいし、強すぎねえ?」

この黒琴里の持っている斧が取り敢えず元のサイズより二倍近くでかくなってるんです。

その上何度も斬ってるのに再生能力で怪我が無くなってしまうし。

こっちはこっちで剣が叩き割られるし。

それと同時に、

『!』

「うわっ、アチツ!?!」

炎がまるで生きてるみたいになうねって突撃してくるから全方位に注意を向けなきゃ

いけない。

なんて嫌らしい攻撃をしてくるんだ。

こんな戦い方をしてくるなんて！

「.....」

あれ？ユウじゃん。

ユウがそんな戦い方するやん。

「でも状況違う!!」

『!!』

黒琴里がこちらに斧を降り下ろしてくる。

さっきので剣が叩き割られまくったので、敢えて打ち合わずに後ろに避ける。でも避けたのが悪かった。

降り下ろした場所から炎が立ち上って来て、こちらに向かって向かってくる。でも遠距離ならこちらにも利がある。

即座に投影して弓と螺旋状の剣を取り出し、剣を一本の弓矢に変化させる。

「撃ち抜け【螺旋剣】!!!」

だがこれは別の剣だ。

正直に言えば、調整した方の剣を使えば、もつと威力が出る。

でもこちらは大地を砕く剣。

ならこちらの方があの黒琴里には効果的だ。

その弓矢が着弾して、小規模な爆発を起こす。

「やったか!?!」

だが一瞬だけ思ってしまった。

(この台詞なんてフラグ?)

そして回収する瞬間が来た。

なんと地面から斧が飛び出してきたのだ。

「ウブツ!？」

恐らく炎が立ち上った場所から潜ったんだろう。

なんとという発想だろうか敵ながら天晴れだ。

取り敢えずイテエ!!

『!』

地面から出てきた黒琴里はそのまま空中で一回転し、斧を叩きつけてくる。

そして俺は体勢が崩れている。

この状況・・・死んだな。

『!?!』

普通ならな。

「天の鎖便利だわやっぱり」

不意打ちには持つてこいだわ。

そういえばこの世界ではまだ使ってなかったっけ？

だからこの黒琴里も予測できなかつたってことか。

・・・もう不意打ち出来ねえじゃん。

『!!』

「無駄無駄。そのレプリカ特殊な能力だから」

『!』

「意思疎通出来たら良かったんだがな」

ん？

文字これで合ってたかな？

んまあいいや。

「これで止めにしてやるよ」

『!』

トレース・オン  
「投影開始」

零の手に魔力が集まる。

そしてひとつの形を成していく。

その武器が手に宿る。

皮肉にも同種である忌々しい程の武器をその手に持つて。

「サンダルフォン【塵殺公】!」

『!?!』

その手には一振りの剣があった。

夜刀神十香の愛剣をその手に持っていたのだ。

その剣を黒琴里に向けて、

「チエストオオオ!!!」

真っ直ぐに振り下ろす。

その一撃は黒琴里の肉体を構成している核も同時に真つ二つにされる。

核を破壊された黒琴里の肉体は再生能力を使用することが出来なくなり、その体は消滅していく。

戦いが終わった瞬間に零が思ったことは、

(今日の夕御飯何作っかな)

今日の夕御飯の料理を考える立派なおかんになっていた。



「おかんって言うな  
!!!!」



「マジやばくね?」

俺は悩んでる苦しんでる。

なぜそうなったのか。

それは俺が戦ってる相手、黒狂三の事だ。

もう黒読みで定着しちゃってんな。

この黒狂三は狂三のような時間操作や分身を呼び出すなんて事をしてこないのだが、銃弾が瞬間移動しちゃってんだよな」

これも時間操作のひとつなのかも知れないんだけど、ユウが瞬間移動と時空間移動似て非なる物なんて言ってきたからこんがらがってくるぜ。

しかもノーモーションで撃ち込んで来るから避けるのが手一杯だぜ。

ユウに新しく修得させてもらった「完全演算処理」能力のお陰でどこに来るか把握出来るから楽だぜ。

あれ? 能力名これでいいんだっけ?

「! あぶねっ!」

また撃ち込まれた。

前言撤回やっぱキツイわ。

しかも相手どこにいるかわかんねえし。

相手はどこに逃げてでも撃ち込んでくるし。

クソッ！俺に明日は無いのか!?

「でもユウとバトってるから殺りやすい方か」

予測しろ。

相手はどこから撃つ？

撃たれないようにどうやって隠れる？

そういえば連続で撃ち込んで来ない？

さつきから単発の銃弾しか撃ち込まれていない？

相手に心は無いから何度だって撃ち込んでくる筈だ。

なぜそうしない？

しないのではなく、出来:ない:?:。

「・・・演算完了」

考えれば簡単だ。

影精霊達は霊力と聖杯の魔力で作りに込まれた存在。

しかし、それは100%混ざりきってる訳じゃない。  
何故かって？

お互い別の世界から来た存在だからだ。

基が違うのに完全混ざる筈がない。

だから精霊の力を100%発揮できないんだ。

だから黒狂三も時間を操作出来る能力に制限がかかってる。

それだけ分かれば充分だ。

それなら、

「殺せる」

場所も大体特定できた。

突然現れる銃弾。

恐らく能力は本体にはかかっていない。

今は銃弾に込めている筈だ。

なら何故姿が見えない？

簡単だそんなもん。

それは、

「影の中に潜んでる」

突如ヤマトの影から黒狂三が飛び出してく。

そして二丁の銃を構えるが時既に遅かった。

ヤマトの手には散弾銃が二丁持たれており、その弾が黒狂三の肉体に容赦なく襲いかかる。

その攻撃で核にもダメージが入ってしまった、膝を着いてしまう。

「狙うなら超至近距離で撃つた方がバレた位置から狙うよりはダメージが通ると思っ  
りしたのか？」

『!?!』

「ちゃんと逃げてればまだ撃たれなかったのに」

パンツ、と銃弾が飛んでいく音が聞こえる。

黒狂三の核目掛けてピストルで撃ち抜いたのだ。

そして撃たれたものはそのまま肉体が消滅していつてしまった。

「無駄な殺生してしまったかな」

だが撃たねば街の人たちが危険に晒されてしまう。

ならやはり撃たねばならなかったのだろう。

自分達が生き残るために。

「まあ気楽に生きていこうか。 時間と人生はまだまだだ」



「おう？零とヤマトじゃん」

「あれ？二人も終わったの？」

「なんか楽勝だったぜ」

「なら戻るか」

「そうだな腹へったし、俺当番だし」

（オカンか）

「今夜の夕御飯なんだ？」

「イナゴカレー」

「……………」

「……冗談だ」

「良かったゲテモノじゃなくて」

「比○カレーだお前たちだけ」

「何で!?!」

「自分達の心に聞いてみろ」

「……………帰る!!!」



「逃がすかー!!!」

## 第三十七話 秘められた過去

「あつ！三人帰ってきた！」

「おい。ロウウイー。零ー。ヤマトー。何でロウウイとヤマト死んでんのー？」

「比○カレー食わせた」

「王水肉じやが食わせろよ」

「食べてみたい！」

「やめとけアン。いくらお前でも胃がおかしくなるぞ」

「私に食べられないものは無い!!」

「あんまり？」

「兄様は食べられないかも」

「性的に？」

「おい！」

「・・・あんな戦闘の後でもこんな感じなのか」

「うむ。異世界の者達とはなかなかのものなのだなシドー」

「多分彼らが特殊なだけ」

「はいはい状況判断するわよ」

「お？ やつちやう？ 琴里ママン」

「誰がよ!!」

「んで、現在十香、四糸乃、琴里、狂三の四人の影精霊を倒したわけだ」

「それにしても何で狂三まで」

「精霊だからでいいんじゃない？ よくわかってないんだから」

「・・・それでいいのかしら」

「それよりも我らは聞きたいことがあるぞ!」

「質問。そのユウの真つ黒バージョンは誰ですか?」

色々と雑談? してるなか、耶俱矢と夕弦がバハムートについて問いかけてくる。

・・・まあ戦闘の間に突然やって来たらそりゃそんな反応するよな。

「紹介するよ。こいつは・・・」

「・・・バハムートⅡクレメンズ。ユウの分身であり影である存在だ」

「・・・どういうことだ?」

士道がよくわからない顔で説明を求めてくる。

そこでノリノリにこう答えてしまう。

「俺とバハムートは、同じ身体にくたいを持つてるんだよ。血も肉も魔力もな」

「双子!？」

「それは違う。俺達は共有しているだけだ」

「お互いにカバーし合ってるだけだがな」

「それじゃあバハムートの実力も？」

「俺とユウは、全く違う生命だが、それ以外は全て一緒だ」

「まさに分身だな」

そう言いつつ、ユウはバハムートの肩に手を置き、バハムートもまた満更でもなさそうに二人して笑いあっていた。

そんなときにヴィテから、

「因みにバハムートさんは私のお婿様でもあるんですよ」

最大級の。恐らく全世界でもとびつきりの巨大核爆弾を持ちいてその場を氷河期に変えてしまった。

「オムコサン？」

「オムコサンとはなんだシドー」

言葉の意味を理解していないのは恐らく十香だけだったと思う。

「ばっ! ヴ、ヴィテ!!」

「照れてるバハムートさんまじグツシヨブ!!」

「・・・ヴィテってこんな性格だったか？」

「安心しろ。これが素だ」

「ていうか、私はてつきりヴィテはユウの事が好きなのだ」と

「琴里様の考えは正しいですよ？ ユウ様の事も愛してますから」

「・・・はあ？」

「私はお二人の愛の奴隷なのです!!!」

「少し黙って落ち着けヴィテ!!!」

暴走しているヴィテを、ユウとバハムートがそれぞれヴィテの両腕を掴んで押さえ込んでいるがなかなか止まろうとしない光景を異世界組じゃない土道達は目を丸くして眺めていた。

「・・・逆ハーレム？」

「合ってるけど違うよ♪」

と、土道とアンが語っていたのは内緒だ。

「つまりヴェテは二人に助けられた事により二人の事が好きになったと」

「そして兄様と付き合ったら色々大変なので恋愛感情の多くはバハムートにやったんだよね。」  
6分の4くらい」

「それ3分の2じゃないのか？」

「それだと足りないとその本人が直談判」

その噂の本人を見てみるといつのまにかユウがヘッドロックをかけられていたので慌てて解放してやった。

因みにバハムートは既に間接技を決められてたらしく、魂が抜けかけていたみたいだ。

「そうになるとバハムートは既婚者なのか？」

「そ、そうなるな」

息も絶えかけているのに、ちゃんと肯定してくれる辺り根はいい奴なんだなと心のなかで思っておく。

「だが俺以外に既婚者いるぞ」

「えっ？ 誰だ？」

「んっ」

バハムートが指差した方向を見ると、そこにはそっぽを向いているユウ・ロウ  
ウィ・零の姿があった。

「つて、三人!？」

「クッソ！俺にも運命の人が!!」

「死神に來たりすんのかね？」

「俺は知らんけど、ヤマトはきついんじやね？」

「ミーレスさんキツツイお言葉お止めになつてください心が折れるどころか切斷されそうなんです」

この状況何て言えばいいんだろう。

異世界組は恐らく楽しそうにしているが、士道組は訳もわからないので反応に困っていた。

「大変じゃの主様」

「そうだよ……つて、六喰<sup>むくろ</sup>!？」

いつのまにか士道の隣に金髪のふわふわヘアのロリっ子が立っていた。

ふざけあつていたのだが、その突然の襲來にユウも反応が出来なかった。

「士道。そいつ誰だ？ 精霊か？」

「あ、ああ。俺の仲間だ」

そう言われ、じつと六喰を見してみる。

士道……。

お前ハーレムでも作る気かよ。

「……なあ、お主」



「ん？　なんだ？」

突然話しかけてきた六喰から予想外の言葉が出てきた。

「何を隠している？」

「……」

一瞬にしてユウから一切の迷いなき睨みが六喰に降りかかってきた。

濁りのない純粹な殺意の籠った威圧のない綺麗な瞳は、真つ直ぐに六喰を捉えていた。

「む、六喰？　何言ってるんだ？」

「むくには分かる。お前は何か辛い過去を隠してる」

「……何でそう思った？」

興味は無い。

答えだけを求めた言葉がユウの口から漏れだしてくる。

何の感情も持たない明確な殺意の塊みたいなそんな言葉が。

「むくと同じだったからだ」

「同じ……」

「むくと同じ失った辛さを知っているようなそんな心をお主は隠しておる」

その言葉を聞いて苦虫を噛んだかのような複雑な顔をしたユウと、事情を知っている

であろうバハムートがだいたい同じタイミングで領いていた。

「さあ！帰るぞ〜！」

恐らくこれ以上聞かれたくないユウが帰るように行動を起こす。

その意思を理解したのか六喰はこれ以上聞く必要はないと思い、その場にいたそれぞれが疑問を持ちながらも帰路についた。

その日の夜、ある夢を見た。

それは恐らく六喰に言われたからそのような夢を見た。

もしかしたら思い出したの方が表現としては最適なのかも知れない。

人は何か印象に残ったものや、己の欲を孕んだ心を満たすためにその光景を想像し、形にしてその瞬間だけ自分が望んだ景色を体験する。

それが夢と呼ばれるものだ。

それは時に幸福と呼ばれる望まれた世界をそのときだけ写し出すものだ。

しかし、どんなものにも表と裏があるようにこの夢世界でも幸福な世界があれば不幸な世界がある。

悪夢と呼ばれるのがそれだ。

だが、今彼が見ているのは、幸福な世界でも不幸な世界でも無い。

どちらかと言えばそれは具現化された記憶だというものだ。

過去に起きた印象に残ったものをその眠っている時間に見る夢とはまた違う世界だ。

彼はその記憶の世界をたった一人で歩いていく。

踏み続ける大地は、生命の途絶えた枯れ果てた土の塊。

空は黒と白が混ざらずそれぞれ色濃く別れている雲が日の光りを一点ずつ漏れさせ

ている。

風は感じないし、生き物の鼓動も感じない。

そんな中終わりが見えてきた。

歩いていた大地のその先が崖になっている。

その崖の上に立つ。

そして見据える。

このような大地に、このような空に、このような世界に変えた存在を。

そして再び思い知らされる。

今見ているのが何者なのか。  
いったいどんな存在なのか。

天使のような十翼の翼を幾つもその身に纏い。

光を受けず跳ね返し、影すらも存在しない。

ただ空を舞い、陸を支配し、世界を制す。

生き物であれば誰もがその偉大さに恐れをなす。

十二の星を自らの糧とし、力に変える。

始と終。 生と死。 命を導き命を奪うもの。

これが。 これこそが。

森羅万象の頂点に立ち、支配する意思。

それから放たれた創滅の光があらゆるものを飲み込んでいく。

心も身体も。

その存在までもが。











「・・・またか」

あれは夢であり、夢ではない。

あれこそが戦う理由。

決して折れることの無い覚悟の現れ。

だからこそ彼は立つ。

もう二度と。

あの光景を見ないために。

誰もいなくならないように。

世界を消さないために。

あらゆる命のためにまた戦いに立つ。

その先にある未来を知っているから。

その未来の中で生きれる未来もあるから。

そして手遅れになった未来もあるから。

そして、

「・・・頑張つて世界を守りますか！」

遙か先の外れた未来の世界も助ける為に。

## 第三十八話 海旅行での戦い（笑）

「すう・・・すう・・・」

「流石にユウも飛行機に乗ってる間は寝ちやうんだな」

今俺達は来禅高校の修学旅行で飛行機に乗っている。

この時期は学校とは関係なく俺達は大変だからこういう時間はその事を忘れられる。でも今俺の隣に座っているユウはそんなことお構い無しに眠りこけている。

・・・そして十香達はと言うと、

「おのれー!!ちよこまかと逃げるな鳶一折紙!」

「逃げてるのではない。立派な戦略」

レオン達から教えてもらった格闘ゲームで盛り上がっていた。

どうやら令音さんによって先生方は全員眠らされているので、ゲームしていてもバレないみたいだ。

というか、何してくれてんだあの人は。

そして一番驚きだったのは、

「あらあら?十香さん?また負けちゃいますわよ?」

この修学旅行に狂三も来ていることだ。

何故か分からないが、大人しくしている様子から今はなにもしてこないと思う。

他のメンバーだと、耶俱矢と夕弦はユウと同じく二人仲良く眠っているし、ロウウイは音楽を聴いている。

零とヤマトは、何やらカタログみたいのを一緒に見ているし、レオンとミーレスと隼はトラップでポーカーをしていた。

因みにここにいない精霊達と異世界から来た皆は天宮市でお留守番というわけだ。

流石に学生以外はこれに参加出来ないからな。

それにしても、この前の戦闘で六喰がユウに言っていた言葉はどういう意味だったんだろう？

実はこの事件の真相が分かってたりとか？

でも六喰が体験したことのあることって言えば、

「知りたいか？」

「うわっ!?!起きてたのかよ!」

「さつき起きた・・・あふう〜」

ユウが大きな欠伸をして、そして真剣な眼を向けてきた。

「で？ 知りたいか？」

「・・・いや、止めとく」

聞いたら後に戻れなくなりそうだったので、聞かないことにしよう。

それが俺の為でもあり、ユウの為でもあるだろうから。

「賢明な判断だ」

「そういえばヴィテは付いてこなかったのか？ 付いてきそうだったけど」

「最近影が薄くて出番がなかったベストと一緒に残って調べものをするってよ」

「め、メタいな」

「まあ何しようがアイツの自由だ。 あっちにはバハムートもいるし大丈夫だろ」

「・・・それもそうだな」

バハムートはユウと同じ力を持っている。

そんな人が街に残ってるなら、またDEMが仕掛けてきても平気だろう。

「今はこの旅行を楽しもうぜ？」

「ああ！」

「その頃、士道達の席を見続ける一つの影が、  
「こちらは問題ありません。監視を続行します」



DEMのエレン・M・メイザースが隠れていた。

「我々の計画のためにもあの異世界から来た奴らはあまりにも危険。隙を見て排除しなければ」

だが正攻法では恐らく勝ち目はあまり無いでしょう。

なら彼らの行動を記録し、それに合わせて始末するとしましょう。

そのための変装としてカメラマンになってみましたが、正解でしたね。

待っていなさいユウⅡクレメンズとその仲間達。

そしてこの私に屈辱を与えたバハムートⅡクレメンズ。

今度こそ息の根の止めてやります。

まずは無事に到着ですか。

このときのために旅行先を変更させて良かったです。

後は潜伏しつつ、彼らの動向を探れば、

「では行きましょうか」

「あつー！カメラマンさんがいる！」

「え!?マジマジ!?」

「マジやばくねー?」

「!?」

くっ！まさか来禅高校の生徒に邪魔されるとは！

そしてなんでしようこの気持ちは。

なんかこの三人に絡まれたら嫌な予感しかしないような感覚は！

「くっ！」

「「あつ！逃げた!!」」

ここは素直に撤退です。

私の目的は彼らの動向を探ること。

それなのにあんなのに捕まって時間を食われる訳にはいきません。

そして走っていった先には、

「・・・あつ？」

「・・・えっ？」

運命のイタズラかなんなのか。

今もつとも会いたくない存在筆頭角であるユウ・クレメンズの目の前に出てしまった。

・・・最悪です。

「……」

「……」

……あれ、エレンだよな？

いきなり飛び出してきた人影を見てみれば、変装しているのかカメラマンになっているエレンと鉢合わせになってしまった。

恐らく俺たちの監視に来たんだろうけど、こんなところにまで来るのかよ。

そんだけアイツ等も必死なのか、それともなんとなくなのか。  
でも恐らく前者だろうな。

「……」

「……はあ〜」

「っ!」

「馬鹿馬鹿しいや」

「は?」

「お前は『カメラマンのエレン』だ。んで俺は修学旅行に来た来禅高校の生徒ユウだ。

それでいいだろ」

「は?え?はあ?」

今一ピンと来ていないエレンを横目に、俺は制服のポケットからチュツパチャップス

を二本取り出すと、

「ほらやるよ」

「えっ?おととっ」

一本をエレンに投げ渡して、もう一本の袋を取ってさっさと口にくわえる。

「選別だ」

「えっ?いや待て!」

「じゃあな〜」

そして俺は士道達が待っているであろう場所に向かった。  
生徒達の安否を確認するための集合場所にへと。

「・・・なんだったのでしよう」

明らかに奴は、私の正体に気付いていた。

その上で見逃したと言うのかあいつは。

そしてこのチュツパチャツプスは食べるという意味なのだろうか。

もう一本を食べていたから毒は無いでしょうが。

恐る恐る袋を取って食べてみると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・美味しい」

そこらのチュツパチャツプスとは比べのものにならないほどにかなり甘かった。

そして監視そっちのけでチュツパチャツプスを舐めきるまで舐め続けていたのは、それから三十分以上もかかってしまった。

「零」

「ん？ユウか。どこ行ってたよお前」

「バカに会ってた」

「は？」



## 第三十九話 少女の秘密

「寝るかー」

今俺達はビーチにいる。

何故かって？

今は自由時間だから、皆がそれぞれ自分達がしたいことをこのビーチで遊びまくっている。  
いる。

どんぐらいかというと、

「プールでの怨み！晴らさせてもらうぜロウウイ!!」

「零。ちよつと魔銃（水鉄砲）よこせ」

「投影開始」

「水ならいくらでも持ってこれるぜ」

「電流も混ぜとく」

「それではどうぞ」

「一対五つてセコくね?!」

・・・こんな感じに遊んでるよ。

士道達は、こことは別のビーチで遊んでるだろうな。

俺は日焼けしたくないから日傘の下でねっ転がってる状態だ。

でもそろそろつまんなくなってきたな。

「そこから歩いてこよつと」

起き上がって歩いていったところで、後ろから爆発音とレオンの叫び声が聞こえたけど気にしない気にしない。

そんなこんなで適当に砂浜でのらりくらりと歩いていたら奇妙なものをめっけちゃったよ。

「……お前なにしてんの？」

「……気付いたら埋められていました」

エレンが首から下が砂で埋まった状態で見つげちゃったよ。

何でこんなことになっているのかは、多分本人の威厳を守るために言わないんだろうな。

……今更のような気もしなくもないんだけどな。

「そういえば、今日はあの娘はいないのですね」

「あの娘？……ああ、ヴィテのことか！」

「いつもあなたにくつついているのかと思っていました」

「あいつにだって自由な時間はあるさ」

あいつだって、今を生きてる『人間』なんだからな。

「・・・そういえば聞きたいことがあります」

「敵同士なのに聞きたいこととか、答えると思ってるのか？」

「どうせ答えるでしょうに」

「ナゼバレタシ・・・」

「・・・あの娘・・・ヴィテは何故生きているのですか？」

「・・・ヴィテは人間なんだぞ？」

何をおかしなことを言ってくるんだ。

「私は心臓を正確に貫きました。・・・なのに何事もなかったののようにこの前の戦いに

立っていました」

「・・・」

「彼女は本当に『人間』なのですか？」

少し吹っ掛けて見ましたが、本当に何か秘密があるのですね。  
ずっと気になっていました。

あの夜、彼女の背後から心臓を貫き、確実に止めを差したと確信していました。  
なのに彼女は生きていた。

なら考えられる可能性は二つ。

一つは、彼女は再生能力がある事。

それならば頭を吹き飛ばさなかった私のミスですが、あのとき彼女は出血多量という重傷を負わせたのにも関わらずその傷の後もない。

もう一つは、ユウが蘇生させたという事。

しかし、こちらは確証が無い。

いくらなんでもチートなユウでも他人を死の淵から生き返させられる訳がない。

そんなことが出来るなら、あの影精霊をも生き返らせる事が出来、そこから何かしらの情報が手に入る筈。

なのにしらないどころか完全に消滅させている。

だから可能性としては、前者が当たりだと思えますが、どうでしょう。

「……」

「先程からどうして黙っているのですか？」

「……言ってもいいか」

「!!?」

ほ、本当に答えてくれるとは思いませんでした。

そして彼がこちらに向かって言った答えは、驚愕のモノでした。

正直に言えば聞かなければ良かったと心の底からその時思いました。  
その内容は、

「ヴェテにはな、『臓器』が無いんだよ」

「臓器が・・・無い？」

「正確に言えば臓器の機能が無いだな」

エレンは少しだけ意味不明で、それとは裏腹にじやあ彼女は、と言いたそうな顔をしながら聞いてきた。

その返しに、ユウは少しだけ顔を曇らせながら答えた。

まるで思い出しながら悔しがっているような顔をしながら。

「少しだけ昔の話だ。俺の世界にはある実験を行っていた科学者がいたんだ」

「科学者？」

「『最強の強化人間兵器』を作ろうっていう研究だ」

「人間・・・兵器？」

「科学者っていうよりは研究者だったなこりや。とりあえずそいつがそんな研究をしていたんだよ」

「・・・」

エレンはユウを見据えながら、話を聞き続けていた。

それを確認しながらユウは再び話し始めた。



「そしてそいつが考えたのが、『過去・現在・未来』その全てを見据えながら相手を確実に殺せる人間兵器を作ろうって魂胆だったのさ」

「それは……」

「そいつは、前提条件としてその三つを統べる三時神ときがみを捕獲して、その魂に耐えられる肉体を探し出したんだ」

「その肉体が……」

「……当時五歳だったヴィテさ」

「っー」

予想していたよりも遥かに若い年齢。

だが臓器が無い理由はいったい？

そう疑問に思ったエレンを察してかその答えをユウは述べた。

「研究者にはある職業の友人がいてな。そいつの職業が降霊術師ネクロマンサーなのさ」

「……」

確か降霊術師の行う術は、死者の魂や遺品を媒介に魔術を行う者達の筈。いったい何を？

「まずはヴィテを殺した」

「っ!？」

「そのあと肉体を臓器を全部取り除いて、あらゆる怪物の血肉や骨格を使って肉体を改造したんだ」

「なんて酷い……」

「……そしてヴィテの肉体に四つに御魂を降霊させたんだ」

「……四つ?」

恐らくその内三つは、先程話していた三時神の事でしょう。

あともう一つの魂はいつたい? ……まさか。

「三つは三時神のものであり、四つ目は精神汚染されたヴィテの魂だ」

「やっぱり……」

「感情の部分抜き取り、感情の無い殺戮兵器を作り出したって訳さ」

恐らく死に対する『死にたくない』という感情を利用したのだろう。

そういった心の叫びを感わすのも降霊術師の得意分野でもある。

しかし、非人道的な研究だ。

「殺戮兵器となったヴィテは、たったの十年であらゆる生物を狩り尽くした」

「……生物?」

「人間だけじゃない。幻獣、神獣、精霊、妖精。本当にありとあらゆる命を狩りまくった」

「……」

「そんなある日に、等々俺達に出会っちゃった」

「あなた達と？」

ユウ達が相手ということは、あの影精霊相手に余裕な彼らからすればただの少女の彼女では相手になら無いでしょう。

「俺達はヴィテ相手に手も足も出なかつた」

「は？」

「ヴィテの『未来視』は、俺達の想像を遥かに超えた成長を遂げていた。無限に近い数の未来の欠片からこれから辿る未来を見据えられるぐらいのな」

「そ、それは」

本当に相手が何をしようとか何も変えることが出来ない。

その決まった未来が覆る事が無い事を決定付ける事になる。

それほどまでに強かったのかあの娘は。

「だけど俺達は最後まで諦めなかつた」

「え？」

「どうやっても決まってる未来なら、分かつた上で戦つたのさ」

「そ、そんなこと！」

簡単出来る訳じゃない。

むしろ不可能だ。

こいつらは何を言っているのか。

「そして俺達は勝った」

「・・・は？」

勝った？

決まっている未来を見据えられる奴相手に？

「そしてヴィテを助けた。ざっくりするとこんな感じだな」

「ま、まだ答えは聞いてませんよ！私はどうして彼女が死なないのかを！」

「答えは二つ。既に肉体が死んでいたのと、生命活動を停止させる生きた回路が無いか

らだ」

「なっ・・・っ」

そしてユウの顔が影に隠れた。

「ヴィテを初めて見たとき思い知らされたよ」

「え？」

「俺はまだまだ全然だったんだな、ってな」

「・・・」

「俺は・・・助けられた命を助けられなかった。それが自分の力不足を実感させたんだ。

だから俺はもつと強くなる。『全ての命を守る』為に」

「……………」

それがこいつの強さ。

あんなに強いのに、まだまだ強くなろうとしている。

「…………そろそろ去るか。じゃあなエレン」

「…………ええ」

「…………私もアイクを守ろうと思えば強くなれるのでしょうか…………。」

「つて、私をここから出してくださーい!!!」

「・・・レオンどうした？」

「鬼だ悪魔だ金剛力士阿修羅像のオンパレード祭りなんだ」

「」「」「やりすぎちゃいました」「」「」

「うん切腹♪」

「・・・」

「ヴィテ？どうしたの窓を見続けて」

「・・・いえ何でもありません」

「・・・そう」

「・・・」



ありがとうございますユウ様。

私は今とても幸せです♪

私を救って下さって、本当にありがとうございます。

## 第四十話 強さと覚悟

その日の夜、士道はある人物を探していた。

ずっと疑問に思っていたことがある。

しかし、それは一度話を聞いたときには、なるほどと自分なりに解釈して納得してしまっていた。

ただどここれまでの出来事からその疑問はより重くより大きくなって再び浮上してきた。

だからこそ聞かなければならない。

本当は何を思っているのかを。

本当は何を考えているのかを。

本当は何をしようとしているのかを。

再び現れた疑問は時間とともに膨張していき、もはや破裂寸前にまで迫ってきていた。

これは自分の勝手なのかもしれない。

でも、もう引き返せない。

聞いて、感じて、思っ、そして考えて答えを出さなければならない。

そして、目の前に目的の人物を見つけた。

「・・・ユウ」

それが俺が出来る事だと信じて。

「・・・土道か」

突然背後に現れた気配に対して、俺は普通に挨拶するように言葉を出した。けどそれは表面上で取り繕ってるだけだ。

その理由は、土道の目が教えてくれたからだ。

真剣に何かを知りたいという思いが強くと伝わって来たからだ。

でもそれをこちらから聞こうとは思わない。

ちゃんと土道の方から聞かせてもらいたいからだ。

「それでどうした？ こんな時間に外に出歩いて」

「・・・もう分かっているんじゃないのか」

「・・・」

「教えてくれユウ！ お前は確かこの世界と他の世界を守るために来たんだよな」

「そうだな」

「何の為にだ？」

「全ての生命を守る為にだ」

「それならあの影精霊だって助けられる筈だ」

「あいつらを助ける？」

正直に言つて、なに考えてるんだ？、と思つた。

でも次の言葉を聞いて、俺は目を見開いた。

「あいつらだって、この世界で生きてる！ 命のあるちゃんとした生き物だろ！」  
「!!」

「驚いたな。

まさかそれに気がついたとは」

「否定しないんだな」

俺も最初に琴里から聞いたときには疑った。

あいつらは、魔力と霊力が混ざりあつて生まれたものだけど、数値上ちゃんとした生命体だった。

最初の十香の影精霊のときには色々と事態が急変しすぎて、それを信じてる余裕が無くなった。

それどころか疑問が出てきた。

全ての生命を守る——それは確かに素晴らしいと思う理想だ。

けれど幻想でしかない。

そしてユウはこの事を知っていた。

あいつらが生きてる存在なのを知っていて殺していた。

それも一度ならず二度、三度と繰り返して殺していた。

だから俺も言いたいことを言う。

いったい何を考えているのか知るために。

「お前は確かに強い。でもそんなに力があるんだからあいつら影精霊達だって救えるはずだ!!」

「・・・」

「ペストだって救うために、別の世界に連れてきたんだろ。 だったら影精霊達を救うための方法があるはずだ!」

「・・・お前お人好しって言われないか?」

「質問の答えになってないぞ」

「なら結論から言わせてもらおうと、俺は影精霊達を救えない。」

「——ッ!」

「そもそも根底から間違えてるぞ」

「・・・何をだ?」

そう聞き返すと、ユウは、はあ、っと大きな溜め息をついた。

そして俺を見据えてこう言った。

「あいつらは生み出されたんじゃないやなくて、作り出されたってところだ」

「・・・ちゃんとした命のある生き物じゃないと言うのか? そんなの間違ってるだろ!!」

「話しは最後まで聞けって」

「・・・」

「確かにあいつらは魔力と霊力が混ざりあって作られた。 だけどそれなら何故十香達

と同じ形に作られてる?」

「・・・それは十香達が精霊だからだろ」

「何故精霊だからその形にする必要がある？」

「？ 十香達が強いからその形にしてるんじゃないのか？」

「だったら聖杯は尚更作る対象を精霊では無く、お前かエレンの形に作ってる筈だ」

「な、なんで俺とエレンなんだ？」

「なんで、とは？」

「エレンはともかく俺が選ばれる理由が分からないんだ！ いったいどういうことだ！」

訳が分からなくなつてついついキツイ言い方で聞いたです。

だつて何も分からないのにそんなことを言われても、と思つてしまふ自分を見て、ユウは少し溜め息をついた。

「良く考えてみるつて。 わざわざ強い奴の偽者を作り出すんなら、一番強い奴をコピーすればいいだけの話だろ？」

「まあ、そう・・・だな」

「そしてお前は十香達が強いから十香達の偽者を作り出したという答えにたどり着いた」

「そ、それがどうした」

「でも十香達は霊力が封じられていないにも関わらず、お前の中には霊力が封じられて



いる。狂三は知らんけど」

「？」

「最低でもお前には九つの種類の霊力が封じ込まれている」

「??」

そんな当たり前な事を言っつて、何が言いたいんだと疑問符を次々と発生させていたら、ユウに思いつきり溜め息をつかされた。

「まだ分かんないのか？」

「??」

「だから手っ取り早くお前をコピーすればいいだけの話だろ」

「あっ」

「それかエレンに精霊達の戦闘能力を付与した影人形を作ればいいだけの話だしな」

「そ、それは」

「だけど聖杯はそれが出来なかった。いやしたくても出来なかったって言った方がいいな」

「な、何でだ？」

士道は少々驚きながらも聞き返す。

この話を聞いていても、自分の質問の答えにはなっていないから。

それどころかまた疑問が出てきてしまった。

「なぐに、ただの容量不足だ」

「は？」

「言つとくが、ここの聖杯は既に多くのリソースを消費してこの世界に干渉している。

それだからお前をコピーするだけの容量が無いんだよ」

「・・・だから十香達をコピーしているのか？」

「この世界の起点は精霊だ。そして靈力をこんな大規模で変化させてしまえば当然容量を食いまくってしまう。ならどうして十香達のコピーを作り出したのかに行き着くわけだが」

「そ、そうだ！ それにどうして助けられないんだ！」

「落ち着けて。でもこれで説明は終わるわけなんだが」

「・・・」

「・・・お前は知っているはずだ。精霊が引き起こす。または引き起こしてしまう

災害を」

精霊が引き起こしてしまう災害？

そして一つの可能性に辿り着いてしまう。

俺も数ヶ月前まで恐れていた事を。

「・・・空間震」

「それが影精霊を作り出した理由だ」

「で、でも！ あれはこつちの世界にやって来なきや発生しない！ 聖杯はこつちにあるんだろ!」

「なら簡単だ。 起こせないなら、起こせるように改造すればいい」

「・・・魔力」

「そして影精霊達には核が存在した。 それがただ形を保つだけなら良かったんだけどな」

「・・・まさか」

「そうだ。 あれは空間震を起こすための爆弾だ」

「ツ!?!」

「だから救えない。 もし生かせばそれだけで被害が甚大になる」

「そんなのって・・・」

「安心しろ」

いつの間にか俺の背後に移動していたユウから言葉を投げ掛けられる。

その言葉には、確かな自信が込められていた。

「この世界を壊させやしない。 影精霊達もただ殺している訳じゃない。 お前らも

守ってやる。その為に俺は強くなったんだ」

そしてユウはそのまま歩き去って行ってしまった。

アイツがいったいどれだけ強いのかは知らない。

でもきつとこの世界に居る俺達の為に戦っているんだなと思ってしまった。

けれど影精霊達もただ殺している訳じゃないってどういふことなんだと、また疑問が発生してしまった。

もしかしてまだ生きているのか？

聞こうと思ひ、そのまま後を追ひ掛ける。

「兄様も甘すぎだよ」

「うわっ!？」

いきなり背後に声がしたので慌てて後ろを振り向いてみると、アンが立っていた。

この兄妹は相手の背後に回るのが好きなんだろうかと思ってしまうけど、それより気になる言葉を口にしていたので聞いてみた。

「ユウが甘い?」

「ほんとそうだよ。本来なら貴方が見えているあの透明な球体にそのまま殴り込みに行けばそれだけで終わりなんだよ」

「いやそれはどうかと思うけど」

「でも兄様はこの世界に最低限の被害を出さないように行動してるんだよ？」  
「え？　だつてそうしなきゃ色々不味いんじゃない？」

確かユウはそんなことを言っていた気がする。

自分達が極力干渉しないように抑えてるつて。

「だつて兄様はその気になれば、今兄様が持つてる聖杯を使えばこの世界の聖杯に干渉出来るんだよ？」

「・・・あつ」

「それをしないのはこの世界の人達に影響を及ぼさないように使わないんだよ」

「・・・」

「ほんとに甘いよ・・・でもね」

ふと、続けて言つた言葉に俺は驚愕した。

「そんな兄様だからこそ私は兄様の為に命を張つてでも戦える。　そんな兄様だからこそ私は兄様の為にどんな敵とも戦つて勝つてみせる。　そんな兄様だからこそ私は兄様の為に一緒に世界を守るために戦う。　そんな兄様だからこそ私は兄様の為に兄様の夢を手伝つて同じ景色と一緒に見るために側にいるんだよ」

ユウの夢は理想であり、幻想にしか過ぎないと思つていた。

それはそうだ。

だって一人だったならそんなの出来るわけが無いからだ。

でも一人じゃなく、二人だったら？

二人でもなく、三人もいたら？

三人でもなく、もつともつと多くの人達がいたら？

そしてようやくユウの強さが分かった。

ユウの強さは、ユウ個人だけじゃない。

ユウの周りにいる多くの仲間達とともに夢を叶える為に。

その多くの仲間達を守り、一緒に夢である世界を現実にするために、大切な人達の為に戦い続け、守り続け、そして『全ての生命を守る』願いを皆で叶える為に強くなった事を。

・・・ああ俺はとんでもない勘違いをしていた。

俺さえもユウの力の一つだというのに、そんな俺が否定してしまったら夢を現実に出  
来ないじゃないか。

「ようやく・・・分かったよ」

「そう。ならさっそく仕事だよ」

その言葉に俺は真っ直ぐ空を見据える。

なら俺も戦ってやる。

元よりこっちのも関係者なのだ。

足を引っ張ってばかりではいけない!!

「アン！ 案内してくれ！」

「じゃあついてきて！」

「やれやれ。 やっぱりアイツが関わると俺の仕事が瞬く間に片付いてしまう。 こつちに来る途中であのヴェテに感付かれそうになっただけ。 まあバレても何の問題も無いな。 どうせ全部バレてしまつてるだろうし。 おかげでこつちの仕事もやらなくてすむから見に来るだけで終わりだしな。 さあ、特異点はまだ一つしか解決していない。 これからも様々な試練が襲い掛かってくるだろう。 それでもアイツ等なら必ず全部片付けてしまえる。 果たして全ての世界を救えるかな？ それとも【虚空世



界」を生み出してしまうのか？ 比率で言えば99：1の割合だろうな。 だがたった

1%で「虚空世界」が出来てしまうということになる。 結局は頑張り次第つて事だな。

頑張りたまえよつてこの台詞なんか上から目線過ぎてなんか嫌だな。 うんこう言

おう。 頑張れよ？ そうしなきゃ全部が飲み込まれてしまう。 それが俺から捧げ

るエールだ。 数々の世界を旅歩き、数々の世界で生まれた絆とともに見事お前の夢を

現実に変えて見せる。 それがお前の俺への挑戦権だ。 叶えてみせろよユウ＝クレ

メンズ。 俺とお前は同じ夢を抱き、そして全く別の未来へ辿ったんだ。 これぐらい

は越えてみせろ

……さてと、俺は説教という名の愚痴を聞きに行くか」